
WorldChange

鮮音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WorldChange

【Nコード】

N9294H

【作者名】

鮮音

【あらすじ】

平凡な学生、ふじわらかなで藤原奏は、ある日、見知らぬ世界で目を覚ます。困惑する彼女の前に、一人の少女が現れる……

第0章 序章

ゆらりゆらり……

感じるのは水面を漂う感覚だけ……

何もない、何も見えない空間……

私は力なく漂っている……

何故此处に居るのか、そもそも此处が何処なのか……

……解らない

此处が何処なのか、私は何故、水面に漂っているのか……

……解らない

私はごく一般的な学生だ……

その記憶も、今となつては曖昧だが……

曖昧？……ああ、成る程

これは『夢』……

意味もない、無味乾燥なつまらない『夢』……

何だ、そう考えれば簡単な話だ。

『夢』だと気付いたら『夢』は覚めるものだ。

さあ！私は気付いたよ？

だが、一向に『夢』は覚めない……

『夢』ではないと思ったら、突然不安に駆られた。

……いや、『夢』、うんそう、これは『夢』

自分に言い聞かせてみる……

……よし、そんな気がしてきた

自分の単純さに感謝……

そうと決まれば寝てしまおう

まさか『夢』の中で二度寝するなんて思わないよねえ
誰に宛てた言葉かは解らないが……

そんな事を考えていると、遠くで声が聞こえた。

…もおゝ誰？

至って真面目に寝ようとしていた。

それを邪魔された……

多少の苛立ちがあつたが、そろそろ現実逃避を止めようと声の主を
探そうと思った……その時。

ガゴンッ……

脳天に何やら重く感じる感覚……

急速に意識が遠退く……

……ああ、『夢』じゃなかったんだあ……

そんな能天気な事を考えながら……

深い深い意識の谷間へと墜ちていった……

第一話　～異世界～

「おい、起きろ」

誰かが頭を揺すっている。

普通肩とかじゃない？

そんな疑問を取り敢えずスルーして目を開けた。

「ん……眩し」

明るい日光、眼球にクリーンヒット。

逃げるように顔を逸らす。

今気付いたが、自分が転がっているのは柔らかい草の上だ。
……
服は濡れてるし……

「（最悪だ……）」

ぼんやりとそんな事を思っていると。

「おい、お前」

キツイ口調の言葉を浴びせられた。声色からして少女の物だろうか。

声の主を探す。しかし探すまでもなく見つかる。

「……………」

声が出ない。

10歳程の少女だった。全身を青を基調としたワンピースで包み仁王立ちをし、こちらを見下ろしていた。

こちらを見下ろす瞳は澄んだ青。目尻は強気にピンと釣り上がっていた。

青い髪は軽いウェーブを描き、肩口で綺麗に揃えられていた。

肌は透き通る白。その肌はまるで初雪のようだった。

少女の全てが美しかった。

可愛い少女は見たことがあるが、美しいと形容したくなる少女は初めてだった。

だが、こちらが言葉を失っている理由は他にもあった。

それは常識を逸脱した物だった。

「は……………羽？」

漸く言葉を絞りだした。

そう、少女の背中には薄い羽が生えていた。

自分はそこで一つの結論に至った。

「（うん！私は夢を見てるんだ）」

完全な現実逃避。

さあ、寝よ寝よ。と、再びその場にゴロンと転がった。

「（まさか夢の中で二度寝するなんて……あれ？何か……デジヤヴ？）」

ごっくん…

頭部に鈍痛。

「いい加減起きろ」

少女が苛立ちを隠そうとせず言った。

手には何処から出したのか拳大の氷が握られていた。

「いやぁ……そのお……」

「まったく、俺が折角助けてやったのに。礼の一つも無しかよ」

「（うわっ口悪っ）」

少女の想像出来ない口調に開いた口が塞がらない。

「お前、名前は？」

「へ？」

啞然としていたので聞き逃した。

少女の額に、じんわりと青筋が浮かぶ。

「名前だよ、な・ま・え！」

ガンガンと少女はこちらの脇腹を何度も蹴り、踏みつけた。

どうやら、かなりご立腹のようだ。

「ごっごめんなさいっ！？奏です藤原奏！！ああ~~~~~っ
?！」

揺るがない力関係がこの瞬間に成立した。

「カナデ?……っち、何だよその変な名前。……グルイズの出身か?」

「何処ですか?そこは……」

見た目完全に年下の少女に敬語というのも違和感がある。だが、腹を蹴られるのは勘弁したいので、少女の気に障らないようにした。

「はあ?何処つてお前……」

そこまで言つて、少女は考え始めた。

「……あれ?」

目の前の風景が歪む。

「おい!」

停電のように真っ暗になった。

遡つて数時間前……

「……と言つわけで、貴女に神言しんげんが降りました。何れ貴女の下に使者が現れるでしょう。……聞いていますか?ミリア?」

「ああ？聞いてるよ」

ミリアと呼ばれた少女はふてぶてしい態度で答えた。

見た目はこの上なく美しいのだが、この口調が全てを台無しにしている。

ミリアの向かいに座っている女性、セリーヌ・ラピスは笑顔を崩さないようにしていたが、その笑顔は完全に引きつっていた。

煌びやかな銀の長髪、端正な顔立ち、神官服にその身を包んでいる。普段は大人の魅力に溢れる彼女も、怒りを抑えるその姿は何とも滑稽だった。背中が生えた、ミリアよりも立派な羽をぶるぶると震わせている。

それに対しミリアはセリーヌの怒りなどどこ吹く風、気だるそうに脚を組み、両腕は椅子の背もたれにダラリと広げている。

真上を見上げるその姿は真面目に話を聞く様子は見受けられない。

「貴女は神聖な教会でよくそんな事が出来ますね？」

「そうだな」

セリーヌは大きな溜め息をつき、一つ咳払いをしてから笑顔、だが、額には青筋が浮かんでいた。

「貴女にはもう一度神の尊さを説く必要があるようですね」

「うげえ、またその話かよ」

逃げようとするミリアの襟をセリーヌは、細身の腕からは想像できない力で掴んだ。

満面の笑みで……

遙か昔……

この地には三種が混在していた……

一つは人、平凡であり、可能性に満ちたもの達……

二つは妖精、自然を体現し、秩序を司るもの達……

三つはエルフ、力を持ち、三種最優のもの達……

エルフは力を溢れる用い、三種を統べようとした。

エルフは妖精を使役し、人を奴隷の如く扱った。

幾百年、人は疲弊し、妖精は枯れはてようとしていた……

その時……

神の使者が現れた。

神々しき光を纏いし者、妖精の女王、オリフィエルと力を合わせ、
悪を打ち倒す。

使者は人々に告げる。

神は常に皆を見守っている……

もし、争いが戦乱が始まるのなら……

使者は世界救済に再びこの地に舞い降りるだろう……

「……………」と、神は常に私たちを見守り、祈りを捧ぐ私たちが助言を受けるのです」

セリーヌは、ほうと頬を赤く染め、両手を組み、神への感謝を表していた。

「分かりましたか？貴女も妖精ならば、神に祈りを捧げ……………」

ミリアに目をやる。

彼女が居た場所には紙切れが一枚。

『話し長いんだよ』

プチン……

何かが切れる音がした。

教会内を掃除していた他の妖精もはつきりとその音を聞いた。

「あんの……………」

グシャツと紙を握り潰した。セリーヌの顔からは笑顔が消え去り、

代わりに般若のようにおぞましい形相になっていた。

「馬鹿妖精がああー！」
教会に怒声が木霊した。

「そういえば、詳しく聞いてねえな」

空中を浮遊しながら、ミリアは考えてみた。

「つーか、何で俺なんだ？」
解らない……

確かに自分は妖精であり、形のみだが神官だ。

だが、あくまで形のみであり、信仰はさしてない。

言い伝えでは、使者は知識がない為、妖精が使者を導くことになっている。

何故導くのか、何故知識がないのか……

謎ばかり……

ただ一つ、確かな事は……

「何はともあれ、面倒事だって事だな」

ミリアは溜め息をついた。そして、切り替えて近くにある湖へと向かう。

そこはミリアのお気に入り場所であり、特別な場所だ。

「昼寝でもして、その後考えつか」

そうと決まれば全速前進、一直線に湖へと向かった。

「……………で、その湖に浮かんでいる私を見つけたと」
「まあな」

「うんうん、成る程成る程……………って、納得出来るかああっっ」

「うおおっ?!」

奏はミリアの肩を掴み、ガクガクと揺すった。

この世界、アースフィルの中で最も発展した都市、ウィルネス。使用者が創った都市であり、妖精と人が互いに力を貸しあいながら発展を続けている。自然が豊かな住みやすい場所だ。

ウィルネスの中心市街、そこから少し外れた所にミリアの自宅がある。

そして、二人はそこで話を互いの情報を交換している。と言っても奏には信じられない事だったが……

「そんなファンタジー要らないって！今年、大学受験控えてんの！いや、それより使用者って何よ。私知らないってそんなの。私は普通

の女子高生だつての！」

奏はミリアをまくし立てる。まくし立てると言うよりは完全に我を忘れていた。

ガゴンツ

ミリアが氷で奏の脳天を強打した。

氷の妖精であるミリアは、冷気を操り、氷を生成する事が出来る。

「落ち着いたか？」

強打され、奏は我に返った。

「あ……うん」

脳天から血をダラダラと垂れ流しながら奏は答えた。

「それにしても、異世界………か」

ミリアはぼんやりと窓の外を見た。立地は然程良くはないが、住めないわけではない。

「ねえ………」

「ん？」

奏が少し難しい顔をして聞いた。

ミリアは何事かと思い、奏を見る。奏は出会ってから一番の真剣な

表情をしていた。

「あのさ……………」

ミリアはゴクリと生唾を飲み込んだ。奏の表情から相当緊張していたのだろうか、飲み込む音が身体の外まで聞こえた。

奏が真剣に話す話題…………

ミリアの頭には世界救済に関する事が巡り廻っていた。

奏の唇がゆっくり始動する。ミリアは、その全てがスローモーションに見えた。

再び生唾を飲み込む。そして、紡ぎ出された言葉は…………

「妖精って……………も、森とかに住んでるものじゃないの?」

「……………」

言葉を失う。

だが、数秒の後にミリアは腹を抱えて馬鹿笑いを始めた。

「ちよっ……………ちよっと!何で笑うのよ!」

「わりいわりい」

ミリアは謝ったが、未だに笑いが収まらないのか、それを必死に堪えながら、目尻の涙を拭った。

「外」

「え？」

ミリアはポツリと漏らした。

「外……見てみ？」

奏は言われた通り、窓から外を見る。

「外に何が……」

奏の視線が一つの場所で止まる。それは、賑わう市場だった。

見ると、魚を売る妖精、骨董を売る妖精、さらには大道芸の様な事をする妖精までいた。

全ての妖精が人と楽しげに話し、談笑している。

それは奏の妖精のイメージからはかけ離れた光景だった。

呆然としている奏の隣に、漸く笑いが収まったのか、ミリアが腰をぴしっと伸ばし、腕を組みながら現れた。

「妖精が森とかに住んでいたのはもう数百年も前の事だ。今では人と一緒に協力しながら生活してる」

その顔はとても誇らしげだった。性別関係なく引き寄せられる、凛々しい横顔。

奏は妖精ではなく、ミリアに目を奪われていた。それ程までにミリ

アは美しかった。

そして、ミリアの誇るこの街の風景は、妖精と人々が勝ち得たかけがえのないものだ。

奏はこの街に不思議な思いを抱いた。

奏はこの街の住人でなければ、この世界の住人でならない。だが、
どういうわけか『護りたい』と感じたのだ。

ミリアが大切に思う、この街、この世界を……

奏は街の声を聞きながら、その街を嬉しそうに眺めるミリアを見つめていた……

いつの間にか日は傾き、空は赤く彩られていた。

だが、街の声は静まる事なく一層賑やかに響いていた……

ウィルネスの中央に存在する屈強なる城、ハーガル城。

この世界のどの城より巨大であり、その強度はエルフの扱う術をも防ぐ。世界の王が住まうに相応しい場所だった。

その城の謁見の間。城主、ハーバレス・F・ウィルネスは、訪問者を笑顔で迎え入れた。

「よく来たな、セリーヌ」

訪問者、セリーヌは恭しく礼をした。

神官長を務めるセリーヌは、使者が現れた事を報告に来たのだ。

無論その事はハーバレスも解っており、若干前のめりになりながらセリーヌの話を促した。

「して、使者はどこだ？」

皺だらけの顔に焦りの色を浮かべながら、豪奢な服を振りながら玉座から立ち上がった。だが、ふらつき、側近に支えを必要とした。

「落ち着き下さい、お体に障ります」

セリーヌはハーバレスの身体を気遣った。

ハーバレスは齡80を超える老体だ。立ち上がるだけで息を切らし、肩を大きく揺らしている。

ハーバレスがこの歳まで王位についている理由。それは一重に後継者が居ないことが原因だった。

決して妻が居ないわけではない、勿論身籠る事もあった。だが、その全てが尽く死産だった。

王妃は心労により、王室の外へ出ることがなくなった。

その心労は、ハーバレスの深い皺にも刻まれていた。

未曾有の発展が続いているウィルネスの、知られざる暗部だった。

「すまぬ、年を食うと気ばかり急いてしまつ」

玉座に腰を降ろし、息を整えた。

「使者はどこに居られるのだ？」

「昨夜、神言が下りました。今頃、導き手が使者を見つけているでしょう」

セリーヌの言葉を聞き、ハーバレスは安心したように息を吐いた。

「導き手は誰が選ばれたのだ？お前の所の妖精なのだろう？」

ハーバレスの質問に、セリーヌは申し訳なさそうに眉を下げた。

「その……申し上げづらいのですが……」

「何だ、そう焦らすな」

セリーヌは大きく息を吐き、告げた。

「その……ミリアでございます」

セリーヌの言葉を聞いた途端、ハーバレスは固まり、眉間に皺を寄せた。

「……………心労が一つ増えたわ……」

ハーバレスは深い溜め息をついた。

ミリアはウィルネスでは有名だった。

神官の一員ながら信仰心が皆無。毎日祈りを捧げず街を練り歩き、

自由奔放にあつちをフラフラこつちをフラフラ。

ふらつくなら未だしも、しょっちゅう悪戯をしては兵と悶着を起こしている。

といつても、それが街の名物になっているのだが。
ハーバレスは皺がまた一つ増えたような気がした。

「明日……使者の方を城へお招きしてくれ」

「……はい」

二人は今後訪れるであろう苦勞に溜め息をついた。

やわらかい日差しが目蓋を擦る。鳥の囀りが遠くに聞こえ、奏は気持ち良く目覚めた。

ミリアはベッド、奏は床だったが……

「（使者なんだよね？私。……よく解らないけど）」

扱いが逆の気がしたが、ミリアにそれを期待するのが無理なのは昨日一日で十分分かった。最も、奏自身自覚がないので丁寧にされても断るつもりだったが。

奏はベッドに寝そべるミリアを見た。麗しの少女は気持ち良さそうに寝息をたてている。

ミリアの羽を見て、奏は自分が異世界に来たことを改めて実感した。

昨日は慌ただしかった。それ故、知らないことが多すぎる。

使者の使命、世界の状況、その他にも知らない、知らなければならぬ事があるそうだと。

知識を得れば、元居た世界に帰れるかもしれない。そう思うと気が焦る。待ちきれず、奏はミリアを揺すった。

「ん…………んう」

ミリアが声を漏らしながら目を開いた。薄く開いた目には怒りが見えた。

ガゴン、ガゴン、ガゴン……

鈍い痛み、それも三発。

一発なら未だしも、三発も食らった奏はその瞬間に卒倒した。

ミリアは生成した氷を放り投げ、再び眠りについた。

チリンチリン……

玄関の呼び鈴を鳴らす音で、ミリアは目を覚ました。

「…………ち」

軽く舌打ちをして身を起こす。傍らに血を流し倒れる奏がいたが、

気にせずに玄関へ向かった。

「誰だよ」

地を這う悪魔の様に低い声で、ミリアは言った。ミリアは寝起きが酷く悪い。

いつもは気さくに声をかける人々も、朝にミリアを見たら颯爽と逃げていく。

「僕だ」

扉の外から聞こえたのは若い男の声だ。

「何だ、フレンかよ」

ミリアはゆっくりと扉を開いた。寝巻姿だが全く気にした様子は無い。

ギィ…と、ボロい扉が錆びれた音と共に開いた。ミリアはこの音が嫌いだっただが、家賃が安いので文句は言えない。

扉の先に居たのは、声の通り若い男性だった。

腰まで伸びた長い髪、金色に輝くその髪は朝日に照らされ輝いている。そして、前髪の真中のみが他とは異なり深紅だった。

鋭い目は、厳しく己を律している事が伺える。瞳は赤く、見る者を射抜める強い力を持っている。

鎧を纏った姿は、彼を歴戦の猛者としての風格を十二分に引き出していた。

だが、何よりも目を引くのは彼の額から頬にかけて交差した大き

な傷だった。

「朝からなんだ？ 鎧着てるつつ事は、仕事中か？」

フレンと呼ばれた男性は呆れたように溜め息をついた。

「何が朝だ。日は既に真上にあるぞ」

ミリアは、どうでもいいと言わんばかりに鼻を鳴らした。

「あと、少しは格好に気を遣え。いい加減恥じらいを覚えろ！」

「あーあーあーあー、うつせえなあ。今更お前の前で何も気にする事ねえだろうが！」

「しょっちゅうそんな姿見せられる僕の身になれと言っているんだ！」

ミリアとフレンは口喧嘩を始めた。

二人は幼なじみで、付き合いは20年程になる。妖精は成長が遅く、ミリアは10歳にしか見えないが、フレンより確実に長い間生きていた。

ミリアは神殿、フレンは騎士団に所属し、若くして師団長になった、所謂出世頭だ。

一通り言い合ってから、フレンは思い出したように言った。

「そうだ、用件を忘れる所だった。お前の所に使者様が来られているそうだな」

「あ？ ああ、カナデの事だな」

ミリアも思い出したようにベッドの方を指差した。

「ほれ、そこに」

「……………」

フレンは啞然として、開いた口が塞がらなかった。

世界救済の使者は、頭から血を垂れ流しながら倒れていた。

「……………」
「ありがとうございます」

頭を包帯で巻き、奏はフレンに礼を述べた。

「いえ……………」

フレンは溜め息をついた。

「フレンに感謝しろよ？カナデ」

「アンタが言うなアンタが」

悪怯れたようすの見られないミリアに、奏はキレた。

「使者様、あまり怒ると傷口が開きます。落ち着いてください」

「あ…はい」

奏はソファーに座った。堅いソファーに腰を降ろし、奏は話を切り出した。

「それで、話つてな……」

「フレンさまあゝっ」

切り出そうとしたが、玄関からか細い少女の声が聞こえた。
フレンは玄関へ行き、扉を開いた。

「ふえ……」

涙目の、ミリアと同じ年位の少女が立っていた。

「離れるなど言っただろう。スフィア」

「ふえ……ごめんなさい」

スフィアと呼ばれた少女は眉尻をしゅんと下げた。

外見を見る限り、ミリアと年の差はあまり無いように見える。

髪は赤く、フレン程ではないが長く伸びていた。

たれ目の大きな瞳は、フレン同様赤く輝いている。そして、ミリア同様に背中には薄い羽が生えていた。

「よお、スフィアじゃねえか」

ミリアはスフィアに手を振った。

スフィアはそれを見て、慌てながらお辞儀をした。

「ミ、ミリアさんっどうもですっ」

「そんなに畏まらなくなつていいって」

手をヒラヒラと振りながらミリアは言った。

ミリアの言葉に対し、フレンは苛立ちを憶えたようだ。

「お前は少しでも畏まれ！大体、使者様が何故血だらけで倒れて
いるんだ？！」

「その使者に話があるんじゃないや無かつたのか？」

ミリアはフレンの訴えを軽く聞き流し、話題を変えた。

フレンは納得がいかない様だったが、これ以上時間を掛けられない
らしく、渋々従う事にした。

「スフィア」

フレンがスフィアを呼ぶと、スフィアは一つの封筒を出した。それ
を受け取ったフレンは、奏に一礼し、その封筒を渡した。

「ハーバレス王から、使者様への書状です。」

「王？！」

奏は目を白黒させた。

先日まで極普通の女子高生だった彼女は、昨日今日と、生活の変化
に気が遠くなった。

どうにか意識を繋ぎ止め、封を切った。

中からは、一枚の紙が出てきた。

「え〜っと?.....」

「.....」

三人が黙って奏を見つめる。奏は紙に目を向けたまま言葉を発しない。

数分の後、奏は強い視線でフレンを見据えた。

その視線に、フレンはドキリとした。先程までの雰囲気と打って変わり、凜々しい表情をした奏に、フレンは歓喜した。

「やはり、この方は我々を救う使者様なのだ」と。

「フレンさん」

「はっ、はい」

フレンは自分の掌が汗ばんでいる事に気付いていた。そして、使者に対し期待している自分に.....

それ故、彼女が自分の名を呼んだことに驚き、声が上がってしまった。

思えば、自分が此れ程までに緊張したのはいつ以来だろうか。と、フレンは思った。

幾多の戦場、試練を越え、どのような危機に陥ろうとも身体が強張る事など無くなっていた。

その自分が、一人の女性に緊張している事がフレンには信じられなかった。

「（いや、自惚れるな。フレン・シルフィード……、この方はそれ程の方なのだ）」

フレンは己に言い聞かせる。

その時、奏の口が開き、フレンは息を呑んだ。

奏は、実に素晴らしい言葉を紡ぎだした。

「文字が読めないんですけど……」

書状の内容を要約すると、本日、城で歓迎会をするので是非いらしてほしい。との事だった。

「いいのかなあ、こんな服貰って……」

鏡の前に立ち、奏は自身を見た。

整っていると言えなくもない顔。肩口で整えられた栗色の髪。唯一のチャームポイントである大きな瞳は、自身の不似合いな姿を映していた。

純白の大きなドレス。このような服とは無縁な人生を送ってきた彼女としては、恥ずかしい事以外の何物でもなかった。

救いは、発育の悪い身体がフリルで解らない事だけだった。

「はあ……」

小さな溜め息を一つ。

考えていると、段々と悲しくなってきた。

今更ながら、家に帰りたいたいという当たり前の感情が大きくなってきた。

「いや、未だ帰れないと決まったわけじゃないって」

精一杯自分を励ましてみる。両手をグツと握り、ネガティブな考えを押し潰す。

その時……

「おい、着替えたかあ？」

ミリアが入ってきた。

「あ、うん」

「そんなら行くぞ。主役が来ねえと始まんねえからな」

そう言ったミリアもドレスに身を包んでいた。素材が良いミリアは、完璧にそれを着熟していた。

より一層奏は自信が無くなったが、仕方の無いことと割り切って歩きだした。

兎に角、今は思い切り楽しんでやろう。奏はそう思った。

ホールに足を踏み入れた奏は、言葉を失った。

ホールの大きさも去る事ながら、シャンデリアは人の何倍の大きさがあるのだろうか。

並ぶ料理の数々は豪華としか言い様がなく、それを囲む妖精、人の所謂VIPが楽しそうに談笑していた。

想像を絶する光景は奏を混乱させた。

「こっちに来い」

「へ？」

ミリアは奏の腕を掴むと、凄い勢いで奏を引っ張って行った。

「ちょっと！どこ行くの？！」

説明もなく腕を引かれ、奏は少しイラッとした。だが、ミリアは構わず奏を引く。

「先ずは王様に謁見だろ？」

「あ、そっか」

当たり前前の事を突っ込まれ、奏は赤くなった。

「お前、そんなに飯食いたかったか？」

そこにミリアが追い打ちを掛ける。奏が反論しようとした時、ミリアは急停止した。

「っと、着いたぜ？飯はまた後でな」

「？！だから違っ……！」

奏は息を呑んだ。

目の前に、先程のホールの高さに匹敵する程の扉があったからだ。しかも、細部にまで装飾が施され、扉だけで一つの芸術となっていた。

「入るぞ？」

ミリアは答を待たず扉を押した。見た目の重厚さとは裏腹に、扉はすっと簡単に開いた。

「連れてきたぜ？ハーバレス王？」

奏に対する態度にしてもそうだが、ミリアは誰に対しても態度が変わらない。

「王にたいしてこの口の聞き方は無いのでは？」と奏は思った。

奏は謁見の間の奥に位置する玉座に視線を移した。

奏には解らなかったが、この時、この国のトップの人間が一堂に会していた。

国王、神官長、將軍……何れもこの国の未来を握る者達だった。

その中の一人、セリーヌは眉間に手をあて呆れていたが。

「使者よ、顔を見せてくれんか？」

ハーバレス王は柔和な笑みを浮かべ、奏に近くに寄るよう促した。

言われた通り、奏は真直ぐに歩いた。

「何故女が？」

「若過ぎる」

「大丈夫なのか？」

奏は、集まっている人々が自分を見て話している声が聞こえた。

そもそも、自分は使者がどのような者かもイマイチ理解していない。

玉座に辿り着く。昔、何処かで見たアニメの様に片膝をつけ、頭を下げた。

「顔を上げてくれ。名を、聞かせてくれんか？」

「藤原……奏です」

奏は顔を上げ、国王の顔をしっかりと見た。国王の顔には深い皺が沢山見られたが、とても優しい雰囲気を感じていた。

「カナデ、カナデか……良い名前だな」

国王は孫の名を呼ぶように、何度かカナデと呟いて笑みを浮かべた。

笑うと目が何処にあるか解らなくなってしまうたが、奏はどこか嬉しかった。心の底からの安心感を得ることが出来た。

「今日は楽しんでくれ？君のために用意した歓迎会だ。難しい話は後にしよう、皆が待っている」

「……………はい」

奏の言葉に、国王は再度笑みを浮かべて言った。

「君は異世界から来たらしいな？……………解らないことが多くて不安だろう。いつでも私を頼りなさい」

その言葉に奏は泣きそうになった。だが、寸前でそれを堪えた。大勢の前で泣くわけにはいかない。

国王はゆっくりと立ち上がった。身体が悪いのだろう、傍にいた側近と思しき男に支えられていた。

「さあ、行こうか」

「はいっ」

国王の言葉に、奏は笑顔で答えた。国王は満足そうにまた、笑みを浮かべた。

ゆっくりと歩き、ホールに繋がる扉の前にやってきた。

両隣にはミリアと国王。

二人は奏が扉を開くのを待っている。

奏は扉に手を当てる。

この扉を開けば、もう後には戻れないだろう。

だが、奏の胸に不安はなかった。

この人達と力を合わせれば、きっと帰れる。

そんな気がした。

ゆっくりと、

だが力強く、

奏は扉を開いた……

第二章　アースフィル

「起きなさい。奏」

「煩いなあ、今日は日曜日でしょ？」

母は私が包まっている毛布を剥がそうとしている。

勿論、私も起きたくは無いので、必死に抵抗する。

「アンタには使命があるんだよ。だから起きなさい。奏！」

「え……………」

毛布が剥がされる。

そこは自室ではなかった。

ハーガル城のホール。その中心に、私は立っていた。

多くの人の、懇願、羨望、期待……

様々な思いが入り交じった瞳が、私を見つめていた。

「……………」

奏はそこで耐え切れずに目を覚ました。

息が荒くなっている。国王から頂いた綺麗な寝巻は、汗で濡れてしまっている。

ハーガル城の一室。奏は、ミリアと一緒にここへ通された。

昨夜、ホールに入ると人々に捕まり、予定の時間を越えてしまった。その為、国王の体調を気づかい、会談は明日に持ち越しとなった。

通された部屋には、天蓋付きの巨大なベッド、綺麗な衣服が沢山入ったクローゼット、そして湖に面した広いテラスがあった。

全てに落ち着かず、さっさと寝たのだが、見てしまったのだ。あの夢を……

奏は隣で眠っているミリアを見る。心配事など一つもないような、健やかな寝顔。

「人の気も知らないで……」
奏は毒づいた。

眠気も吹き飛んでしまい、奏は仕方なくテラスに足を運ぶ。

夜明けのアースフィルには、気持ちの良い風が吹いていた。その風は奏の汗で濡れた身体を乾かす。

ふと、奏は昨夜ホールで見た人々の瞳を思い出す。
何でもいいから縋りたい。そんな瞳……

それ程までに、世界は危機に瀕しているのだろうか。

戦乱の最中、舞い降りる使者……

それを考えると、今現在、アースフィルは戦乱が続いていることになる。

奏は頭が然程良くはない。

その為、これ以上先は何も考えられなかった。

「ああっ！もうっ」

苛立ちをぶつける様に、奏は首を激しく左右に振り回した。

再び寝ようとも思ったが、出来そうもない。

仕方なく、奏は城内を散策する事にした。

明け方とはいえ、城内は未だ薄暗かった。奏の足音はコツン、コツンと、闇の中に吸い込まれて行く。

当てもなく歩いていると、何か光る、影の様な物が見えた。よく見ると、その影は手招きをしているようだった。

奏は好奇心の向くままに歩を進める。

距離が縮まればまた離れ、縮まればまた離れ、一向に追い付かない影に、奏は徐々に苛立ちと不安を募らせていた。

だが、幾度か角を曲がった時、影はフツと消えてしまった。奏は影を探し、辺りを見回す。その時……

「……話し声？」

何処からか声が聞こえた。その声が聞こえた方に行くと、一つの部屋から薄明かりが漏れていた。

奏は扉の隙間から、覗くように顔を押し付ける。
だが、よく見えず、仕方なく耳を押し当てた。

誰かが話しているようだ。人数は二人、だろうか。

「国王の体調を見ると、上手くいっているようだな」

「国王の……体調？」

上手くいっているとはどういう意味だろうか。

聞こえた声は男性の物だ。この声には聞き覚えは無かった。

「はい、滞りなく」

今度は女性の声。

この声は何処かで聞いたような気がする。

そう、ホールで……

「では、使者の方ですが」

女性が奏の事を切り出した。

奏は驚いたが気持ちを落ち着かせ、一言も聞き漏らさないように神経を集中させる。

男性が

「ああ」と小さく声を漏らし。

「始末しておけ。何れ『我ら』の障害となる」

「（我ら？）」

我ら、障害……つまり。

「エルフっ！」

「っ！誰だっ！」

思わず大きな声を出してしまった。その声に、男性が瞬時に反応した。

奏は急いでその場を離れる。

来た道を必死に戻る。

後ろで激しい爆発音。

「（追い付かれたら殺される?!）」

奏は生きたい一心で走った。その時。

「カナデっ!!」

ミリアがこちらに向かって飛んできた。

ミリアを見た瞬間、奏の足から力が抜ける。

「馬鹿っ！危ない！」

振り返ると、フードを深く被っている人物が剣を振り上げていた。

「ひっ……」

奏は目を瞑り、身を縮める。奏がその体勢をとった時。

ドンッ

何かが閃いた後、フードが力なく地に落ちた。

フードを挟んだ向こう側には、息を切らせたセリーヌの姿があった。

「はあっ…はあっ…逃げられたようですね」

セリーヌは肩を落とした。

「大丈夫か?! カナデ!」

ミリアが駆け寄ってくる。極度の緊張感から解放されたためか、奏の瞳からぼろぼろと涙が零れる。

「ミリアあ〜」

「お、おい……」

奏はミリアにしがみ付き泣いた。その後ろからセリーヌが奏の肩に手を置いた。

「不安だったでしょう? いきなりエルフに襲われるなんて」

「エ、エルフ?! 本当か? カナデ?」

奏は涙を拭いながら頷く。

その顔は涙でグシャグシャになっていた。ミリアはいとおしそうに奏の頭を撫でる。

「…で? 何で神官長はここに?」

ミリアは奏から目を放さずにセリーヌに尋ねる。奏に向ける眼差し

はとても優しいものだ。

「私の部屋はすぐそこですから」

理由を答えた後、セリーヌは笑み。

「使者を大切に思っているんですね。ミリア」

「……………ああ」

ミリアは小さく答える。だが、それ以外は何も言わなかった。

暫らくの間、奏の涙が収まるのを待った。涙の収まった奏は、聞いた事を口にする。

「えっ?! 国王は毒を盛られてるかもしれない?!」

奏が先程の話から推測出来る最大限だ。

ミリアは驚いて目を白黒させた。

「それはいけません。厨房へ向かいましょう」

三人は駆け出した。

「その料理! 止まって下さい!」

セリーヌが声を張り上げた。何事かと、王の自室に向かおうとしていたメイドは振り向いた。そして、軽く会釈をした。

「その料理に毒が入っているかもしれないんです！」

「そ、そのような事は……」

メイドは奏の言葉に困惑しているようだ。そのメイドの肩を、ミリアがポンと叩いた。

「まあ、念の為に……な？」

「は、はあ……」

メイドは取り敢えずは納得したようだ。だが、そうになると問題がつ……

メイドが申し訳なさそうに口を開く。

「あのお、国王の御朝食は如何すれば……」

「……え？」

ミリア、そしてセリーヌがポカンと口を開いた。

二人は料理の経験が皆無だった。

「私が作ります！」

一人、奏が鼻息荒く答えた。料理には自信があるようだ。

「だ、大丈夫かなあ」

ミリアは頭を抱えた。

厨房では奏が料理を手際良く作製している。

どうやら杞憂だったようだ。

「神官長」

「何ですか？ミリア」

ミリアはセリーヌに何か言おうとして、考え込んだ。

「いや、何でもないっす」

ミリアは言わないことにした。未だ早計だと判断したのだろう。

「あ、でも一つ。神官長って、朝によく国王のそこ行ってたっすよね？気付かなかったんすか？」

「ええ……国王の体調が最近、悪化しているとは感じてはいたのですが。……私の、不徳の致す限りです」

セリーヌは目を伏せ、神に懇願するように手を組んでいた。

「国王に何の用事があつたんすか？」

「はぁ……、国王が使者の存在を気に掛けていた御様子でしたので」

何故このような事を聞かれているのか解らない。という顔を、セリーヌはミリアへ向けた。

その時。

「二人とも、手伝って下さいよー」

奏が疲れた声で二人を呼んだ。流石に一人ではキツイようだ。

「はあ…、分かったよ。今行くよ」

ミリアは深い溜め息をついて奏の下へ向かった。
少し遅れてセリーヌも厨房へ向かった。

「む？今朝の料理はいつたい誰が？」

料理を口に運んだハーバレスは、開口一番そう言った。

奏が作ったのは純和風の朝食。といっても、飽く迄それに似せた物だった。

「わ、私です。ハーバレス陛下」

自信のあった奏だが、流石に一国の王の口に触れる事には緊張を隠しきれないようだった。

「あの、如何でしょうか…」

二口程口に頬張り、味わうようによく噛み飲み込んだ後に、ハーバレスは笑みを浮かべた。

「実に美味しいよ。カナデ」

「あ、ありがとうございます」

奏は深く礼をした。だが、ハーバレスは奏に顔を上げさせ。

「こちらこそ、美味しい朝食を有り難う」

そう言つて頭を下げた。

「へ、陛下?! あ、頭を上げてくださいっ!」

奏にそう言われたハーバレスは顔を上げ。

「あっはっはっはっ」

豪快に笑つた。昨夜の様子からは想像できない姿だ。

「今日はすこぶる体調が良い。何時もとは違う朝食だからかもしれない」

ハーバレスは何気なく言つたが、その言葉で三人は表情を曇らせた。

「……陛下。その事で、お話があります」

奏が先程の出来事を話し始めた。

「……それは誠か?」

「はい、私がこの耳で確かに」

「ふむ……」

奏の話聞き、ハーバレスは眉間に皺を寄せた。

「して、カナデよ。お前は怪我をしなかったのか？」

「え？私ですか？…セリーヌさんが助けて下さいましたので大丈夫です」

「そうか、それは何よりだ」

ハーバレスは優しい笑みを浮かべ、奏の頭を撫でた。

自分の身よりも、他者を思いやる。ハーバレスは心から優しい人物だった。

「ブーブー、俺だって助けに行っただろお」

後ろでミリアがブーイングをしている。奏は苦笑しながら、ミリアに感謝を述べた。

ミリアは満足気に頷くと、途端に真剣な表情へと変わった。

「ハーバレス王、一つ提案がある」

「何だ」

ハーバレスもそれを感じ取ったのか、真剣な眼差しでミリアを見つめる。

そして、ミリアがその提案を口にした。

「今後、またいつ何時毒を盛られるか解ったもんじゃねえ。そこでだ、俺達三人が交代で飯を作るのはどうだ？」

「「はあ?!」「」

ミリアの提案に、奏とセリーヌは素っ頓狂な声を上げた。

「ふむ、中々良いかもしれんな」

以外にもハーバレスは賛成のようだ。だが、奏が大慌てだ。
一日限りだと思っていた事が毎日だと考えると、精神的に保たない。

奏はセリーヌに助けを求めようとする。だが、セリーヌも以外と賛成のようだ。

「確かに私達三名ならば、陛下の危険も少なくなります」

「解った。では頼むぞ」

奏が意見を言う前に決定してしまった。

「んじゃ、昼は俺が作るから。神官長は夕食をたのんます」

「わかりました」

奏を無視して話が進んで行く。奏は肩を落とした。

「もう…勝手にして」

奏の小さな嘆きは、他の三名に聞こえる事は無かった。

「それで、お話とは何でしょうか。陛下」

「うむ、まあ座りなさい」

三人が退出しようとした時、ハーバレスは奏を呼び止めた。話があるらしいが、奏は大方解っていた。

「使者の話ですね？」

奏の問いに、ハーバレスは頷く。

「ああ、使者について解っている範囲で話をしよう」
「解っている範囲？」

奏は全てが解っているのだと思っていた。それゆえ、少しばかり残念ではあった。

「うむ、使者の事で解っているのは『戦乱の続く世界を救済する』、それだけなのだ」

ハーバレスの言葉に、奏はずっと疑問に感じていた事を口にする。

「戦乱が続くとおっしゃいましたが、本当に危機が迫っているのですか？街の様子からはとても……」

街の様子は平和そのもの。とても危機が迫っているとは思えない。

ハーバレスは肩を落とし、心痛な面持ちで言った。

「民は平和に慣れてしまっているのだ。そして、使者の存在に甘えている」

「つまり、街の人達は深刻に考えていない。そういう事ですか？」

奏の言葉に、ハーバレスは頷く。

「事の深刻さを知っているのは、昨日ホールに集まった者達だけだ」
長年に渡る平和の享受。それは、人々から自衛の心を奪った。

このままでは、いざという時に大変な事になるだろう。

だが、イマイチ危機感が持てないのは奏も同じだった。ここは聞いてみるしかないだろう。

「陛下。宜しければ戦況を教えては頂けませんか？」

ハーバレスは暫し考え、

「そうだな」と言い、奏にも解るように噛み砕いて説明を始めた。

エルフとの戦いが終焉を迎えてから五百年。

ウィルネスを中心として、ウィグル、リャオス、ゲリオウン。そして、エルフの残党により創られたカオラクス。

数年前までは平穏な時が過ぎていた。いや、平穏に見えていたのは表面だけだった。

エルフが暗躍していたのだろう。突如、ゲリオウンがカオラクスと共に挙兵したのだ。

それが五年前。

以降、ウィルネス・ウィグル・リャオスの『三国連合』と、ゲリオ

ウン・カオラクスの『共存繁栄軍』は争い続けている。

「現在、ゲリオウンとウィグル、リヤオスとカオラク스가交戦中だ」

ハーバレスは入ってきたメイドに地図を頼み、その地図を開き解りやすく説明をしてくれた。

三国は西に位置し、残り二国は東に位置していた。

奏はあまり良くない頭を最大限回転させ、戦局を必死に詰め込んだ。

「大丈夫かね？」

ハーバレスが奏の顔を覗き込む。

「な、何とか」

正直限界に近かった。これ以上話されては頭の中がパンクしてしまいそうだ。

そんな奏のようすに気付いたのか、ハーバレスは咳払いを一つ。そしていつもの柔和な笑みを浮かべる。

「今日はこれぐらいにしておこう。すまんが、ミリアの調理のようすを見てきてくれんか？あの者一人では私は不安で仕方ない」

この世界の時間感覚はよく解らないが、確かに調理が始まってもいい頃合いだ。

「はい、分かりました」

「すまぬな」

奏は心なしか、ハーバレスの皺がまた増えたような気がした。

長い長い廊下を歩き、奏は厨房の前の部屋までやってきた。

「……………はあ」

溜め息一つ。部屋に入らずとも思っていた通りの事が起こっているのが解った。

扉の向こうから聞こえるのは、料理にはあり得ない騒音、異音。何かが爆発する音が聞こえる。

「……………」

奏の脳内に浮かぶのは、扉を開けた瞬間に食器が飛んでくるビジョン。

あらゆる可能性を描きながら、奏は扉を開いた。

ヒュンッ

皿が飛んできた。

「っ!」

顔付近に飛んできたそれをしゃがんで避ける。

ビュンッ

続いておたま。

またもや顔付近に飛んできた。だが、まだ予想の範囲内。

おたまを横に飛び回避。

次に飛んできたのは……

「……………」

今度は避けられなかった。否、避けるわけにはいかなかった。

「……………ミリア？」

ミリアが気絶しながら、頭から突っ込んでくる。

「げふっ?!」

ミリアが奏の鳩尾にめり込んだ。そしてそのまま後ろに吹っ飛び、後頭部を壁にぶつけた。

奏は意識を失った。

「…………デ、…ナデ」

「んん……………」

ミリアに揺すられて、奏は目を覚ました。

「ああ、ミリア」

「カナデっ、はあく良かったぜえ……」

ミリアは胸を撫で下ろした。どうやら本気で心配していたようだ。

「あ、料理は？」

奏が聞くと、ミリアはテーブルの上を指差す。

「……………」

「……………」

両者共に無言。奏は料理を見つめ、ミリアは視線を泳がせている。

テーブルの上には皿が一つ乗っていた。

「ねえ、これだけ？」

「……………」

奏は指差して尋ねるが、ミリアは俯いてしまった。

皿の上に乗っているのは、パンが一つ。

「調理したものは？」

ミリアは無言で部屋の隅を指差す。

そこには、テレビなら絶対にモザイクがかかるような物体が放置されていた。

むしろあれを出されなくて良かったのかもしれない。

「取り敢えず、陛下のところに持ってこようか」

奏が皿を持ち歩きだすと、ミリアも無言でついてきた。

二人はハーバレスの自室へ向かった。心の中で奏は。

「（ごめんなさい陛下。）」

謝罪の言葉を述べた。

パンを見せると、ハーバレスは安堵したような表情を浮かべた。

ハーバレス曰く、

「食せる物なら何でも良い」らしい。

現在、奏は城内にある大図書館に来ている。

ここは王室が管理している場所で、アーズフィルの歴史ならば大体の事を知ることが出来る。

図書館という空間があまり得意ではない奏は、古書独特のかび臭さに顔をしかめながら、ゆっくりと本を開いた。

開いた時に、さらに強い臭いが鼻を突いたが、奏はアーズフィルの文字に目を向けた。

「やっぱり読めない、か」

地図を見た時はハーバレスが指を差して説明してくれたので何とかなったが、相変わらず文字は読めないままだ。

会話が出来ているのに文字は読めない。ハーバレスからの書状を見てから、奏がずっと考えていた事だ。

「何読んでんだ？」

「ミリア」

奏が悩んでいると、脇にミリアが立っていた。

「立ち読みは行儀悪いぜ？」

そう言って、ミリアは奏から本を取った。

「聖歌隊の歴史？カナデ、お前聖歌隊に入りたいのか？」

「違っって」

奏はミリアに疑問に感じていることを話した。ミリアは頬を掻きながら聞いていた。

「さあ？何でだろうな」

それが、話を聞き終えてからのミリアの第一声だった。

「真面目に考えてる？」

奏がそう言った時、背後から声が聞こえた。

「貴方はもつと学習が必要ですね。ミリア？」

セリーヌだ。

セリーヌはこちらに歩み寄ると奏に微笑む。

対してミリアには厳しい視線を向けた。

「どうせ貴方は、使者が異世界から来ることを知らなかったのですしょう？」

「うつ…」

セリーヌの指摘にミリアは狼狽える。

「奏さん？貴方にはどのように聞こえているか分かりませんが、私達には貴方が、こちらの言葉を話しているように聞こえています。」

つまり、知らず知らずのうちに脳内で変換されているのだろうか。

「まあ、単に発音が同じで、使っている文字の形が違っただけかもしれませんがね」

セリーヌは付け足す。どちらにしろ、今考えても分からないということだ。

奏が納得したように頷くと、セリーヌも満足そうに頷いた。そして、ミリアをじつと見つめる。

「私が先程言ったこと、あのようすを見ると凶星だったようですね。どうす。何故使者に知識がないのか」とか考えていたのでしょうか」

「えっ…いや」

ミリアの視線は明らかに泳いでいる。セリーヌはまるで、ミリアの心を読むように言った。

ミリアは助けを求めるように奏を見たが、奏はその視線から逃げるようにどこかへ行ってしまった。

「は、薄情者……」

「貴方には改めて一から教えて差し上げましょう。……まず、神が使者に与えた言葉は……」

セリーヌはどこから取り出したのか、右手に分厚い本を持ち、ミリアに迫ってきた。満面の笑みで。

薄暗く、人気のない図書館に悲鳴が響き渡った。

「酷いぜ、まったく」

「ミリアが悪いんじゃない」

ミリアの非難を奏が一蹴した。どう見ても、この場合非があるのはミリアだろう。

あっさり流され、ミリアは口を尖らせいじける。が、すぐに真面目な顔になり何かを呟いたが、奏はそれを聞き取る事が出来なかった。

「何か言った？」

奏はミリアの顔を覗き込む。ミリアは動じなかったが、想像以上に近づいてしまい奏は頬を赤らめた。

それを見たミリアが、腹を抱えて笑う。

「お前が赤らめてどうすんだよっ」

「ちよっ、図書館は静かに」

あの後セリーヌが去り、図書館にはミリアと奏の二人だけとなっていた。

自分達以外は誰も居ないが、図書館は静かにするのがルールだ。

奏は、笑うミリアを止めようと肩を掴んだ。すると、ミリアは突然笑うのを止め、奏の腕を掴み、思い切り押し倒した。

「きゃっ」

奏は小さく悲鳴を上げる。背中から落ちたが、ミリアが上手く腕を引き、痛みは然程感じなかった。

ミリアは奏の上に馬乗りになる。奏は訳が分からず、ただ呆然とミリアを見上げるだけだ。

薄暗い図書館の一角、小さな窓から零れる光が、ミリアを艶やかに照らしだしている。

ミリアは口元に薄い笑みを浮かべながら奏の目を覗き、言った。

「俺に見惚れたのか？」

ミリアは昨夜、自分は奏よりも長く生きていると言っていた。

そのせいだろうか、奏は10歳程の少女が美しく、妖艶に見えて

いた。

ミリアが奏の唇に、自身の唇を近づけた。

奏は抵抗しようとするが、体に力が入らない。

さらに唇が近くなる。

奏はキュッと目を瞑った。ミリアが何を考えているか解らないが、もう

「なるようになれ」と奏は思った。

唇が触れるか触れないかというところ。

「…ぷっ」

ミリアが突然笑いだした。

「あっはははは、やっぱりお前面白いわ。最っ高」

しばらくの間奏は呆然としていたが、自分がかかわれたと解った途端、顔を林檎のよいに赤くしてミリアを叩いた。

「~~~~~っ?!」

「わりいわりい、怒るなっ」

ミリアに宥められ、十数分の後に、奏はやっと落ち着いた。

「いやあ、お前が異様に可愛くてさあ。身体は女っぽくないけど、心は女なんだな」

「身体はって何よ身体はって!!」

コンプレックスに感じている事を言われ、奏は少し苛ついた。だが、先程の事で力が抜けており、指摘するだけに止まる。

「つと、その話は置いていて」

「置いとくな！」

突っ込んだ奏だったが、ミリアが無視して言った。

「カナデ、俺と『契約』しないか？」

「『契約』？」

奏の疑問に、ミリアは簡単に説明をしてくれる。

「異世界から来ただけで、使者だって普通の人間だろ？だから、導き手の妖精と『契約』して力を得るんだ。『契約』は人の隠れた才を覚醒させる。あとついでに妖精の能力も身につくけどな」

「はあ……」

要約すると、使者と導き手は『契約』をして力を得る。また、使者の力は特殊、或いは強力な物だということだ。

「でも、何で今なの？」

「人がいるとこっ恥ずかしいんだよ」

「なるほど、だからここなんだ。……で？どうすればいいの？」

「…………目え瞑れ」

引っ掛かる感じがしたが、奏は素直に従った。

「どっ、同意は得たからなっ！」

何故かミリアの声は上ずっていた。奏は目を閉じているから分らないが、ミリアの頬は紅潮している。

「え？あ、うん」

奏は、何故ミリアが緊張しているのか分からなかったが、取り敢えず相づちをうつ。

「ねえ、どっ……」

どうやるの？、そう奏が尋ねようとした時、唇に柔らかな感触。

奏は驚いて目を開ける。目と鼻の先に、目を固く閉じたミリア。

奏とミリアの唇がしっかりと重なっていた。

重ねている時間が、奏には一分にも、一時間にも感じた。

ゆっくりとミリアの唇が離れてゆく。

ミリアは顔をさらに赤くする。対して奏は、呆気にとられ、何が起こったか分からない様子でミリアを見つめていた。

自分の唇を指でなぞった。

そしてやっと、何が起こったのか理解した。

「えっええええ？！」

奏は狼狽えた。そして、追い討ちをかけるようにミリアが。

「今夜は忙しくなるぜ？」

耳元でそう囁いた。

「~~~~~?!」

奏の頭は真っ白になった。

第三章↳戦い・出会い・決意↳（前書き）

時間がかかりました…

第三章↳戦い・出会い・決意

西へ傾く日差しを浴び、鮮やかに映し出されるハーガル城。そのハーガル城の一角で、奏とミリアは話していた。

「いきなりこんな渡されても……」

「時間がねえんだよ。なんとかしろ」

奏の手には身の丈程ある巨大な剣が握られていた。

持ち上げる事は不可能だと感じた奏だったが、実際に持ってみると、まるで箸を持つように軽く、拍子抜けしてしまった。

「でも、いきなり戦うなんて……」

と言ってミリアの顔を見た奏は、向けた顔をすぐに背けてしまった。どうしてもミリアの唇に視線がいつてしまう。

「んだよ…まだ気にしてんのかよ」

やれやれと手を広げ、ミリアは首を振りながら溜め息をついた。

奏は耳まで熱くなるのを感じ、手で顔を覆う。そして、その時の事を思い出した。

「へっ、はっ、えっ?!」

頭の中が真っ白になり、奏は狼狽えた。初めてを小さな少女に奪われたのだから仕方ないだろう。

ぱくぱくと魚のように口を動かし、呆然とミリアを見つめる奏。対してミリアは、最初こそ頬を紅潮させていたが、今は既にいつも通りの笑みを浮かべている。

「どういう……………」

つもりよと、奏は発しようとした。だが。

『今夜は忙しくなるぜ?』

先程のミリアの言葉が頭の中に反芻する。そして、また奏の脳内は真っ白になり、同じように口をぱくぱくと動かすのだった。

吹っ飛んでしまいそんな思考を意地で繋ぎ止め、ようやく奏は口を開き。

「さっきの……………何?」

そう絞りだした。

「な、何って……………契約だよっ! け・い・や・く!」

話を完璧に振り出しに戻した奏に対し、ミリアは引きつった笑みを浮かべた。

「せ、説明しなさいよ! わ、私の……………ファ、ファー……………」

奏はどうかしてノーカウントにしたいとも思ったが、それは不可

能なことであり、起こった事実を変えることが出来ない。

「お、女同士だからい、いいだろっ?!」

「そんな単純な事じゃ無いでしょうがぁー!!」

女としての感覚が乏しいミリアに対して奏がキレた。

「いや、その……な?一応、許可は取った……だろ?」

危機を感じ取ったミリアは、必死に釈明しようとする。だが、完全にキレてしまった奏を落ち着けることは出来なかった。

「謝れつつってんのよー!」

「ひゃあ?!ご、ごめんなさいーっ?!」

流石のミリアも奏の勢いに気圧され、その場に土下座した。キレた奏は、ミリアにとって、今後恐怖になるだろう。

土下座しながらプルプル震えているミリアを見て、奏はいくらか溜飲が下がったようだ。

「で?」

「……へ?」

奏の言葉に、ミリアは怯えながら答える。

「許すわよ……それより、『今夜は忙しくなる』って、どういう意味?」

話の主導権は奏に移っていた。おそらくは一時的なものだろうが。

「あ、ああ…その事だけどな……」

ハーガル城・中庭……

「フレン様あ…私たちはいつまでこうしてれば良いんですかあ……」

中庭の草影に隠れながら、スフィアは隣で同じように身を屈めるフレンに尋ねた。

「さ…さあな」

フレンは苦笑いを浮かべながら答える。

二人がいる中庭は様々な木や花が植えられ、小さな森のような作りになっている。そのため隠れる場所が多い。

二人は草影から顔のみを出し、一つの部屋の窓を盗み見ていた。

「…まさか師団長にもなってこんな事をするとは…」

フレンは目を伏せ、小さく溜め息をついた。

「全く…ミリアには迷惑させられる」

「でも…本当にあの人が？」

スフィアが疑問の声をあげる。フレンはその疑問答えた。

「何も起こらなければよし、起こった時はその時だ。……でもスフ

「イア？」

「はい？」

スフィアがフレンの顔を見上げる。フレンは眉間に皺を寄せ、窓を睨み付けていた。正確にはその先にいる人物を……

「知っているだろう？アイツの勘は当たるって……」

「……………」

フレンの言葉にスフィアは頷き、同じように窓を見つめた。

「ねえ、ミリア？……本当にあの人が？そんな風には見えなかったけど……………」

「半分勘だけだな」

あっけらかんとミリアは言った。

「か……勘って……」

ミリアのあまりにも堂々とした姿に、奏は呆れた。

「いや？でも……………」

ミリアは一つの扉を見据える。そして。

「俺の勘は……当たるぜ？」
そう言った。

その口元に、不適な笑みを浮かべながら……

フレンは見逃さなかった。

「っ！……やはり！」

フレンはスフィアに合図を送る。

スフィアは頷き、瞳を閉じる。そして、小さく言葉を紡ぎだした。

「燃えよっ……」

ゴオオオッ

廊下を照らすキャンドルの一つが強く燃えだした。

「……行くぞっ！カナデ！」

それを見たミリアは駆け出した。

「う、うんっ！」

少し遅れてから奏も駆け出す。

ミリアが力一杯に扉を開け放った。

「……やっぱりな」

ミリアが口元に小さく笑みを浮かべ、すぐに今度は唇を噛んだ。

「あんた…だっ たんだな」

「……………」

ミリアは苦虫を噛み潰したような表情をし、奏はいまだに啞然としている。

二人が入ったのは厨房。

今、ここにいるのはただ一人。

その人物は自身が作った多少不恰好な夕食に。

怪しい液体を混ぜていた。

ミリアはゆっくりとその人物の名を呼んだ。

「あんだだっ たんだな……………セリー又神官長…」

ミリアに睨まれ、セリー又は三日月のように口を歪ませた……………

「どうして解ったのですか？」

セリーヌの言葉遣いは以前と変わらず優しい物だ。だが、声に色が無かった。

「あんた…昨日の夜、言ったよな」

ミリアが問い掛けるように言うと、セリーヌは先を促すように「何と？」と答えた。

一度大きく息を吸い、ミリアは言葉を紡ぎだす。

「昨日の夜。あんたはカナデにこう言った『エルフに襲われるなんて災難だ』と、どうしてカナデから聞きもせずになんな事が言えたんだ？」

「……………」

セリーヌは押し黙る。その様子を、奏は固唾を吞んで見守っている。

更にミリアは続ける。

「もう一つ。厨房を隈無く探しても、毒のような物は見つけれなかった。勿論、料理人やメイド達の荷物も検査した。そして朝、突然押し掛けた俺達。毒を隠すのは不可能……」

ミリアはセリーヌを鋭く睨み、結論を口にした。

「つまり、毒を盛るのは国王の口に入る直前。それが出来るのは、食事を摂る国王の隣にいるあんただけだ……セリーヌ神官長」

ミリアの言葉に、セリーヌは俯いた。そして細かく震えだした。

「……く」

そして……

[illegible]

大声で笑いだした。だが、その笑いもすぐに収まり、顔を上げたセリーヌの口元には邪悪な笑みが浮かんでいた。

「ただの馬鹿かと思っていたら、意外に聡明だったようだな」

口調が変わり、声も地の底から聞こえるような低いものへと変化する。

奏はそれを聞き、鳥肌が立った。

「最後に一つ教える」

ミリアがセリーヌに尋ねた。

「何だ？」

「使者とか神言は、お前の嘘っぱちか？」

その問いに、セリー又はしばし考え。

「特別に教えてやるよ。……それは真実だ。だから」
セリーヌが身を屈め。

「今この場で葬り去ってやる!!」

一瞬の内に視界から掻き消えた。

「カナデ！避ける!!」

「えっ？」

セリーヌは既に、呆然と立ち尽くす奏の背後を取っていた。

「死ねえええっ!!」

絶叫と共に、セリーヌが懷から取り出したナイフが奏を襲う。

「……………っ」

声にならない悲鳴を上げながら、奏は逃げるように身を捻った。

「いったあ……………」

完全には避けられなかったが、急所は外れたようだ。

「ちいっ……………」

セリーヌは舌を打った。そして、奏に追い打ちをかけようとした。

キィィンッッ

甲高い金属音がして、セリーヌの手からナイフが弾き飛ばされていた。

突如、セリーヌと奏の間に割って入った人物。

「フレンさんっ」

フレンだった。

セリーヌは後ろに飛び退き、距離を取った。

「セリーヌ殿。話は聞かせて頂きました。貴方の罪は重い……」

フレンは背筋を伸ばし、自身の身の丈半分の剣を、セリーヌに突き付けた。

「我国の掟を破りし罪。……この場で償わせましょう!!」

フレンは言い終えると同時に駆け出した。

「破っ!!」

セリーヌの懐へ潜り込み、剣を横薙に振るった。

高速で繰り出される剣は、フレンの師団長としての肩書きに相応しい物だった。

だが、対するセリーヌも素早い身のこなしでフレンの攻撃を回避する。

その光景は、奏が見ていた世界ではありえない光景。

奏は力なく尻餅をつき、呆然と事の成り行きを見守っていた。

「カナデ!」

「…え？…あ」

奏が気付かないうちに、ミリアが傍まで来ていた。

「大丈夫か？傷口見せろ」

「へ、平気……大丈夫」

目の前の光景に腰が抜けているだけで、傷はそれほど深くはない。それに、このぐらいで痛いなんて言うてはいられない。今行われているのは紛れもない『命のやり取り』なのだ。

「……………わかった」

ミリアは奏の言葉に頷き、セリーヌを見た。視線の先では、今もフレンが剣を振るっている。

「カナデ、お前は見てるだけでいい」

「えっ…………？」

奏の返事を聞かないまま、ミリアは駆け出してしまった。

ミリアはフレンの後方から氷のつぶてを飛ばし、セリーヌを牽制した。

牽制が効いているのか、セリーヌの動きが格段に鈍くなる。フレンの剣先がしだいにセリーヌを捉え始めていた。

「ちっ……」

セリーヌが大きく後方へ距離を取る。

だが、その距離もフレンが全速力で詰める。

追い詰められていくセリーヌ。追い詰めていくフレンとミリア。

その様子を、奏はずっと見つめていた。

どれ程の時間が経っただろうか。ミリアは一つの疑問を感じていた。

「……………」

これだけの喧騒に、城内の誰も駆け付けない。

フレンのみに教えたのはセリーヌに感付かれないようにするために、最小限の戦力で行動する必要があったからだ。

それに、この作戦はハーバレスの耳に入れてある。援軍が来ない筈が無い。

だが現実には誰も来ない。こちらの疲労が溜まる一方だった。

ミリアは肩で息をし始めた。それはフレンも一緒、全力の攻撃を続け、ミリアと同じく肩で息をしている。

逃げ続け、二人以上に疲れている筈のセリーヌが、何故か不気味な笑みを浮かべていた。

「何で……アイツは笑ってやがんだ」

「さあな……」

ミリアが感じたことは、フレンも同様に感じていたようだ。

セリーヌはミリアを見て言った。

「そろそろ、『種明かし』をしましょうか」

「『種明かし』？」

ミリアはセリーヌが何を言っているのか理解できなかった。

「どういう意味だよ、それは」

セリーヌは口元に嫌らしい笑みを浮かべ、そして明かした。

「ミリア？貴方には私が何の力を使うか教えたことはありませんでしたね？」

ここにきて、セリーヌはわざとらしく口調を戻した。

「ああ、知る必要も無かったしな」

事実、ミリアには全く興味の無かった事だ。ミリアにとって、セリーヌは自分の上司で神官長。ただそれだけだった。

「いけませんよ？敵の事をもっとしつかり調べておかないと」

そう言つて、セリーヌは右手を顔の前で開いた。

ふわりと現れる小さな光球。それはゆらゆらと空中を彷徨い、一瞬強い光を放ち消えた。

「私の力は『光』。つまり、貴方達が必死に戦っていたのは……」

セリーヌの姿が掻き消える。

「……私の幻影……」

「?!」

次の瞬間、セリーヌはミリアの背後に現れていた。そして、そのままミリアの身動きを封じる。

「さあ、人質が出来ましたね？…まだ戦いますか？」

ミリアの腕を締め上げ、首もとにナイフを突き付けながら、セリーヌはほくそ笑む。

「援軍が来ないのは……アンタの力のせいかな？」

ミリアが顔を歪めながら聞いた。

「ええ、来られては面倒だったので、扉を隠し、皆さんには迷子になつてもらいました」

光の反射で扉を見えなくしたのだらう。入り口が見つからないので

は、援軍が来るはずが無い。

「けっ…姑息な事しやがる」

ミリアは悪態を吐く。

「ええ、でももうすぐ終わります。貴方達の道化も見飽きましたからね」

「僕を忘れてないか？両手が塞がり、ミリアを押さええては流石に身動きが取れないだろう？」

フレンが剣を構えなおす。

「ふうん……そうですね。…では、貴方の相手はこの子達に任せましょう」

セリーヌの周囲に光が集まる。そして、その光は無数の小さな人の形になった。

「舐めているのか？光に実体はない。僕の相手が出るわけがないだろう」

フレンはセリーヌを睨む。

「考えが足りませんね？…確かに光に実体はない。ですが……」

影の一体がフレンに飛び掛かる。フレンは切り払おうと剣を振るうが、実体の無い光は剣をすり抜け、フレンの右腕に当たる。

「つあぁっ?!」

突如右腕が発火。その肉の焼ける痛みに、フレンはもんどりうった。

「一点に集めれば、光は熱を持ち、肉を焼きます。……さあ、もがき苦しみなさい」

セリーヌのこの言葉が合図となり、光は一斉にフレンへと踊りかかった。

「くっ！」

フレンはただ逃げるのみで、反撃する余裕はない。

「あははははっ！……滑稽ですね……」

セリーヌの笑い声が、広い厨房に響いた。

「私は……何も出来ない」

ミリアとフレンの危機を、私は見つめていた。

思えばいつもそうだった。

何の特徴もなく、何も特技がなく。何をやっても平均的。自分から進んで何かやるわけでもない。

普通以上を目指そうとはしなかった。高みを目指そうとはしなかった。

それで良いと思っていた。

周りに流され、普通に勉強し、普通の高校に入り、普通に卒業し……

…

高みを目指さなかったのは、失敗して何かを失うの事が嫌だったから。……怖かったから。

けど、今回は私が何かしなければ人が死ぬ。それも、大勢の命が……

……深く考えても仕方ない。

私は生きたい。そして、帰るんだ。もと居た世界へ……

だから……

…今は力が欲しい…

そう願った時、私の中で何かが弾けた。

「くあああああつっ！！」

フレンは既に満身創痍。両腕と右足は焼け焦げ、まともに動けなくなっていた。

「フレンっ……ちいっ」

ミリアは舌を打つ。首元にナイフを突き付けられ、動こうにも動けない。

相変わらず、セリーヌは高笑いをしていた。だがその姿を見て、ミ

リアの胸に、どうしても違和感が残っていた。

ミリアはセリーヌに声をかけた。

「なあ、アイツがくたばるまで暇だからさ、何か話でもしないか？」

「……………」

セリーヌは答えなかったが、ミリアは構わずに続けた。

「なんかさ、アンタ最近口調キツくならなかったか？」

「……そうだったかしら？」

数拍遅れて、セリーヌは静かに答えた。

「ああ、そうだよ。元々俺はアンタより上だっただろ？昔、行き倒れているのを助けてやったのは俺だしな」

勿論全て嘘。だがミリアは、まるで真実かのように言った。

ミリアにはどうしても、このセリーヌがセリーヌではないように感じたのだ。

セリーヌはしばらく考え、こう口を開いた。

「…そう、だったわね…」

ミリアは確信する。

後ろで自分を羽交い締めに行っているコイツは、セリーヌではないと

……

「わりい、全部嘘だ」

「なっ……?!」

セリーヌの形をした背後の人物は、明らかに動揺。そしてナイフに力を込めた。

「ああそれと…」

ミリアは薄い笑みを浮かべ、目を閉じた。そして、こう言った。

「後方注意」

フレンを見ていたから気付かなかったのだろう。もう一人、伏兵の存在に…

背後の人物はミリアを突き飛ばし、素早く振り返った。

そこには大剣を振りかぶる奏。ナイフでは太刀打ち出来ない巨大な剣。

力強く振り下ろされた剣は、大理石で作られた床を深々と抉った。

身を翻し、偽者は回避。そのまま距離を取った。

「……つくく……」

偽者は汚い笑みを浮かべ、奏を見据えた。

奏は威風堂々とミリアの隣に立ち、偽者を睨む。

フレンが相手をしていた光は霧散。意識を奏に集中させたのだろう。光が消え、フレンは膝をつくが、その瞳から力は消えていなかった。そして、ふらつきながらも剣で身体を支え、立ち上がった。

「怪我人は寝てたほうが良いんじゃないか？」

ミリアが茶化す。それに対しフレンは。

「ふん、ずっと捕まってた奴に言われたくない」

眉間に皺を寄せ、ミリアを非難した。

だが、フレンの身体は傷つき、悲鳴を上げているのは確か。今も立つのがやっとだ。

「…でも、今回は流石にやられ過ぎた。僕は辞退させてもらっ」

自身の身体の事を見極め、一人距離を取り、腰を降ろした。最後に、フレンは笑顔で。

「使者様。面目ありません。後はお任せいたします」
そう言って眠りに就いていた。

言葉を受け取り、奏は一層眼光を強く決意を固めた物に変えた。

そんな奏にミリアは声をかける。

「一体どうしたんだ？さつきまで腰抜かしてたのによ」

「ん？死にたく無かっただけ。……それに……」

奏が言葉を切る。ミリアは奏の顔を覗き込んだ。

「たまには、頑張ってみようって、そう思っただけ」
言って奏は笑顔を作った。

奏自身、どうしてこうも笑えるのか分からなかったが、今自分は、この地に来てから初めて、心から笑えているように感じた。

「……そっか」

ミリアも奏の様子を見、お返しとばかりに満面の笑みを浮かべた。

「死ぬ前に楽しい会話は出来たか？」

偽者はほくそ笑み、余裕とばかりにそんな事を言った。

「……それにしても」

ミリアが偽者に視線を向け、哀れむような瞳で見つめた。

偽者はきよんとする。ミリアの哀れむような視線の意味を理解していない。

ミリアは溜め息を吐き。一言……

「お前、馬鹿だろ」

偽者はまだきよんとしていた。言われた言葉の意味を理解するまで時間がかかった。

数秒の後、偽者はやっと理解し、顔を怒りで歪めた。

「何を言うか！この私のどこが……」

「そんならさっきのに引っ掛かるなよ」

ミリアは大袈裟に両手を広げ、もう一度溜め息を吐いた。

「貴様あーっ！っ！」

偽者は激昂した。このような簡単な挑発に乗ってしまう所を見るとやはり頭はあまり良くはないらしい。

だが、成功と同時にミリアは、こんな奴に今まで騙されていたのだと、逆に悲しくなった。

「あ……」

奏はふと思い出し、ミリアに耳打ちをした。

「あのさ、あの光、私前に見たことあるよ」

「え、本当か？」

奏は昨晚の事を話した。

「なるほど……」

ミリアは何か考えて、偽者に言い放った。

「おい偽者！」

「む？」

「お前の術は既に見破った！！」

自信満々に胸を張るミリア。奏は流石にこれでは口を割らないと思
った。だが。

「何い？！私がこの者の身体を乗っ取っていると、何故分かった？
！」

「……………」

「……………」

沈黙……

ただひたすらに長い沈黙。
それを破ったのは奏だった。

「いきなりアイツが弱そうに見えてきたのは私だけ？」

その言葉をミリアが否定した。

「いんや、俺もだ……」

ミリアはフレンを見た。

やり遂げた顔で眠っているフレンが、今は滑稽に見えて仕方がない。

「…やっぱ、お前馬鹿だ」

ミリアの呟きに、偽者はやっと気付いたようだ。

「な……貴様等！卑怯だぞ?!」

地団駄を踏み、全身で怒りを表現していた。

ミリアにとってそれは、笑いを誘う物でしかなかった。

「殺す！殺してやる!!」

怒りに任せ、偽者は突っ込んできた。

その動きはあまりにも単純。先程までの華麗な動きが嘘のようだ。

「おっと…」

繰り出されたナイフをミリアはひらりと回避。既に攻撃する気も無くなってきた。

だが、すぐに後悔する事になった。

「ああっ畜生！あれ、神官長の身体だから攻撃できねえっ!!」

「馬鹿だったのは私達だったのかな……」

そんな会話をしながら回避を続ける。だが事態は悪化し、半狂乱になった偽者は、光の影を大量に作り出し、厨房を埋め尽くした。

「アレって、アイツが強いんじゃないよね？」

「ああ、結局神官長の力だしな」

このような状況でもこう言えるのは、一重に敵の馬鹿さ故だろう。

「あっはははは！！どうだ！親しいものは傷つけられないだろう！」

優位に立ち、偽者は高笑いをする。調子に乗りやすい奴だ。

「……あ」

ミリアが何か考え付いた。そして、すかさず奏に耳打ちする。

「ああ、なるほど」

奏もミリアの提案に賛同した。

相手の馬鹿さと調子に乗りやすい性格を利用した作戦。

ミリアが偽者の前に躍り出た。偽者は一瞬驚くが、すぐに余裕の笑みを浮かべ。

「どうした？諦めたのか？」

と聞いてきた。

「ああ、お前は強いよ」

素直に誉めると、案の定。

「当たり前だ。あっはははは！！」

高笑いを始めた。さらにミリアは誉めた。

「いやあ、神官長の真似。あれには参ったよ。天才はスゲーな」

偽者は恍惚とした表情を浮かべる。そこでミリアは一つの話を持ち出した。

「なあ、その才能でアイツの真似もしてみてくれねえか？」

親指でミリアが指した先。そこにはフレンが静かに眠っていた。

偽者は頬を綻ばせながら。

「任せろ」

自信満々に言い、セリーヌの身体から黒い煙となって抜け出した。それと同時に、光は霧散した。

その煙は次第に形を持つようになり、最後は金髪のロングヘア、碧眼、長い耳を持つエルフの青年へと変わった。意外にも長身で、顔の整った奴だった。

青年はグツと親指を立て、フレンの方へ駆け出した。

その途中……

ゴンッ……

鈍い、鈍器で殴る音。

剣を平らにして振り下ろしている奏の前に……

後頭部に巨大なたんこぶを作った青年が、うつ伏せで倒れていた。

戦いから一夜明け、朝を迎えた。

奏はメイドに頼んで新しい服を用意してもらった。昨夜の戦いの最中、自前の服が破れてしまったからだ。

メイドの持ってきた服には、これでもかと言うほどに装飾が施されていたため、必死に頼み込み、現在は装飾の無い質素な服を着用している。

対してミリアは遠慮という物を考えず、奏に渡された服程ではないが、綺麗な装飾を施した服に袖を通している。

着ている服は違っても、考えていることは同じなのだろう。

昨夜の青年の事だ。

外見上の特徴を見ても分かる。あの青年はエルフだ。

彼に関しては兵へ突き出すとき、「煽てれば何でも吐く」と言ったので、昨夜の内に取り調べは終了しているだろう。

だが、二人が気にしているのはその事ではない。

昨夜の青年然り、エルフは特殊な術を使う。

二人が抱えているのは、その集団に挑むことへの不安だった。

今回は相手が間抜けだったから良かったが、他はそうはいかないだ

ろっ。

長い沈黙が続く。

その沈黙を破ったのは、意外にも奏だった。

「ああ、考えても仕方ないか」

ベッドに腰掛けていた奏は、その場で身体を伸ばした。

「何悩んでるのよミリア？」

難しい顔で鏡の前に座るミリアの頬を、奏は後ろから忍び寄りつつやってやった。

ガンッ

久しぶりに感じる鈍痛。どこか懐かしさを感じながら奏は失神した。

氷を投げ捨て、ミリアは再び難しい顔に戻った。

ミリアは窓の外へ視線を移した。木に小鳥がとまり、愛らしい声で囀っている。

だが、ミリアはそんな物を見ず、ただずっと虚空を眺めていた。

昼になり、やっと意識が戻った奏は、ハーガル城の医務室へ足を運んだ。

扉を開くと独特の匂いが鼻腔をくすぐった。

目的はフレンとセリーヌのお見舞いだ。

気の利いたものは一切用意出来ないが、誠意を見せる事が一番、と切り替えていた。

セリーヌに関しては明日にでも現場復帰出来るらしいが、フレンはそうはいかないらしい。

光を受けた部分の損傷が酷く、しばらくは絶対安静とのことだ。

医務室は意外に広く、大量のベッドが配置されていた。

二人を探す。案外早く見つかった。

二人共一緒にいたので手間が省けた。

談笑していた二人は奏に気付き、姿勢を正して会釈をした。

思いの外、二人とも元気そうで奏はホッと胸を撫で下ろした。

「あ、二人ともそんなに畏まらないで下さい」

奏は二人に言った。二人は互いに顔を見合わせ、その後困ったような視線を奏へ向けた。

「いえ、やはりカナデ様は使者様ですし……」

フレンは言い辛そうに口を開く。

「その『使者様』っていうのが嫌なんです。普通にカナデって呼んでください」

奏は笑顔を浮かべながら続ける。

「それに、ミリアもフレンさんもセリーヌさんも、私は友達だと思っ
てます」

セリーヌは奏のその言葉に肩をピクリと震わせた。

「……残念ですが、私にはその資格がありません……」

手を離し、セリーヌは頭を下げる。

「今回の件は、私の不注意です。その所為でカナデさんにも、フレン
さんにも怪我をさせてしまいました」

言ってセリーヌはまた深く頭を下げる。懺悔するように、両の手
を胸の前で堅く組んでいた。

奏はセリーヌの肩に手を置いた。

「気にしてないです。フレンさんも気にしてないから笑ってたんで
しょ？…それに、セリーヌさんはちゃんと協力してくれたじゃない
ですか」

奏が夜に見た光。あれはあのエルフが出したものではないのだろう。
奏はそう踏んでいた。

セリーヌは目を伏せ、涙を流した。奏の予想は的中したらしい。

「…私を…許して、下さるのですか……」

セリーヌは声を震わせながら言った。

奏はセリーヌのベッドに腰を降ろし、震える肩を優しく抱き。

「許します。だって私達、友達じゃないですか」

そう口にした。

セリーヌは、声にこそ出さなかったが、大粒の涙を流した。

彼女は自分を厳しく律してはいるが、その反面、人一倍繊細な心を持っているのだろう。奏はそう感じた。

「そんな風に言われたら、私も入らなければいけませんね？カナデさん？」

一人放置されていたフレンが二人を見て言った。

三人の間に和やかな雰囲気が漂う。が、それも長くは続かなかった。

「私もまげてくださあゝい」

パタパタとスフィアが駆けてきた。そして。

「ふぎやうつ？！」

盛大にすっ転んだ。慌てて奏がスフィアを起こす。

「ふえ……」

涙目で奏を見上げた。その愛らしい姿に、奏は思わずスフィアを抱き締め。

「むしろ妹になって！」

そう口走っていた。

「カ、カナデさんっ、痛いです。離してくださいっ」
仕方なく奏はスフィアを解放した。

スフィアはフレンのベッドまで歩き、フレンの横に腰を降ろす。そして花のように可愛らしい笑みを浮かべる。

「本当に仲が良いですね」

奏は二人を見て素直な感想を口にした。

「あの二人、昔は凄く仲が悪かったんですよ」

セリーヌが昔を懐かしむように二人を見つめる。

「そう、なんですか…」

今の二人からは想像できなかったが、人の過去を詮索するのは良くない。奏は興味を胸にしまった。

「あ、私そろそろ行きますね」

用事を思い出し、奏は医務室を後にすることにした。

警備をしていた兵士に道を聞き、奏は城内でも特に人気の無い場所を歩いている。

途中から床の材質が大理石から無骨な岩の床に変わる。同じ城内でも、ここはまるで異空間のようだ。

それでも奏は迷わず足を運ぶ。目的地はもう目と鼻の先だ。そして、奏の目の前に一つの扉が現われた。

その隣にいた兵が、奏を呼び止めた。

「使者様。貴方のような方が、何故ここへ来られたのですか？」

「ここに昨日のエルフの男の子がいますよね？」

奏の言葉に兵が目を白黒させる。何故それを聞くのか理解できない、と言った感じがした。

奏は兵を見上げ、言った。

「会わせて下さい」

「……………はあ？」

兵は素っ頓狂な声を上げる。しばしの沈黙の後。

「む、無理です！」

焦った様子で奏の提案を拒否した。

「そこを何とか」

奏は食い下がる。

「危険です」

兵は拒否する。

この問答を何度か繰り返し、青年に極力近づかず、危険を感じたら速やかに逃げる事を条件に、兵は許可を出した。

「少しだけですょ？すぐに戻って下さいね？」

「はい」

兵の必死な呼び掛けを聞き流しながら、奏は冷たい空間に足を踏み入れた。

冷たい牢獄。無機質な岩肌が剥き出しの壁。檻の中には膝を抱え震える青年。

檻の中はトイレとベッドのみが用意され、それ以外は何もない。

「何しに…来たんだ…」

青年は死んだような瞳で奏を見据えた。

「少し話をしたいと思って」

奏は努めて明るく言った。

青年は顔を上げる。ミリアから聞いた話では、エルフは総じて美しいらしい。この青年も例から漏れず、綺麗に整った顔をしている。

「話を？」

気のせいか、青年の瞳に輝きが生まれたように見える。

「ええ…名前、教えてくれる？」

同級生と話すような軽い感じで奏は尋ねた。

青年は少し間を置いて。

「…クウィン…」

そう名乗った。

「クウィン、か。格好良い名前じゃない」

奏はクウィンを誉めてみた。昨夜の彼なら間違いなく鼻高々になる筈だ。

「やっぱり？！やっぱりそう思う？」

パツと明るくなった。扱いやすい。

だが、奏は利用するとか、騙すのが目的ではなく。純粹に彼と話をしてみたい。そう思ったのがここに來た理由だった。

兵からの情報によると、彼は命令されて活動していただけの、所謂捨て駒だったらしい。

指示された通りに動き、捕まり、おそらくは処刑されるのだろう。

それは余りにも不憫だ。

奏は当たり障りのない会話で場を繋いだ。こうして話していると、彼は頭は良くななくても、純粹で素直な青年なのだと感じた。

「ボク達ってもう友達だよね？」

クウインが笑顔でそう言った。一人称が変化し、口調も幼くなっている。こちらが彼の素なのだろう。

「うん、もちろん」

クウインの問いに、奏は迷わず答える。心からそう思った。

二人はどちらともなく手を差出し、堅い握手をした。

その時、兵が扉を開けた。

「使者様。そろそろ……」

兵と奏、クウインの視線が絡み合う。

奏は兵に首根っ子を掴まれ、強制連行。去りぎわにクウインが。

「またねっ」

そう言ったのを聞きながら。

廊下を歩きながら奏は考えていた。

今後のこと、使者の使命のこと。

使者としての自覚はまだはっきりとはしていない。だが、感じたことが一つだけあった。

「仲良く…出来ないのかなあ…」

それは、人と妖精、エルフの共生だった。そう思ったのは、クウインのようなエルフもいると知ったからだ。

使者の使命。世界を平和へ導くこと。

それは単なる絵空事なのかもしれない。

馬鹿げた事なのかもしれない。

だが、奏はその理想を追いたいと感じた。

何よりも、ミリア、フレン、セリーヌ、ハーバレス、スフィア、そしてクウイン。新しく出来た人との繋がりを守りたい。

「…まずは、クウインをどうにかしないと…」

奏は呟く。馬鹿にされてもいい。非難されてもいい。視線を前に向ける。ミリアがこちらに手を振っていた。

「おーい、カナデー」

この際、自分の信じた理想を追いつけてやろう。

奏は決意を固め、ミリアに手を振りながら……

小さくても大きな一歩を。

前に踏み出した……

第三章↳戦い・出会い・決意↳（後書き）

読んだ方は評価して下さいと嬉しいです。

第四章↳追憶・出会い↳（前書き）

奏が……（汗）

第四章↳追憶・出会い…

あなたがくれたもの

それは優しさ

あなたがくれたもの

それは愛しさ

あなたがくれたもの

それは安心

あなたがくれたもの

それは居場所

私から贈る感謝の言葉

- ありがとう -

深夜、誰もが寝静まる中。スフィアは目を覚ました。
「寝ちゃったんだ…」

ハーガル城の医務室。

フレンを見舞いに来て、スフィアはそのまま眠ってしまったようだ。

「起きたのか？」

すぐ傍から優しい声。フレンだ。

「すみません、フレンさま」

スフィアは目を伏せたが、フレンは優しくその頭を撫でた。

「…フレンさまはどうして、起きてたんですか？」

フレンはスフィアの問いに、微笑みを浮かべたまま答えた。

「いや、ただ昔を思い出してね」

その言葉に、スフィアも笑みを浮かべ、フレンの手を握った。

「…私も今、夢に見ていました…」

「……そうか」

二人の間に流れる沈黙。

「もう寝よう。スフィア」

「…はい」

スフィアが答えると、フレンはすぐに小さな寝息をたて始める。

「……………」

スフィアは窓の外を見つめ、出会いの日に思いを馳せた……

「はあっ…はあっ…はあっ」

少女は人気の無い路地裏を必死に走っていた。昼でも薄暗く、常にならず者が徘徊し、人が好き好んで近づくことはない場所だ。

その手には本日の戦利品。三日は贅沢出来るだけの金が袋に入っている。

少女の後方で黒煙が上がった。

「待てオラアツ、この糞ガキがあっ」

次いで聞こえる汚い男の声。少女は振り返ることなく走り続け舌を打った。

「ちっ…んだよ、しつけれ…」

少女は自身に生える羽で飛翔しようとも思ったが、止めた。

いずれ城の兵が駆け付けけるだろう。今飛べば見つかってしまう。

仕方なく薄暗い道を疾駆する。枝毛だらけの赤髪が翻った。

「…気高き焰の光、我に仇なす敵を焼き尽くせ…」

呪文無しでも発動は可能だ。だが、これを唱える事で威力は跳ね上がる。

「死んじまいな、オッサン」

後方から追ってきていた男に、少女は魔法を放った。バチツと、火の爆ぜる音と共に、男の体が炎に包まれた。

「あああつ、ああつ…」

少女は足を止め、惨めな声を上げ蹲る男を見つめる。

少女の口元は醜く歪んでいる。それに対し、男は懇願するように少女を見上げた。

「たっ頼むっ、火を…火を…消し…」

そう言う男の体は、全身が黒く焼け焦げている。

「…くくっ…あははっ…」

少女がその炎を消すことはない。それどころか男の姿を見、必死に笑いを堪えていた。

「ばあーか、そのまま焼け死ね」

少女は言い放つ。その瞳、言葉には慈悲が微塵も感じられない。

炎が少女の姿を照らしだす。残酷な言動の似合わない、愛らしい容姿。衣服を整えれば更に輝くだろう。

しかし、男の目には悪魔の様に映っているだろう。

その時、遠くから足音が聞こえた。少女は足を止め過ぎたのだ。

少女は路地裏を駆けた。

動かない男を残して……

フレンは城内を歩いている。

特に目的があるわけではない。ただやることが無いだけだ。

十九歳の彼は、先日の戦いで位を一つ上げ中隊長となった。

だが、彼の顔からは喜びを感じられない。表情を固定し、笑顔が一つもない。

彼は多くの人々を護りたいという使命感を胸に、騎士団へと入った。そのため、彼はこの地位では全く満足していないのだ。

今日の彼は昇進と同時に休暇が与えられた。しかし、いきなり休暇を与えられても彼にはする事が一つもない。

仕方なく中庭へ出て、丁度良い場所を探し、腰を降ろした。

非番の今日は鎧を着ていない。安物の服に身を包んでいる。

鎧を着ていない彼は、どこか弱そうに見える。体と顔には傷一つなく、ただの街に居る若者と何ら変わり無い。

時間を潰そうと城へ足を運んだが、やはり何もなく、結局暇になってしまった。

「あら、フレンさん？」

不意に名前を呼ばれた。優しい女性の声。この声には聞き覚えがあった。

「こんにちは、セリーヌさん」

セリーヌ。フレンの幼なじみである妖精の上司だ。

セリーヌは神官長を務める、心優しい女性。同じ妖精でも凄い違いだ。と、フレンは思う。

「今日は非番じゃなかったんですか？」

セリーヌはフレンの隣に腰を降ろし、そう聞いた。

「いえ、家にいてもする事が無いので…」

彼はハーガル城近くの貸家に住んでいる。家賃が安いというだけで選んだ場所だ。

セリーヌはフレンの答えを聞き、微笑み。そして何か思いついたようにこう言った。

「お暇なら、教会へいらっしやいませんか？」

街を出てすぐ近くの森の中に教会はある。神聖な雰囲気漂うこの場所には、多くの信者の聖地となっていて、各国から沢山の人が訪れている。

セリーヌは何か準備があるらしく、どこかへ行ってしまった。

そしてフレンはいつもの事ながら、教会の大きなステンドグラスに圧倒され、自然と祈りを捧げてしまう。

「信仰熱心な奴だなあお前」

背後から声。厳かな教会に不似合いな口調。だが澄み切った綺麗な声……

フレンは振り返らずとも誰なのか分かっていた。

「君はもう少し信仰心を持ったほうが善いと思うぞ？ミリア」

フレンは背後に居る少女の名を呼んだ。少女はわざとらしく溜め息を吐いた。

ミリア。青い髪はこの少女は、この教会の神官でありながら祈りをサボり、セリーヌとしょっちゅう口喧嘩をしているフレンの幼なじみだ。

「んな堅っ苦しい事言ってんじゃないよ」

相変わらず口が悪い。その所為で美しい容姿が台無しになっていた。

「それより、お前がここに居るのは珍しいな」

「君が神官服を着てここに居る方が稀だと思うが…」
普段のワンピースではなく、今日のミリアは神官服を着用していた。

「ん？まあ、気分だよ気分」
皮肉に気付かず、ミリアは話を続ける。

「んで？何でお前がここに居るんだ？」

「ああ、実はな…」

フレンが説明しようとしたその時。

「フレンさん、お茶の準備が出来ましたよ」

セリーヌが現れそう言った。それを見たミリアは。

「……成る程…な」

ごゆっくり。と言いながらどこかへ行ってしまった。

完全に誤解されたようだ。

だが、追いつけて誤解を解く必要も無いと思ったフレンは、無視してセリーヌの方へと向かった。

広い廊下をしばらく歩き続ける。

その間、二人が話していたのはミリアについての話が殆どだった。
大半が愚痴だが……

「大体アイツは……」

「あつ…着きましたよ?」

フレンが愚痴を続けようとした時、セリーヌが一つの部屋の前で足を止めた。

「ここって」

「はい、私の……」

ガシャーーンッ

「……………」
「……………」

会話の途中。凄まじい騒音と共に罵声、怒声が部屋から響いた。

「離せつつつてんだろ!殺すぞ!」

声色は少女の物だが、放っている言葉はその声には似つかわしい。

また一つ、何かを倒すような音が響く。

セリーヌが部屋のなかへ駆け込んでいった。フレンも一拍遅れで部屋へ駆け込んだ。

部屋のなかには物が散乱していた。飾られていたであろう、壺などのアンティークは無残に割れ、床に転がり、カーテンは引き裂かれ、カーペットは所々焼け焦げていた。

部屋の中央に縄で腕を縛られた少女と、それを宥める一人の兵士が立っていた。

セリー又は二人に駆け寄り仲介を始めた。

フレンはその様子を遠巻きに見つめていた。

縛られている少女はフレンと同じ赤い瞳を持ち、手入れを全くしていないであろう赤髪を振り回しながら暴れている。

羽が生え、彼女の周囲のカーペットが焼け焦げていることから、フレンは少女が火の妖精であると踏んだ。

よく見ると彼女の首に首輪があるのを見つけた。

『封術の宝石』。エルフとの争いの最中、人が偶然に見つけた物だ。これを身につけた者は、身体から力が抜け、能力を発揮できなくなる。

過去、エルフとの戦いでは、捕らえたエルフに付け、その能力を無効化したらしい。

その効果は完全ではないものの、大半のエルフはそれで抑えられたそうだ。

「落ち着きなさいっ」

「うるせえっ！離せ！」

少女の周辺でパチパチと火が爆ぜている。微弱な物だが、アレを付けたままで火を起こしているのだ。つまり少女は相当の力を持っているということになる。

少女は依然として暴れている。セリーヌと兵士が困ったように顔を見合わせる。

少女が叫ぶ。

「この縄解け！早くしねえと……」

急速に室温が上昇する。少女はまだ本気を出していなかったのだ。

「不味いつ……」

フレンは止めに入ろうと駆け出した。が……

ぐうっ……

その音と共に室温は下がり、代わりに少女の顔が赤く染まった。

「御飯に……しましうか？」

セリーヌの言葉に、少女はこくりと頷いた。

スフィアと名乗った少女は、一心不乱に料理を口のなかに詰め込んでいた。相当腹が減っていたらしい。

「壊れていますね、コレ」

フレンの隣に座るセリーヌが、首輪を見て呟いた。

「最初からですか？」

最初から壊れていたのなら色々と納得できる。だが、セリーヌは首を横に振った。

「いえ、あの子に付けた時は正常でした」

「……………」

フレンは言葉を失った。啞然とするフレンを見て、セリーヌは結論を述べた。

「あの子の力で、この宝石を壊した。そうなります」

フレンはスフィアを見る。過去、捕らえたエルフの誰もが力を封じ込められた宝石を、この小さな少女が破壊した。

とても信じられる事ではない。

「フレンさん、今日見た事は他言無用ですよ？」

「……はい」

彼女の能力の高さが知られば、必ず利用しようとする輩が現れるだろう。

「そうですね……特に貴方の上司、ハミル少将には注意して下さい」
ハミル少将は実力はあるが、姑息な手段を取り、裏と繋がりがあるという噂が絶えない人物だ。確かに、彼にスフィアの事を知られるのは不味い。

「分かりました」

フレンが了承すると、続いてセリー又は傍に立っていた兵士にも声を掛けた。

兵士は「了解しました」と言い、敬礼をした。若い兵士だという事が多少不安だが仕方ないだろう。

フレンはスフィアへ歩み寄った。スフィアはフレンに気付き、見上げる。明らかに警戒している目だ。

「僕はフレンだ。宜しく」

手を差し出す。だがスフィアはそれを無視した。

「キミ、親は？」

「……………」

フレンの問いに、スフィアは食事をしている手を止め。

「…死んだ」

こう答えた。フレンはそれ以上何も聞かなかった。

フレンは少し考え、セリーヌに声を掛けた。

「どうかしましたか？フレンさん」

フレンはスフィアを見つめ、意を決したように言った。

「僕がスフィアを預かります」

木の軋む音と共に、ボロ屋の扉は開く。

フレンの自宅には気の利いた装飾品は何一つ無い。

あるのはベッドと棚、後は武器の手入れ道具ぐらいだ。

「入ったらどうだ？」

フレンは未だ玄関で様子を伺っている少女。スフィアに声を掛ける。

「……………」

警戒心は更に高まっているようだ。仕方ないだろう。本人の了承も無しに大人三人が決めたのだから。

『…………死んだ』

スフィアの言葉がフレンの頭の中に甦った。

それは余りにも残酷な話だ。幼い少女一人で生きていける程、世界は甘くはない。それは、フレン本人が過去の経験で分かっている事だ。それに、スフィアは小さな身体にずっと背負ってきたのだ。

家族の居ない孤独の中に生きるこの苦しみを……

だからだろうか、フレンはスフィアを放っては置けなかった。

スフィアはようやく中に入ったが、警戒は解いていない。そして、フレンから遠く離れた所で、壁に背を預ける様にして座った。

「……………おい」

長く続いた沈黙を、スフィアの小さな呟きが破った。

「どうした？」

フレンはスフィアを促した。スフィアは膝を抱えて体育座りの態勢になり、曲げた足に顔を埋めた。そして、おもむろに口を開いた。

「何であたしの面倒を見ようと思ったんだよ」

「……………」

フレンは答えなかった。だが、スフィアは構わず続ける。

「知ってるんだろ？あたしが今まで何やってたか」

「……………ああ」

フレンは短く答える。その話はセリーヌから聞いている。

街ではちょっとした噂にもなっていた事だ。

赤髪の悪魔が宵闇に舞い、金を求め人を襲う……

その悪魔がスフィアだ。

犯罪に手を染め生きてきた。死人が今まで拳がっていないのは、騎士団が素早く現場へ駆け付けていたからだ。被害者は皆、全身に火傷を負っていた。

「分かってるなら、何で招き入れた」

そう言うスフィアの声には明らかな怒りが込められていた。

フレンは少し考え、さらっと……

「可愛いから」

と言った。

スフィアは林檎の様に顔を赤らめ、明らかに狼狽した。

「なっ……………」

「…っていう理由じゃあ駄目か？」

結局それはフレンの冗談だったようだ。次いでスフィアから聞こえた、何かが切れる音。

「……一つ言っておく」

ふらりとスフィアが立ち上がった。先程よりも殺気に満ちた空気が彼女を包んでいる。

フレンは固唾を呑み込む。今、ほんの一瞬だけ避けようの無い『死』をイメージさせられた。

これがスフィア本性なのだろうか。

フレンはスフィアが目の前に来るまで身体の何一つ動かすことが出来なかった。

「生半可な正義感が通用する世界じゃねえんだよ。…現実はない」

スフィアの鋭い眼光が、フレンの身体を射抜いた。フレンの本能が告げる。

・コイツは危険だ・

……と。

だが、フレンは己の意志に逆らい、無理矢理口元に笑みを作り。

「なら、無理にでも通用させてみせるっ……」

後半は多少声が擦れたが、フレンは言い切った。悪魔と呼称されるスフィアへ、挑戦状を叩きつけたのだ。

「……………」

長い沈黙。フレンは一生この時間が続くのでは、とまで思った。それ程までに長い沈黙だった。

「……………ふんっ」

突然スフィアが鼻を鳴らし、元居た壁の位置まで戻っていった。

フレンはホッと胸を撫で下ろす。死の恐怖から解放され、全身から力が抜けていく。

「最後にもう一つ」

スフィアの声にフレンは身体をビクンと震わせた。

スフィアは流し目でこちらを睨み付けている。

「今は寢床としてここを使うが、要らなくなったたらお前を殺して出ていく」

「……………」

蛇に睨まれた蛙。と言ったところか。殺すと明言され、死の色が一層濃くなったようにフレンは感じた。

「いつ何時そうなくても良いように、首だけはしっかり洗ったときな」

フレンの背筋に悪寒が奔る。やはり格が違う。

言葉を残し、スフィアは静かな寝息をたて始める。

「…割りの合わない賭けだな…」

彼女がここを出ようとするまでに、自分の正義を立証しなくてはならない。

フレンはグッと両手を握り、有りったけの力を拳に込める。

負けて失うのは命。勝って得るのは何か分からない。
とんでもない賭けだが、やらなくてはならない。

「絶対に……勝ってやる！」

小さくも決意に満ちたフレンの声が、室内に残響した。

スフィアは早くに目が覚めた。ベッドではフレンが静かに眠っている。

ふとスフィアは、自分の体が冷えていない事に気付いた。

「……………」

暖かい毛布が掛けられていた。スフィアはフレンに視線を移す。

フレンの体には何も掛けられていない。スフィアは舌を打つ。アイツはこんな事で自分を懐柔しようとしている。スフィアはそう思っ

た。

毛布を乱暴に放り、スフィアは立ち上がった。

「……一生寝てろ」

呪いの言葉を残し、スフィアは朝霧の舞う街へと向かった。

季節は既に冬を終え、春が近づいている。だが、早朝は流石に冷え込み、街を歩くのは朝市に備える住人だけだ。

「ちっ……」

火を操る妖精でも、こればかりは仕方ない。

周囲に火を放ってしまおうかとも思ったが、止めておく。昨日は人のいい神官で助かったが、昨日の今日ではあの神官も助けはしないだろう。

スフィアはしばらくの間、意味もなく歩き続けた。

依然として霧は晴れていないが、人通りは多くなってきた。

その時だ。人の群れが妙な動きを始めた。

「……何だ？」

好奇心に突き動かされ、スフィアはその中心へと歩を進めた。

近づく、人は皆道を開けているようだった。それも大きな道だ。一体どこの要人が闊歩しているのか。気になったスフィアは、道を開けず、その中心へ立った。

「……………」

道の開けた先に立っていたのは、スフィアと大差ない背丈の妖精の少女だった。

青髪の少女は眉間に不機嫌そうに皺を寄せ、手をだらしなく前に垂らしていた。

それさえ無ければ相当美しい。スフィアは素直にそう感じた。

「……………」

ピタリと動きを止める少女、ミリアは目を細め、スフィアを見た。

互に見つめ合うこと約十秒。ミリアが口を開いた。

「……………邪魔」

「はぁ？どこがだよ」

ミリアの言葉に、スフィアが反論する。それを見ていた人々は、皆が額に手を当てる。そして皆が冷や汗を掻いていた。

スフィアの言葉を聞いたミリアは、額に青筋を浮かび上がらせ、口元は片方が異常に吊り上がらせた。

「道開けろつつたんだよ」

「開いてんだろ？ほら、よく見てみるよ」

ここは街の大通り。人が皆脇に身を寄せているため、十分にスペースはある。

だが、寝起きのミリアには言っても無駄。彼女の寝起きの悪さは周知の沙汰だ。

この辺りの住人は、密かにミリアをこう呼んでいた。

朝霧に狂う青髪の鬼……と。

勿論、スフィアはその事を知らない。いや、知っていたとしても彼女は今のような態度をとっていただろう。

「…お前さあ」

辺りが静まり返る中、スフィアが自身の赤髪を掻き上げながら気だるげにこう言った。

「…馬鹿だろ」

……ブチン……

その場に居た全員が、音を聞いた。それはそれははっきりと……

ミリアが右手を空に掲げた。そして、小さな声で呪文を詠唱する。

「…万物を凍てつかせし絶対零度の吹雪よ……」

続いてスフィアも詠唱を始める。

「…全ての者を焼き尽くす灼熱の業火よ…」

住人達は避難を開始。ミリアは吹雪を、スフィアは火炎を背負い、互いを見合っていた。

スフィアは感心していた。ミリアの力が想像以上に大きかったからだ。

ミリアは寝起きにキレた場合のみ巨大な力を発揮する。この力は彼女の怒りのボルテージが限界を越える事で発生していた。

「我に仇なす敵を氷結させよ！」

「我に仇なす敵を焼き尽くせ！」

二人が同時に力を解放……しようとしたその時。

「うあっ……」

「なっ……」

二人は後ろ襟を掴まれた。

ミリアはセリーヌが、スフィアはフレンが……

襟を持つ二人は、口端を吊り上がらせていた……

ハーガル城の廊下。剣術の稽古へ向かう道を、『スフィアと一緒に』歩いていた。

セリーヌから目を離すなと言われた為だ。

「……………はあ……」

フレンは溜め息を吐き、自身の右隣を歩くスフィアを見た。

「……………ちっ」

スフィアは機嫌を隠す事なく舌を打つ。眉間には皺を寄せ、腕を頭の後ろで組んでいる。

「……………おい」

スフィアがフレンに向かって声を掛けた。フレンは聞かぬ振りをして歩を進める。

「……………おいっ!」

反応しないフレンに、スフィアは火を放とうとした。が。

「うつ……」

バチッ……

スフィアの手に着された腕輪から火花が散り、彼女の力の高まりが遮断された。

フレンの左手には小さなスイッチ。彼がスイッチを押すと、スフィアの腕輪から火花が散る。

術の詠唱には集中力が少なからず必要だ。簡易な装置だが、スフィ

アにはこれが有効の様だった。

「……フレン」

「…あ？」

フレンが呟いた。スフィアは腕を擦りながらフレンを見上げる。

「僕は『おい』なんて名前じゃない。フレンだ」

珍しく怒りを見せるフレン。互いに足を止め睨み合う。

「誰が呼ぶかよ」

スフィアは鼻を鳴らし、外方を向いた。今は兎に角、優位に立たれている事が腹立たしかったのだ。

「……………」

フレンは無言のまま歩きだした。スフィアは舌を打ちながら少し後ろを歩いた。

剣と剣の打ち合う音。鎧がぶつかり合う金属音。

広い広い演習場は城の広場に造られ、多くの兵が日々鍛練を積む場所だ。

フレンも現在は鎧を着込み、三人を同時に相手していた。

「フレン殿、いざっ！」

三人の兵士がタイミングをずらし、フレンへ踊りかかる。

「破！」

フレンも剣を振るう。流れるような動きには一部の無駄もない。

相手の三人とは格が違う。

一瞬の攻防。四名は完全に動きが止まっているように見えた。

ピタリと動きが止まった後、フレン以外の兵士は一斉に倒れ伏した。

「次！…その五名！」

フレンが続いて他の兵士を指名した。指名された五名は肩をびくつかせた。

その光景を、スフィアは遠くから眺めていた。

広い演習場のあちらこちらで兵士達が剣を打合せている。

「何がいいのかねえ…」

市場のおばさんのような物言い。スフィアは兎に角暇だった。

フレンを見る。部下に当たる兵士を一度に十名相手にしていた。

「あたしなら…五十人…いや…」

百人は殲滅出来る。スフィアにはそれをする自信があった。それは決して自惚れではない。

「素晴らしい自信ですね」

背後から男の声。スフィアが振り返ると、そこには線の細い白髪の男が立っていた。

その男は目が隠れるほど髪を伸ばし、表情が分かるのは口元だけ。柔和な笑みを浮かべてはいるが、明らかに胡散臭かった。

背は無駄に高く、凡そフレンと大差ない。だが、余りにも線が細く、着ている鎧が不似合いだった。

「可愛いお嬢さん。何故このような汗臭い場所へ？」

甲高い声。聞いているだけで苛ついてきたスフィアは、その男を無視することにした。視線をフレンへ戻す。

「おやおや、振られてしまいました」

やれやれと、大げさに手を広げ、首を振る男。

それでも反応を示さないスフィア。男はスフィアをじっと見つめ……

「おおっと…思わず見惚れてしまいました」

「……………」

いい加減うざかった。スフィアは声を出しかけて止めた。ここで話したら負けだ。

「ではでは、私は稽古の続きがありますので」

一通り話し終えたのか、男はひらひらと手を振りながら駆けていった。

「……………はあ……………」

長い溜め息。息が詰まる会話だった。会話といっても、一方的に話し掛けられたただだった。

フレンは現在、二十名の兵士を相手にしていた……

「如何でしたか、ハミル少将」

先程スフィアに話し掛けていた男、ハミルは目に掛かる前髪を掻き上げた。

細長の目が現れ、薄く開いたその目からは、金色の怪しい光が覗いていた。

「いやいや、彼女はガードが堅いですね。落とせる雰囲気は全くありません。マウリ君、キミはいけそうですか？」

マウリと呼ばれた新米兵士。彼は、以前スフィアと一緒にいた兵士。

特にコレといった物の無い、極々平凡な青年だ。

「いや…私は…」

ハミルの問い掛けに、マウリは両手を振り、無理だと表現した。

「安心しなさい。貴方の中隊長昇進は約束しますよ」

ハミルが笑顔で言ったその言葉に、マウリは瞳を輝かせる。それはまるで少年のような瞳だった。

「はいっ、ありがとうございますっ!!」

深々と頭を下げるマウリ。その瞬間。ハミルの顔から笑みが消え、冷酷な表情へと豹変させ、こう呟いた。

「邪魔な小蠅がいるようですね……」

「…？ハミル様。何かおっしゃいましたか？」

マウリが顔を上げ、尋ねる時には、既にハミルは元の笑顔へ戻っていた。

ハミルはマウリに背を向け、スフィアを見る。

スフィアは、フレンと激しい口論をしていた。

それを見たハミルは、誰にも聞こえないような声で呟く。

「…薄汚い小娘が…」

その言葉は風に流されていった……

「ああっ…どうしてキミはそう乱暴な言葉しか使わないんだ!!」

「んなの、あたしの勝手だろうが!!」

稽古が終了し、二人は兵士用の食堂へと足を運んでいた。

「大体！最初と話が変わってるだろ!!」

口論の始まりは夕食が食堂の物である事。スフィアが。

『兵士に支給されるような不味い飯が食えるか!!』

と言った事から始まっていた。

口論を続けながらもどうにか食堂まで辿り着いたが、今度は別の話へシフトしていた。それが今である。

「関係あるね!」

「どこがだよ!」

互いに引かず、トレイを持ちながら睨み合っていた。
この食堂は好きなものを取り、自由に食べる。つまりはバイキングだ。

フレンがサラダに手を伸ばす。するとスフィアが。

「てめえ！それはあたしが食おうとしてたんだ！」

「関係ないだろ！それは！」

このような口論を最後まで続け、所定の二倍かかってやっと二人は席へ着いた。

「……………」

「……………」

結局。互いのトレイには全て同じ物が並んでいた。

二人の好物は、不思議と同じ物ばかりだった。

二人は無言で箸を動かし、黙々と口へ料理を運んでいった。

食事は所定の3分の1で終了した。

「……………帰るよ」

フレンが席を立つ。

本格的な戦の始まっていない現在は、見回りの兵と、若干名の兵を城内に待機させ、後は自宅へ帰ってもよし、城内に残ってもよしだった。

フレンはこれが平和ぼけし過ぎだと感じるのだが、今の彼にはまだ発言力は無い。

フレンが立つと、スフィアも席を立った。

二人は城を出て、大きく開けた道を歩く。

人通りは減ることなく、むしろ昼よりも増えているように感じられた。所々で出店を開いており、まるで小さな祭りのようだ。

フレンはスフィアの視線が出店へ向いていることに気付いた。

「どうした？行きたいのか？」

フレンの声に、スフィアはハッと我に返る。そして顔を真っ赤にした。

「んなわけねえだろうがっ!？」

明らかに狼狽えていた。

赤くなった顔を隠すように、スフィアはどんどん先へ進んでいく。

「早く帰るぞ！」

フレンはスフィアの横に並んだ。そして結局、口論をする事になるのだった……

第五章↳追憶・フレン・（前書き）

えゝ
…

何かあれば感想まで。

第五章↳追憶・フレンィ

「……………」

翌日。自宅のベッドに座り、フレンはスフィアを見て考えていた。

スフィアはボロボロの衣服に身を包み、髪は酷く痛んでいる。『外見は』可愛らしいのだが、手入れがされていないこの二つが彼女をみずばらしく見せていた。

スフィアは相変わらずフレンからは遠い場所に座っている。まだ距離は遠い。

「……なんだ？さつきから」

スフィアは自分を見る視線に気付き、フレンを睨みながら言った。

「……いや、可愛いなと」

フレンは考えていた事的一端のみを答えた。スフィアの顔が紅潮する。彼女はこの手の言葉の耐性が無いらしい。

「うるせえっ！」

顔を隠すように、スフィアは毛布を被る。

「……やっぱり、キミは言葉遣いに気を配ったほうがいい……」

フレンは溜め息を吐いた。そう、服装もそうだが言葉遣いも悪いのだ。この少女は。

「ちっ、だからそれはあたしの勝手だろ」

当の本人はそれで良くて、フレンは良くなかった。身内のにこれ以上口の悪い女性は要らない。と、フレンは思っていた。

「……よしっ」

少し考えた後、フレンは力強く拳を握り、立ち上がった。

「お前はあたしのする事に口出しするな…って、おいっ?！」

文句を言い続けるスフィアの手を、フレンは力一杯に掴み、引っ張った。当然、スフィアは面食らう。

「放せっ！」

スフィアはフレンの手を振り解こうとするが、腕力ではフレンに分がある。

「ちいっ」

スフィアが火を放とうとすると…

「っあっ?！」

フレンがスイッチを押し、妨害する。スフィアはもう、為す術が無かった。

「どこ行くつもりだ」

声を低くして、スフィアはフレンを睨みながら言った。フレンはスフィアを見ることなく。

「秘密」

とだけ言った。

スフィアは結局、フレンに引き摺られるように付いていった。

「……………で」

スフィアは額に青筋を浮かべ、怒りに体を震わせている。

身に纏っている服はいつものボロい服ではなく、愛らしいワンピースだ。

「なんだよ…コレ…」

スフィアが呟くと。

「何って、どう見てもワンピースだろ？」

隣にいたミリアが答えた。

二人がいるのは、街でも中々に評判の洋服店。そこでミリアはスフィアの服を選んでいる。

「そうじゃなくてだな…ああっ畜生っ?!」

苛立ち、スフィアは壁を渾身の力で殴る。壁は想像以上に堅く、スフィアは悶絶した。

「……馬鹿だろお前」

ミリアは、必死に手の痛みを堪えるスフィアに言った。スフィアもこればかりは反論出来なかった。根は素直なのだ。

「……何でお前なんだよ……」

スフィアは潤んだ瞳でミリアを睨む。全く威圧感が無い。

「こつちが聞きたい」

ミリアはスフィアの言葉を軽く聞き流しながら、新しい服を探し始めた。

数時間前。ミリアのもとを、フレンがスフィアを引っ張り連れてきた。そして。

『これで彼女に服を選んでやってくれ!』

ミリアに金を掴ませ、そのままフレンは城へ走って行ってしまった。フレンがミリアに渡した額は必要以上に大きい。おそらく、残った金はミリアへの駄賃なのだろう。

現在ミリアは、スフィアの服を安く済ませようと奮闘中である。

スフィアとは昨日の因縁がある。だからミリアは余計に早く済ませたかった。

「フレンの事だ。どうせ俺が暇だと思ったんだろ」

スフィアの問いに、ミリアは適当に返した。

スフィアは舌打ちをし、辺りの服を見渡した。そして深い溜め息を吐く。

「ったく、何のつもりだよアイツは」

スフィアの悪態を、ミリアは完全に無視していた。

ミリアも女だ。可愛らしい服には興味があつた。だがミリアは万年金欠であり、服に回す金などなかった。手早く終わらせようと思っていたが、それが勿体なく感じたミリアは、スフィアに声をかけた。

「お前、こういう服を着たことは？」

ミリアがスフィアを見る。

ミリアはスフィアの声に気付いていないようだ。周囲の服を、目を輝かせ、興味津々に見ている。

「……おい」

「っ?! なっ、何だ?!」

スフィアが狼狽える。ミリアは口元に嫌らしい笑みを浮かべ、腕を組み、仁王立ちしながらスフィアを見た。

「お前、実は興味あるんだろ。こっこの」

スフィアの顔が林檎になる。やはり分かりやすい。

「な、なわけねえだろうがっ?!」

必死に否定しているが、スフィアの視線は先程見ていた服から離れない。

「認める認める」

ミリアはスフィアの肩をポンポンと叩く。スフィアは「ふぁ…」と、らしくない声を上げていた。

「興味、あるんだろ?」

再度、ミリアが聞く。するとスフィアは、小さく頷いた。

「う~~~~~っ……」

スフィアは堪えるように服の裾をきゅっと掴み、俯いている。

ミリアは生意気な妹が出来たような、そんな感じがした。

「よしっ!任せろ!」

ミリアは拳を胸の前でギュッと握り締め、スフィアを見つめ言った。

「俺がお前を綺麗にコーディネートしてやる」

結果、スフィアは見違えるように可愛らしくなっていた。

服装は、煤けたボロ服から赤の可愛らしいワンピースに。

髪は綺麗に整えられ、小さな水色の髪飾りを付けている。

予算は全て吹き飛んだが、代わりにスフィアは、道行く男性が振り返る程可愛くなっていた。

「……………柄じゃねえ……………」

後はこの言葉遣いと、目付きの悪さだろうか。

「あとは何だ？もう金無えだろうが」

スフィアの前を、ミリアが歩く。その歩みには、確かな目的があるように見えた。

「なあ……………」

足を止め、ミリアは振り返る。時刻は夕方に差し掛かり、ミリアは夕日を背にしていた。この時彼女は、美しいを乗り越して幻想的だった。スフィアは息を呑む。

「お前は…フレンの事をどう思ってる？」

ミリアはそう口にしていた。スフィアは雰囲気圧倒され、素直に答えた。

「悪い奴じゃない……ただ……」
一度、言葉を切る。

「アイツは現実を見ていない。真直ぐな正義感だけでじゃ通用しない……そのうち、痛い目を見る」

スフィアは不思議だった。

何故か、フレンの身を按じる言葉が口を出ていた。

「優しいんだな、お前」

クスリと、ミリアは口元に笑みを浮かべる。普段のがさつな言動からは想像出来ない優しい微笑み。

「確かに、アイツは正義感だけで動いてるような奴だ。……ホントに……馬鹿だよ」

深い溜め息を吐くミリア。いつもの気だるそうな仕草も、今は光って見える。

「フレンが何で騎士団に入っただか……分かるか？」

スフィアに聞きながら、ミリアは近くにあったベンチへ腰を降ろす。

スフィアは立ったまま答える。

「……もしかして、国を自分の手で守りたいとでも思ったのか？」

フレンの正義感なら有り得る話だ。そして、案の定。

「……名答」

ミリアがそう答えた。

「アホか…アイツは」

スフィアは肩を落とす。呆れるくらいの正義感。それもここまで来たらお手上げだ。

「そう言っな。まあ、正確には国じゃねえけどな…」

「…はあ？」

ミリアの言葉の意味が分からず、スフィアは変な声を上げた。

「それに、国を守る以外に、フレンにはもう一つ目的がある」

ミリアはベンチから腰を上げながら言った。

「…もう一つの…目的？」

先程から意味の分からない言葉ばかり。スフィアは眉間に皺を寄せた。

「…どういう意味だよ」

スフィアの問いを聞きながら、ミリアは歩きだした。

「付いてこい」

スフィアは訳も分からないまま、ミリアを追って歩きだした。

一日の稽古を終え、フレンは重い鎧を脱ぎ、近くの石段に腰を降ろしていた。

「はあ…」

フレンの頭の中にあるのはスフィアの事だ。ミリアは意外に女の子らしい所もある。だから彼女に頼んだのだが、今更になって不安になってきたのだ。

ミリアの所為で、あの性格が助長されているのでは…と。

考えれば考える程、最悪の事態しか思い浮かばない。何故自分はミリアを抜擢したのだろうか。何度も何度も、同じ結論に至ってはまた最初に戻る。結局、今日一日そればかりを考え、稽古にも身が入らなかった。

「おや？お悩みの様ですね」
二度目の溜め息を吐こうとした、その時。背後から男に声を掛けられた。

フレンはその声に聞き覚えがあった。独特の、耳に残る甲高い声。

ハミル少将。セリーヌからも注意しておくよう言われた人物だ。

フレンもハミルの不穏な噂はよく耳にしている。

だが、噂はあくまで噂。証拠が無い為に、それを咎めることは出来ない。しかし、事実であろうとなかろうと、十分に警戒しなくては

いけない人物であることに変わりはない。

「いえ、何も」

疲労の溜まった体に鞭を打ち、腰を上げて去ろうとした。だが数歩歩いたフレンは、金縛りに掛かった様に足を止めた。ハミルが何かを呟いたのだ。

「何か…おっしやいましたか？」

聞き間違いでなければ、それは、事態が好ましくない方へと動いている事になる。

振り向いたフレンを見、ハミルはほくそ笑んだ。

「赤髪の悪魔には、近付かない方が良いですよ？」

ハミルは既にスフィアの情報を掴んでいた。そして、彼女がフレンと共に居ることを…

「何の…事ですか？」

今更平静を装ったところで意味は無いのだが、鎌をかけているだけかもしれない。

「とぼけても、無駄ですよ？」

フレンの予想は確信へと変わる。ハミルは確実に情報を掴んでいる。決して鎌をかけている訳ではない。

フレンが唾然としているうちに、ハミルはフレンの隣まで来ていた。

ハミルはフレンの肩に手を置き、前髪の間から瞳を覗かせながら、小さな声で呟いた。

「…『あの場所』がどうなっても良いのですか？」

「っ！」

フレンに戦慄が奔る。

ハミルはフレンの事を調べ上げていた。フレンの生い立ちを。

ハミルは口元に汚い笑みを見せながらどこかへ行ってしまった。対してフレンはその場に立ち尽くし、俯き、歯を食い縛っていた。

「……畜生!!」

普段のフレンからは想像出来ない、汚い言葉遣い。

一人残されたフレンは、苛立ち、怒り…それらの感情を全て込め、叫んだ。

その叫びは、誰も居ない夕暮れの演習場に…

悲しく響き渡った……

「……ここは…」

スフィアがミリアに連れてこられた場所。そこは街外れにある、自然の多い小さな家だった。

スフィアは表札を見る。表札にはこう書かれていた。

『フィーナ孤児院』…と。

呆然とするスフィアを余所に、ミリアはどんどん先へ進んで行く。スフィアも慌てて後を追う。

辺りを懐かしそうに眺めながら、ミリアは口を開いた。

「フレンは……ここで育ったんだ」

「えっ……」

改めて辺りを見渡すスフィア。家の中からは元気な子供の声が聞こえる。あまり大きくはないが庭があり、子供達が毎日使っているであろう遊具は古びていた。決して裕福とは言えない。

「フレンは…家族や親戚を、殺されたんだ………目の前で…」

遊具を触りながら、ミリアは言った。

スフィアは、ミリアの言葉がすぐには理解できなかった。フレンは、自分と同じ境遇だったのだ。

「まさか…アイツの目標って…」

スフィアの口が乾く。想像出来ない。あの優しいフレンが…

「ああ、一つはこの国…いや、正確にはこの孤児院を守ること。もう一つは…」

ミリアが言葉を続けようとした時、孤児院の玄関が勢いよく開け放たれた。

扉の先に立っていたのは、見た目二十代半ばの、長い黒髪の女性。顔立ちは優しく、見る者全てを落ち着かせる様な不思議な雰囲気を放っていた。

「ミリアちゃんっ!」

その女性は両手を広げ、物凄い速度で迫ってくる。

ミリアは諦めたように目を固く瞑る。そして衝撃に備え、体勢を低くした。

女性は勢いそのままに、ミリアを強く抱き締め、幸せそうな顔で頬擦りを始めた。

「会いたかったわあ。相変わらずお肌スベスベね、ミリアちゃんっ」

スフィアは至福の時を享受する女性の服装を見る。

女性は至る所に継ぎ接ぎがされたエプロンと服を着用していた。やはり、この孤児院は裕福ではないらしい。

しばらくして女性は満足したらしく、ミリアを解放した。

「久しぶり、フィーナおば……お姉さん」

ミリアは明らかにおばさんと言いつけた。フィーナと呼ばれた女性
は、笑顔を浮かべながら。

「あらあら、私はもう四十歳だからおばさんで良いわよ？ミリア
ちゃん」

スフィアは目を見開いた。

妖精である彼女は寿命が長い。それ故に人よりも成長は遅い。だが、
人間の四十歳と言うとどの位なのかは知っていた。どう見てもフ
ィーナは二十代にしか見えなかった。

「あら？」

フィーナはスフィアの存在に気付いた。そして、挨拶も無しに……

「可愛い……っ！」

スフィアに抱きついた。スフィアは振り解こうと藻掻くが、物凄
い力で抱き締められ身動きが取れない。

スフィアの悲鳴が、夕暮れの孤児院に悲しく響き渡った……

「ごめんなさいねえ、私可愛い物に目が無くて」

孤児院の中に通され、スフィアが椅子に座ったとき、フィーナはそ
う謝罪した。が、全く悪怯れる様子はない。おそらく、何を言っ
ても無駄だろう。

「ちっ、いいよ別に」

軽く悪態を吐き、スフィアは室内を見渡した。

さほど大きくない室内だが、綺麗に整頓され無駄なスペースが見当たらない。掃除も行き届いており、とても住みやすい環境だ。

スフィアが感心していた時、不意に髪を強く引つ張られた。

「いだだだだっ?!」

「おねえちゃん、だあれ？」

スフィアの髪を引つ張ったのは、小さな六歳程の女の子だった。身の丈程ある大きな兎のぬいぐるみを抱え、そばかすのある顔をそれに埋めていた。

フィーナ同様、ボロボロの衣服に身を包み、肩ほどの黒髪を揺らしながら、その黒い円らな瞳でスフィアを見上げていた。

「こらっ、リイン！お客さんに何するの」

「ごめんなさい…」

しゅんと俯くリイン。

「…自分は良いのかよ」

スフィアは小声で突っ込んだ。

「おねえちゃん、だあれ？」

リインが再び聞く。叱られたからだろうか、その瞳は潤んでいた。

「……スフィア」

「ミリアおねえちゃんの、おともだち？」

立て続けにリインは質問してくる。いつもなら苛立つ所だが、今日は不思議と穏やかだった。

「……ああ」

正直、ミリアと自分の関係はイマイチ分からなかったが、相手は小さな子供だ。スフィアは少し考え、短く答えた。

スフィアが答えると、リインは表情をぱっと明るくし、手を差し出してきた。

「じゃあ、わたしもおともだちっ」

「……」

スフィアは無言でその手を取った。するとリインは嬉しそうにどこかへ行ってしまった。

「何だったんだ？」

「きっと、初めて来られる方なので嬉しいのでしょう」

スフィアの疑問にフィーナが答える。

「そっぴやアイツは？」

ミリアの事をすっかり忘れていた。周囲を見渡すと、子供部屋だと思われる場所で、ミリアは子供達と一緒に腹を抱えて爆笑していた。その中には先程のラインの姿もあった。

「よく来て下さるんですよ、ミリアちゃん」

その光景を見て、フィーナは優しく微笑む。

「ふうん……」

そう言われ、スフィアは改めてミリアを見る。今日一日一緒に行動していたが、街の住人にも好かれている。街のアイドルと言った所か……

ミリアがスフィアを見た。どうやら、聞きたいことは今のうちにフィーナに聞け。という事らしい。

「…お節介野郎」

「？…何かおっしゃいましたか？」

「いや、何も」

決してフレンの事が心配だとか、そう言う事ではない。ただ聞かないと気持ちが悪いのだ。スフィアは、そう自分に言い聞かせた。

「聞きたい事がある」

「?何でしょうか」

スフィアが言うと、フィーナは首をかしげた。何となく愛らしい仕草。

「フレンの…事なんだけど」
「……」

スフィアの言葉に、フィーナは見分ける程に狼狽えた。俯き、懐かしむような、だがどこか悲しむような顔をしている。

「…聞かせてくれないか」

スフィアは胸が痛んだが、フィーナに頼んだ。どうしても知りたかったのだ。

しばしの沈黙の後、フィーナは静かに語りだした。

「私のもとへ彼が来たのは、十五年前、彼が四歳の時でした……」

「ふんふんっふんふんっ」

鼻歌を歌いながら、フィーナは洗濯物を干していた。人数は決して多くはないものの、子供達が出す洗濯物の量は膨大だ。可愛い子供達もこの時ばかりは憎くもなる。

「ふんふんっ…ん？」

フィーナは鼻歌を止める。庭の隅に影が見えたのだ。それは小さな子供の様にも見えた。

「……っ！」

間違いない。それは小さな男の子だった。大きな剣を抱え、隅に蹲っている。

フィーナは洗濯物を放り出して少年に駆け寄った。

少年はフレンと名乗った。ファミリーネームは何度聞いても答えてはくれなかった。

「フレンくん、皆と一緒にご飯食べましょ？」

フィーナがそう誘っても、フレンは膝を抱え、部屋の隅に蹲っていた。

フィーナは小さく溜め息を吐き、フレンの目の前にしゃがんだ。

シャワーを浴びた彼はとても綺麗な顔立ちをしていた。成長すればかなりの色男になると、フィーナは踏んでいた。着ている服は孤児院の物なので、多少残念な物ではあったが…

「ねえ、フレンくん」

「……」

反応がない。フレンの瞳は常に虚空を見据えている。フィーナはま

た一つ溜め息を吐いた。子供の前ではしてはいけないと分かりながらも、せずにはいられなかった。

「ここに置いとくね？」

フレンの前に料理を取り分けた皿を置く。それでも彼は反応を示さない。

「おねえちゃんっ」

「はあくいつ」

子供に呼ばれ、フィーナはその場を後にした。

フレンが孤児院に来てから数日が経った。食事は摂るものの、相変わらず口を利こうとはしない。

今日も彼は他の子供達に交ざらず、一人で膝を抱えている。

「はあ…」

最近溜め息が多くなったような気がする。洗濯物を掛けながら、フィーナは。

「皺が増えたらあの子の所為だわ…」

何げに暢気な事を言ったりしていた。

「おゝい、フィーナさゝん」

その時、背後から声。無意識の内に、フィーナはその声の主を抱き締めていた。

「いらっしゃゝい、ミリアちゃゝんっ」

「いだいいだいいだいつ、フィーナさん放して、ってか放せっ」

十歳程の青髪の少女はフィーナの中で藻掻いている。

ミリア。頻繁に孤児院を訪れ、子供の相手をしてくれる妖精の少女だ。

しばらくして、フィーナはミリアを解放した。

ミリアは呼吸を整え、フィーナに言った。

「ガキどもから聞いたけど、新しい奴が来たんだって？」

「ええ、家の中に…って、あれ？」

既にミリアの姿がなくなっている。フィーナが周囲を見渡していると、家の中から何かをひっくり返すような音がした。

「……………」

フィーナは頭を抱えた。

「わりい…」

「いいえ？決して怒ってないわよ？」

満面の笑みを浮かべながら、フィーナは言う。その向かいでは、ミアが正座をし、こうべを垂れていた。

怒ってはいないと本人は言っているが、額にはくつきりと青筋が浮かんでいる。満面の笑みが逆に怖い。

ミア曰く、フレンが全く反応を示さないため、彼の周囲で騒いでいたら勢い余って物を倒してしまった。という事らしい。

食器等の割れ物は無事だが、それ以外は床に散乱している。勢い余り過ぎである。

「…可愛いから許します」

ミアに上目遣いで見られ、フィーナは溜め息を吐きながらも許した。やはり可愛い物には弱いのだ。

「それにしても」

ミアは、先程のしおらしさはどこへやら、いつの間にかフレンの隣へ行き、彼の頬を突いていた。

「暗い顔しやがって、少しは笑いやがれ」

ふにふにふにふに

「ホレホレ、悔しかったらやり返してみろよ」

ミリアは突き続ける。

ふにふに……プチン……

何かが切れた。ミリアはそれに気付かない。

「ホレホ……ぐへあっ?!」

ミリアが不様な体勢で、美少女らしからぬ声を発しながら吹き飛んだ。

フレンの左アッパーがミリアの顎を捉えたのだ。

「いい加減にしろっ」

「んだとお?! やんのかコラア!」

二人が取っ組み合いの喧嘩を始める。フィーナはもう勝手にしてと言わんばかりに外を眺めていた。

ミリアとの一件以来、フレンは感情を表に出すようになっていた。

「やんのか? ああ?!」

「望むところだっ」

フレンとミリアは、互いに憎まれ口を叩き合い、毎日喧嘩をしながらも一番仲が良かった。

フィーナはそんな二人を微笑ましく見守っていた。

毎日が楽しかった。平和だった。

あの日までは……

「あの日？」

不穏な空気を感じ取ったスフィアが尋ねる。

フィーナは目を伏せ、唇を噛んでいた。とても辛い、悲しみに満ちた瞳。

「ここから先は……ミリアちゃん……お願い……出来ますか……」

涙交じりの声。フィーナは限界の様だった。会話の途中に隣に来ていたミリアが、口を開いた。

「ああ、分かった……」

一度ゆっくりと深呼吸をし、ミリアは心を落ち着かせる。スフィアの心臓は早鐘のように脈動していた。

ミリアが意を決した。表情が引き締め、鋭い眼光を見せる。そして、言葉を紡ぎだす。

「あれは、確か……」

六年が経ち、フレンは十歳になっていた。この歳になり、フレンには毎日欠かさない日課が出来ていた。

「はあっ！」

剣術の稽古だ。フレンは毎日のように剣を振っていた。

始めた当初は剣に振らされていたが、最近では全身を使い、綺麗な剣筋になっていた。独学でここまで来たのだ、大した物である。

稽古の場所は決まって孤児院の裏の森だった。ここならフィーナに見つかり、不安を与える事が無い。フレンはそう考えていた。

この場所を知っているのはフレンと、あと一人だけ。その人物はフレンが休憩に入ったと同時に現われた。

「よお、やってるか？」

木の影からひょっこり顔を出した少女、ミアは、いつもの軽い調子でフレンに声を掛ける。

「また来たのか、キミは……」

ミアが来ると、自然にその日の稽古は終了してしまう。再開しても彼女が騒ぐので、集中力が途切れてしまう。彼にとって、親友の彼女も、この時ばかりは疎ましい限りだ。

「お？今日はもう終わるのか？」

ニやつきながら言ってくるのを見ると、どうやら確信犯のようだ。フレンは最早呆れて溜め息も出ない。

「…で、今日は何だい？」

フレンが聞くと。

「いんや？ 特には」

と、ミリア。

用が無いなら来るな。と、フレンは小声でばやいた。だが、ミリアを追い払い、再開しても、身には付かない。

仕方なく、フレンは近くの切り株に腰を落ち着けた。ミリアも、地面に腰を降ろす。…胡坐で。

「……ミリア、見えてる」

「？…ああ、サービスサービス」

ミリアは手をひらひらと振りながら答える。女の子らしい恥じらいの欠片もない。

その後、フレンの吐いた溜め息以降は、延々と沈黙が続く。

「…なあ、前から気になってたんだけどよ」

沈黙を破ったのは、やはりミリアだった。彼女には、最近気になる

事があつたのだ。

「?…何?」

フレンはミリアを見ずに答える。彼女を見ないのは、見えてしまうからだろう。

「何でまた、剣なんか始めたんだ?」

「……………」

ミリアの問いに、フレンは黙る。じつと、ミリアは答えを待つ。

しばらくして、フレンは立ち上がった。そして、空を見上げながら言う。

「……………復讐……………」

「…え……………」

ザアツと、風が吹き、草木を揺らす。鳥の囀りが異常に大きく感じられ、時間が経つのが遅くなったように感じた。

想像もしない言葉に、ミリアは啞然とする。普段の彼とは違う、冷たい空気を醸し出していた。

「…なんてね?」

フレンは笑顔で誤魔化す。しかし、ミリアは確信していた。

先程の言葉は、冗談ではないと…………

彼の背中から感じた冷たい空気。間違いなく、あれは殺気だった。

「じゃあ、本当の理由は？」

ミリアの言葉に、もう一度フレンは考え込む。だが、それは先程よりも短い物だった。どうやら、最初から決まっているらしい。

「ここを、この孤児院を守りたい。…その為に、力が欲しいんだ…」
次はすっかりミリアを見つめて言った。その瞳には、迷いも嘘も無かった。

この言葉もまた、真実なのだろう。ミリアは思った。
その時、風が二人の間を駆け抜けた。それは冷たく、二人に時刻を知らせる物だった。

「…あ、もう日が暮れるな」
フレンがわざとらしく言う。ミリアは「そうだな」と言いながら腰を上げた。

「フィーナさんに挨拶して行きなよ。きっと喜ぶ」

「……」

言われた途端。ミリアの脳内は、フィーナの抱擁で埋め尽くされた。

その日の夜、小さな子供達が寝静まり、起きているのがフレン、ミリア、フィーナのみになった頃。孤児院に来訪者が現われた。

来訪者は恭しく名乗った。

「私はアレン・シルフィードと申します。シルフィード家の事は御存じでしょうか」

玄関に立っていた来訪者を、フィーナは慌てて居間へ招き入れた。

来訪者アレンは、長い白髪の恰幅の良い男性だった。

そして、シルフィード家の事は誰もが知っていた。

我が国の名門中の名門。武に長け、騎士団の上位にはその名を持つものが多数いる。そしてこのアレンは、そのシルフィード家の現当主である。

フィーナと、結局夕飯をご馳走になる事になったミアには、何故この孤児院に、アレンのような大物が現われたのか、その意味が分からなかった。

「本日は、お話があつて参りました」

テーブルの椅子に腰掛け、アレンは単刀直入にそう言った。

「な、なんでしょうか」

フィーナの顔が強張る。当たり前だ。突然現われた権力者。緊張しない方がどうかしている。

フィーナに対し、アレンは落ち着き払ったようすで言う。

「こちらに、フレンという少年がおりますな？」

「……僕です」

部屋の隅に立っていたフレンは、前に出た。

フレンを見て、アレンは満足そうに笑みを浮かべる。そして、誰も
が予想しない事を言ったのだ。

「彼、フレンくんを、私は養子に迎えたいと思っています」

フィーナ、ミリア、フレンは、それぞれ違う反応を見せる。

「えっ……」

突然の事に、言葉を失うフィーナ。

「…マジかよ」

目を丸くして、息を呑むミリア。

「……………」

その中でフレンだけは落ち着き、アレンの事を見つめていた。

「とっ、突然そのように言われましても……それに何故フレンくん
を……」

フィーナは明らかに動揺していた。瞬きが多く、声は震えている。

「散策をしている時に、偶然彼の稽古を拝見しましたな？」

アレンは目を細め、柔和な笑みをフレンへ向ける。

「まだまだ粗いが、研けば光る。…彼には才能がある。そう確信したのです」

その笑みを、今度はフィーナへ向ける。アレンからは悪意が感じられない。それは、フレンの才能に惚れ込んだのは嘘ではない。そういう事だ。

「……………」

フィーナが困ったように、ミリアへ視線を向ける。ミリアはフレンを見つめ。

「……フレン、お前は どうしたいんだ」

そう、聞いた。

フレンは目を瞑り、静かに立っていた。ミリアには分かっていた。フレンがどうするのかを……

「僕は……」

目を開く。言葉は静かだが、その眼差しには強い光が宿っていた。

フレンは決意を口にした。

「……行きます。僕は国を、いや、この孤児院を守りたい」

フレンの言葉を聞き、アレンが嬉しそうに頷いた……

アレンが帰り、三人は椅子に腰掛け、何も言葉を口にしなかった。早いほうが良いと、アレンは明日の朝、迎えに来ると言っていた。長い沈黙を破ったのはフィーナだった。

「…守らなくていいです。…ここに…ずっと…」

フィーナは静かに泣いていた。大声を上げる事もなく、静かに…

「あの子達の面倒、私一人じゃ見きれません…」

フレンより大きな孤児は、既に孤児院を出ていた。それ故、現在はフレンが最年長なのだ。

そして各地で起こっている、エルフとの小規模な紛争。

小規模と言えど、親を失う子は大勢いる。ウィルネスは今はまだ平和。だから孤児が流れ着くのだ。そして、その孤児は必然的にここへ来る事になる。

もし、本格的な争いが始まれば、孤児は今より格段に増加するだろう。

「だからです」

フレンが静かに言った。

「騎士になれば、国を、この孤児院を守る。それに争いが無くなれば、これ以上、孤児も増えなくなる」

それはフレン一人の力でどうこう出来る問題ではない。だが、この十歳の少年は本気だった。本気で言っているのだ。

「……それに」

フレンが立つ。そして、窓から外を見る。彼の瞳は、遙か遠くを見据えていた。

「復讐が、果たせるかもしれない……」

フレンはそう言い残し、自室へと消えていった。

居間にはフィーナとミリアだけが残された。フレンがいなくなった後、フィーナは一気に泣きだした。

ミリアはそっと、フィーナの肩を抱いてやった。

外は雨が降っていた……

翌朝早く、孤児院に迎えが来た。見送りには、フィーナの代わりにミリアが出ていた。

明け方まで泣いていたフィーナは、さつき眠ったところだ。勿論、ミリアは一睡もしていない。

ミリアは隈の出来た目を擦りながら、フレンに尋ねた。

「結局、どれが本心だ？」

「……………分からない」

空を見上げ、フレンは呟く。

「これから見付けていきたい。僕の本心はどれなのか……………」

フレンは考えを口にする。

ミリアは肩を竦め、溜め息を漏らした。

「馬鹿だろ、お前」

「…ああ、馬鹿だな。僕は」

遠くでアレンがフレンを待っている。あまり時間は無いようだ。

「まあ、キミとはこれからも顔を合わせると思う。その時は宜しく」

「…ああ」

フレンは荷物を抱える。

「じゃあ、また…」

「…ああ、またな」

フレンが歩きだす。

「ちょっと待て」

ミリアはフレンを呼び止めた。フレンは足を止める。

「…何」

「復讐って、一体何なんだ」

ミリアは聞いたかった。これ以降、きっと聞くタイミングは訪れないだろう。

フレンは少し間を置き、答える。

「…家族と親戚を、殺されたんだ…目の前で」

フレンは再び歩きだした。

朝の冷たい空気、それを肌で感じながら、ミリアは何も言わずに彼を見送った……

「話を聞いてみてどう思った？」

帰り道、ミリアはスフィアに尋ねた。

孤児院を出ると、辺りはすっかり暗くなっていて、二人は急いで帰宅することにした。

「……分からない」

スフィアは自分の気持ちが分からなかった。親を失った境遇が同じでも、歩んだ道が違いすぎる。

話を聞いていて、フレンの事は疎か、自分の気持ちまで分からなくなってしまうのだ。

スフィアは自身は一人で生きていける。今までそう思ってきたし、現にそうしてきた。

そんなスフィアに、今はしたい事が一つあった。

「今は…アイツと、話がしたい…」

何故かはスフィア自身分からない。だがそうしないといけないと感じたのだ。

スフィアの言葉を聞き、ミリアは笑う。

「やっぱりお前優しいな」

「うるせえ…」

スフィアが頬を赤らめたその時。

「…スフィアさんっ」

背後から声を掛けられた。声で分かる、フィーナだ。スフィアが振り返ると、フィーナは膝に手を当て、息を切らしていた。ここまで走ってきたのだろう。

「どうしたんだよっ」

スフィアは慌てて駆け寄る。

「いえ…お願いしたい事が…ありまして」

そう言つて、フィーナはスフィアを見つめる。ようやく息も整つたようだ。

「フレンくん…伝えてください」

「……………」

フィーナの言葉を、スフィアは黙って受け取つた。

フィーナからフレンへ贈られた、大切な言葉を……

「僕は……………」

誰もいない部屋。フレンはベッドに仰向けに転がり、そう呟いた。

その呟きは、殺風景な部屋に冷たく響く。

フレンは右腕で目を覆う。歯を食い縛り、左手で拳を作り、ベッドを思い切り叩いた。手に伝わる痛みも、今は関係ない。

少しだけ目を出し、フレンは窓から見える月を見つめた。今宵の月は薄曇りの所為でばやけて見えた。まるで、今のフレンの心のよう……

「僕はあつ……………」

いつの間にか、フレンは泣いていた。

啜り泣く声が部屋に響いた。

玄関の前、スフィアは膝を抱えていた。

「何で……泣いてんだよ……」

そう言うスフィアも、気付かぬ内に涙を流していた。

「アイツも……まだ一人なんだ……」

眩き、空を見上げる。

濡れた瞳には、今宵の月は見えなかった……

「あたしが……言わなきゃ」

フレンの為に……

スフィアはそう決意した。

第六章↳追憶・共に歩む（前書き）

遅くなりました。本当に申し訳ありません。文章に不備があった場合、少しずつ修正を入れるかもしれません。

予めご了承ください。

第六章↳追憶・共に歩む…

「……それは…」

教会の一室。セリーヌは目を閉じ、深く考え込んでいる。

その様子をじっと見つめるスフィア。その目は真剣そのもので、セリーヌがたじろいでしまう程だった。

以前スフィアが滅茶苦茶にした部分は綺麗になり、二つあるソファに座り、二人は机を挟み、互いに向かい合う形になっていた。

セリーヌはスフィアの視線を真つ正面から受けながら、考える。

セリーヌはスフィアの為にフレンを紹介した。まさかそれが逆になるとは夢にも思っていなかった。

スフィアが訪ねて来たのは早朝。まだ日が昇るかどうかといった時刻だった。

「ところで、どうして私に？」

そもそも、セリーヌはスフィアが何故自分に相談しに来たのか、その理由が分からなかった。

「ん？」

スフィアはじっとセリーヌの顔を見た。そしておもむろに。

「あたしが知ってる奴で、一番歳とってるから」

「……………」

そう言ったスフィアを見ながら、セリーヌは顔を引きつらせた。

確かに、人より成長の遅い妖精がここまで成長していれば、それは相当な年増……いや、経験豊富と言える。

しかし、まだまだ若いと思っているセリーヌからすれば、その言葉はかなり屈辱的な物である。

セリーヌはゆっくりと立ち上がる。

「スフィア……」

「んあ？」

ゴンッガンッ

振り下ろされたセリーヌの拳。それはスフィアの脳天を捉える。そして、その勢いのままスフィアは顔面を机に強打。彼女は床で顔を押しさえながらもんどりうった。

「いっただあ……………」

回復したスフィアが、赤くなった額を擦りながらセリーヌを睨む。だが瞳は潤み、涙みは感じられない。

一つ咳払いをし、セリーヌは何事もなかったかのように話を戻した。

「で、昨晚は話をしたのですか？」

スフィアはバツが悪そうな顔をしながら話し始めた。

「いや、一応したけど……」

「……おい」

「……」

スフィアは部屋に入っていた。フレンは泣くことを止め、スフィアに背を向ける形でベッドに転がっている。

スフィアが何度も声を掛けているのだが、フレンは返事をしない。スフィアはその事に腹が立っていた。

返事をしてもらわないと会話が出来ない。それではスフィアの目的が達成出来ないのだ。

「……おい」

もう一度呼ぶが、フレンは相変わらず反応しない。

そこでスフィアは一つ思い出した。…そう、名前だ。

以前彼に名前で呼べと言われたことがあった。物は試しと、スフィアは言ってみることにする。

「…フ…フレン？」

口が乾く。初めて名前で呼んだのだ、恥ずかしい事この上ない。

スフィアは顔が一気に林檎になっていった。ここまでして反応がなかったら割りに合わない。

沈黙。とにかく長い…

永遠に続くのではないかと思われた時間だったが、不意にフレンがこう言った。

「…悪い、静かにしてくれないか」

「…あ、わりい」

スフィアは自分でも驚く程にあっさり引き下がってしまった。

スフィアは頭を抱え、首を大きく横に振る。そしてすぐに次の作戦を考える。

一つ閃いた。そう、この容姿だ。昨日までは薄汚い姿だったが、今は整っている。フレンも無視できないはず……

この時のスフィアには冷静に判断する余裕はなかった。

「…フレン」

スフィアはそう呟きながらベッドの側まで行く。そしてフレンの背

中に手を乗せた。フレンの背中はずいぶん、しっかりと筋肉がついていた。

「見てくれよ、この格好。かなり女らしくなったんだぞ？」

身を乗り出し、フレンの注意を引こうとする。その姿は艶めかしく、普通の男なら抱き締めるなりしているだろう。

フレンは目だけでスフィアを見る。数秒見て再び視線を戻す。

「…よかったな」

フレンが言ったのはそれだけだった。無機質で心のこもっていない声。

「…」

スフィアは頭に来て文句を言おうとした。が、言葉が出てこない。

外を見れば既に日が昇っていた。胸が苦しくなったスフィアは、赤髪を翻し、外へ駆け出した。

「そして今に至る。…と」

セリーヌの言葉にスフィアはこくりと頷く。彼女の頬はほんのり赤い。

「どうしたら良いんだ？」

スフィアは上目遣いでセリーヌを見る。たまにこの少女はこのような仕草をする。本人は無自覚なのだろうが……

「それは貴方がどうしたいのか、という事が重要でしょう？」

セリーヌが聞くと、スフィアは納得したように頷く。やはり、根は素直だ。

「……でも、自分の気持ちがイマイチ分からないんだ……」

眉尻を下げるスフィア。セリーヌは一つ咳払い。

「根本から片付けましょう。……何故貴方はフレンさんの力になりたいと思ったのですか？」

セリーヌには何となく理由が分かっていた。おそらくスフィアが自覚していないだけなのだ。

セリーヌの問いに、スフィアは頭を捻る。腕を組み、必死に考えていた。

「同じ境遇だから？……いや、違う……憐れみ？それも違う」

ぶつぶつと口に出して考えるスフィアに、セリーヌは助け船を出す。

「……フレンさんにそっけない態度をされて、貴方はどう思いましたか？」

スフィアは一度考え、答えた。

「…なんか分かんないけど、…こう…切ないって言うか…」

セリーヌの予想は確信に変わる。そっけなくされて、切ないと来たら『アレ』しかないだろう。

セリーヌはスフィアの耳元で囁いた。それは短い言葉なのだが、スフィアがそれを理解するにはしばらく時間がかかった。

スフィアは十秒程ばーっとしてから、顔からボンツと煙を出した。顔は例によって林檎である。

「あ、あああああつ?! あつ、あたしが? アイツに?!」

スフィアは声を裏返らせ、見て分かるくらい動揺している。

「…それしかないでしょう」

セリーヌは溜め息を吐く。スフィアは未だに納得がいかないようだ。

「あ、あたしがアイツに……」

目を白黒させるスフィア。震える口で、セリーヌに言われた言葉を反芻する。

「…恋だなんて…」

城内を歩く。いつもと変わらない筈のその行為が、何故か今日は違

う。

自分の気持ちが違うのだ。と、フレンは気付いていた。

結局、あの時から一步も前に進んではない。立ち止まったまま、ただ無駄な時を過ごしてきた。

日々剣術を学び、鍛練に明け暮れた。進んでいるようでそうではない。

一心不乱にやっているように見せて、本当は目を背けていただけ。

「何が守るだ…何が…復讐だ…」

壁を強く殴る。手に伝わる痛み。昨夜から何度も繰り返す行為。身を痛め付けても意味はないし、何も変わらない。

分かっている、分かっているのだ。だが、この自傷行為は止まらない。

苛立ち、悲しみ…十五年前、それらと向かい合うために孤児院を出たのではなかったか。

「暗い顔をしているな…」

フレンは突然声を掛けられ驚く。すぐ目の前に立つ人物の気配に気付かなかった。

人物…アレンは、眉間に皺を寄せ、フレンを見ている。

アレンは今年で七十になるが、未だ足腰はしっかりしており、現役を退いてはいない。

「申し訳ありません。…少し考え事をしていました」
フレンがこうべを垂れると、アレンが聞く。

「何を考えておったのだ」
「……」

フレンは言葉を詰まらせる。今回の事は養父に話すべきではない、そう思った。

「私の問題です。義父様のご心配なさる事ではございません」

フレンの言葉にアレンは溜め息を吐く。その表情には憂いが見て取れた。

「フレン、君は私の息子だ。全てを一人で抱える必要は無いのではないのか？」

純粹にフレンの事を気に掛けているのだろう。アレンの口調はとても優しい。

「いえ、これ以上義父様に手間を掛けさせる訳にはいきません」

フレンはその言葉でアレンの優しさを断ち切る。確かに有り難い事だが、この事は自分の手で決断したかった。

「…そうか」

アレンは哀しげな表情を浮かべ下を向くが、すぐに引き締め、フレンに向き直る。

「一つ…君に言うておく」

「…？」

アレンは真面目な顔でフレンを見つめ、言った。

「自分の気持ちに素直になりなさい……」

「…」

スフィアは中庭で、ただただぼんやりと空を見上げている。セリーヌはあのように言ったが、信じられない彼女は一人で考える事にしたのだ。

何故セリーヌがあのように判断したのかは分からないが、そう考える要素があった。つまりはそういう事だ。

「ん…」

切なくなる事、これは恋なのだろうか。

確かに、フレンと接するようになってから、自分は変わった。口喧

嘩は絶えないが、彼といると不思議と安らぐ。この感情が恋なのだろうか。

スフィアは頭を抱える。全く分からないのだ。

スフィアは生まれてから十四年経つ。しかし、このような感情を抱くのは初めてだ。

「だあーっ、畜生！」

考えても考えても分からない。スフィアは思考を放棄した。

「考えても仕方ねえ！直接アイツと話す。これが一番だ！」

第一、フレンと話せるようになれば、最初の目的が果たせない。そもそも、当初の目的はフィーナの伝言を伝える事なのだ。

「あの年増妖精いっつ？！」

セリーヌが聞いたら激昂しそうな事を言うスフィア。八つ当りに火を放とうとする。

「いだあっ」

腕に付いている装置が起動し、術が途切れる。

スフィアが振り向くと、数メートル先にフレンが立っていた。

「えっと、その…」

いきなりの本人登場に焦るスフィア。フレンは一直線にスフィアへ

歩を進める。

「あの……その…うわぁっ?!」

フレンが狼狽えるスフィアの腕を掴んだ。セリーヌとの会話でフレンを意識しているスフィアは、顔を真っ赤にし、何も考えられなくなっていた。

フレンはスフィアの腕にある装置に手を伸ばす。そして…

「……え…?」

スフィアが小さく声を上げる。何も考えられない頭が、更に真っ白になる。

意味が分からなかった。

カチンと小気味の良い音を立て、装置が外れていた。

スフィアがフレンを見上げる。感情を殺した、冷たい顔。

「…何で」

「スフィア」

スフィアが理由を聞こうとすると、フレンがそれを遮った。

「……何?」

スフィアが聞くと、フレンはゆっくりと言葉を紡ぎだす。

スフィアには理解できない、否、理解したくない言葉を……

「もう…自由にどこへでも行っていていいよ…」

どこへでも行っていていい。つまりそれは、フレンとの関わりが切れるという事。

理解した時、スフィアは自分の背筋が凍るような感覚を覚えた。そして、膝から力が抜け、その場に崩れる。

腰を地に付けているのに、何もない。まるで体全てが虚空に投げ出されたような感覚。

「な…んで」

声が震える。フレンを見上げる瞳も潤んでいる。

フレンは答える事なく、静かにスフィアの手を離し、踵を返す。歩きだそうとするフレンの足を、スフィアは掴んだ。

「ま、待って…くれよ。…どういう事だよっ」

スフィアの声は、相手を責めるものではなく、懇願するようだ。

「…一つ、お願いがある」

フレンがスフィアを見ずに話します。その声はいつも通りの、優しいフレンの声だった。

スフィアは潤んだ瞳で彼の言葉を待つ。今のスフィアは、感情がミキサーにかけられた様な状態。フレンの言葉を待つしかなかった。
「力を…使わないで。…普通の女の子と…同じように生きて…欲しい」

フレンの言葉は途切れ途切れ。感情を押さえ込むような声。とても…悲しい声…

その言葉を残し、フレンは歩きだす。スフィアの手は力なく地に落ちた。

足音が遠くなる。フレンとの距離が遠くなる。

フレンとの距離が開く毎に、スフィアの心にはぼつかりと、大きな大きな穴が広がっていった。

無くなっていく……

自分の居場所が……

離れてゆく……

自分に安らぎを与えてくれた人が……

離れてゆく……

こんな自分に、優しく接してくれた人が……

「あ…あぁっ……」

スフィアに残されたのは、ただ一つの大きな穴。

フレンの背中を見つめ、スフィアは小さな声を漏らす。

悲しみの涙を流す。頬を伝った涙は、地を濡らす。

初めて、スフィアは気付いた。

自分は今まで一人で生きてきた。…それが当然であり、自分は一人で生きていける。そう思っていた。

違っていたのだ。間違っていた。

恵まれた力を振り回し、破壊し、盗み、生きる。

本当はしたくなかったのだ。自分の心に嘘を吐いてきた。

甘えなかった。居場所が欲しかった。ただ、安らげる場所が……

それを与えてくれた人。

無意識のうちに、自分は彼の力になりたいと、そう思っていた。

彼の過去に触れ、彼もまた、一人だと知り。

救いたいと、彼が自分にしてくれたように……

セリー又はそれを恋と言った。

未熟な自分にはまだ、それが分からない。だが、フレンは自分にとって間違いなく……

大切な人だった……

「フレン…フレンっ！」

スフィアはフレンを呼んだ。

短い時間だった。喧嘩ばかりしていた。でも、充実していた……

「っ！」

スフィアはフレンを追おうと走りだす。が…

「ああっ?!」

焦ったせいか足がもつれ、思い切り転けてしまう。

フレンの姿は見えなくなってしまう。しかし、スフィアは構いなしに叫ぶ。

「フレンっ…フレンっっ！」

ひたすらに、大切な人の名前を。何度も、何度も……

楽しい時間をくれた。その人に、自分はまだ、大切な事を言っていない。

「あああああああっっ!!!」

泣き声に近い叫びは、広い中庭に響き渡っていた。

伝えたい。彼にたった一言だけ……

豪華な調度品が並ぶ広い部屋。その一つ一つは、素人目にも分かる程高価な物だ。

部屋の中央に置かれたソファーに腰掛け、アレンは意味もなく一点を見つめている。決してそこに何かある訳ではない。アレンの意識は別の場所へ向かっていた。

「…………ふう」

小さく溜め息一つ。悩みを吐き出す様な物だ。

最も、溜め息をいくら吐いても悩みは消えないのだが。

「……」

首を90度左に向け、壁に掛かっている一枚の肖像画を見る。そこには、一人の麗しき女性が笑顔で椅子に腰掛けている。

「マリン……」

アレンは愛しい娘の名を呼ぶ。この世から居なくなってしまった娘の名を。

肖像画の中のマリンは、綺麗な金髪を肩口で揃えている。この肖像画が有る限り、アレンの中でのマリンは常にこの姿だ。

アレンが肖像画を見つめていると、誰かが扉をノックした。

アレンが「入りたまえ」と促すと、客はゆっくりと扉を開いた。

「何だ、オリエルではないか」

扉の先にいた男性オリエルは、アレンの息子。三姉弟の長男だ。

髪は白く、短く刈り込まれている。筋骨隆々の肉体は、服の上からでも分かる。

「稽古は終えたのか？」

「はい、父上」

アレンに対し恭しく礼をするオリエル。堅苦しい性格は私生活でも稽古中でも変わらない。

息子の相変わらずの態度に、アレンは苦笑いを浮かべる。が、すぐに真剣な表情へと変わった。

「調査が終わったのか？」

「ええ……」

オリエルは書類の束を取出し、それをアレンへ手渡した。

受け取った書類に目を落とし、一枚、また一枚と捲っていく。

「やはり…な」

「父上、奴は騎士の風上にも置けぬ者です」

オリエルは静かに怒りを見せる。それはアレンも同じだった。

「奴が次に少しでも怪しい動きを見せたら……」

アレンの言葉をオリエルが引き継ぐ。

「それが、奴……ハミルの最後ですね」

時は夕刻。厚い雲が太陽を覆い、今後訪れる嵐を予感させていた……

夕日に照らされる街を、スフィアは歩いていた。

一度フレンの家を見に行ったが、彼はいなかった。

あてもなく街を歩き続ければ会えるかもしれない。その僅かな可能性に賭け、何時間も経っていた。

不意に、スフィアは立ち止まった。俯き、肩を震わせ、小さく呟いていた。

「……たい……」

何度も、うわごとの様に何度も…

「会いたい…会いたいっ」

そう、呟いた。

いつの間にか、瞳からは涙が零れていた。

その涙も、決してフレンを失った穴を埋めてはくれない。悲しみに
悲しみを上塗りしているだけ。

夜になれば彼も家に帰るだろう。だが、この悲しみはスフィアをそ
こまで待たせてはくれない。

行き交う人々が、泣いているスフィアを見て、何事かと足を止め始
める。

「ちっ…」

舌打ちをし、スフィアはまた歩きだそうとした。その時……

「おやおや、これはいつかのお嬢様」

背後から甲高い声。聞いたことのある声だった。

演習場で声を掛けてきた男。スフィアが振り返ると、鎧に身を包ん
だ男は、満面の笑みを浮かべていた。だが、それは汚い笑みだった。

「……何だよ」

声のトーンを落とし、凄みを利かせる。だが、男…ハミルは表情一

つ変えずにスフィアを見下ろしている。

「いえ、少しお話がありましてね？着いてきて頂けますか？」

スフィアが無視をして歩きだそうと、踵を返した。

「
」

その刹那、ハミルが言葉を発した。スフィアは驚き、ハミルの顔を見た。そしてすぐに、その顔を怒りで歪めた。

「着いてきて頂けますね？」

「……ああ」

スフィアはハミルの後に続いた。

鬱蒼と生い茂る木々の中、剣を掛け、私服に身を包み、フレンは切り株に座っていた。

そう、ここは幼いフレンが必死に剣を振り回していた場所。…始まりの場所だった。

目を閉じ、耳を澄ます。

木々の騒めき、鳥の囀り。
自然の声が聞こえる。

ここは始まりの場所。全てを守ると、そう誓った場所。

「…ここに居たのか」

「…」

フレンは声だけで誰か分かった。ミリアだ。

彼女は腕を組み、仁王立ちをしている。顔は、呆れているようにも、怒っているようにも見えた。

「…何で、あんな事をしたんだ」

見られていたらしい。フレンはしばらく悩み、口を開いた。

「これが、僕に出来る最大限だからだ」

バシンッ

フレンが言葉を発した瞬間。ミリアが彼の頬を叩いていた。乾いた音が森の中に響く。

「…」

フレンは無言で座っている。反応が全く無い。まるで廃人だ。

ミリアはフレンの胸ぐらを掴む。今のミリアは本気で切れていた。

「何が最大限だよっ、お前は何かしたのかよっ!!」
「何もしていない、それが一番だからだ」

フレンの言葉に、ミリアは顔を歪める。フレンは言葉を続けた。

「彼女は心を開かない。僕は賭けに負けたんだ。だから、彼女の事はもういい」

ただの言い訳、ミリアは強く拳を握り締め、フレンの顔面を力一杯に殴った。これには、流石のフレンも倒れた。

「何があつたかは知らねえが、女一人助けられねえで孤児院守るとかほざくんじゃねえっ!!」

ミリアは倒れたフレンを見下ろし、罵る。フレンは上体を起こし、ミリアをキツと睨み付けた。

「じゃあ…どうすれば良いんだよ…。僕はっ…」

フレンの問いに、ミリアは静かに答える。叱るようではなく、優しく諭すように。

「『どうすれば良い』じゃない、お前自身が『どうしたいか』だろ」
ミリアの指摘に、フレンはハツとする。彼はどこか、憑き物が落ちたような顔をしていた。

『素直になりなさい』

アレンもそう言っていた。

「男なら、二つとも護ってみろ」

ミリアは次いで言った。一体彼女はどこまで今回の件について知っているのだろうか。フレンはそれが分からなかったが、彼女の言葉

が、今の彼の心に突き刺さった。

「両方…守る…」

フレンは呟き立ち上がった。そして剣を持ち、孤児院とは反対方向へ歩きだす。ミリアはフレンを呼び止めた。

「フィーナさんに挨拶しないのか？」

「いや、僕にはその資格はない。…ここを捨てた身だからな」

「まったく、相変わらず矛盾してんな、お前」

呆れたように肩を竦めるミリア。フレンは口元に、悲しげな笑みを浮かべる。

「…本当は怖いんだ。居場所がもう無いと知るのが」

フレンに対して、ミリアは余裕の笑みを浮かべる。

「それは自分で確かめな」

ミリアのその言葉を聞きながら、フレンは歩きだした。

フレンと入れ違いで一人の人物が慌てた様子で現れた。フィーナだ。

「ミ、ミリアちゃん…」

「ど、どうしたんだ?! フィーナさんっ」

フィーナが余りに慌てているので、ミリアも何事かと、走ってきた
フィーナの肩を掴んだ。

「フィーナさん、一体どうしたんだっ」

相当の距離を走ったのだろう、フィーナの息はかなり切れていた。
取り敢えずミリアは、フィーナが落ち着くのを待った。

数分待ち、やっとフィーナの息が整う。そして、彼女はこう言った。

「リ、リインが居ないのっ、どこを探してもっ!」

気の陰で、フレンは二人の話を聞いていた。フィーナが駆けしてきた
時は驚いたが、フィーナの言葉を聞き、フレンの頭には嫌な予感が
駆け巡った。

「...!、まさかっ!」

勢い良くフレンは駆け出した。

「ちいつ、ハミルの野郎っ」

そう、呟いて...

「…フレン？」

ミリアの耳にはフレンの足音が届いていた。

「…フレン、くんがどうしたんですか？」

フィーナはミリアの言葉に疑問を抱き、そう尋ねた。

「…フィーナさん」

ミリアは静かに言い、フィーナを見つめる。優しい笑顔を向けられ、フィーナは戸惑う。

「歓迎会の準備、しといた方がいいぜ？」

頭上にクエスチョンマークを浮かべるフィーナを放置し、ミリアは歩きだした。こう呟きながら。

「さあて、俺も手伝いますか…」

ミリアは大きく背伸びした。

暗い路地裏、スフィアはハミルの後を追ひ、ここへ足を踏み入れていた。

西日が差し込み、今は明るいが、いずれ混沌の闇に包まれるだろう。

迷いなく歩くハミル。スフィアは無言でそれを追う。

「…おい」

いい加減我慢が出来なくなったスフィアは、立ち止まり、ハミルを睨んだ。ハミルもそれに気付き、足を止め、スフィアの方へ振り返った。

「いかがしましたか？」

「どこまで行くんだよ」

「そう焦らず。あとすぐですので」

ハミルはまた歩きだす。スフィアはハミルのあとを渋々追った。

「…」

歩きながら周囲を見渡す。数日前、スフィアはここに居たのだ。赤髪が悪魔と呼ばれ、力を振り回していた。

ハミルは奥へ奥へと進んでいく。奥へ向かう程に、スフィアは吐き気を覚えた。

かつて居た場所の筈なのに、まるで馴染みが無い。そして思う。自分分はフレンの隣で安心していただけのだと。

居場所を与えられて、心から嬉しかったのだと。

数分程歩き、ハミルは足を止めた。振り返り、その瞳にスフィアを写す。口元には薄い笑み。スフィアはそれを見て寒気を感じた。

「着きました」

「どこだよ、ここ」

広場だろうか、屋外の筈なのに薄暗く、光が届いていない。ハミルは広場の中心にある水の枯れた噴水へと歩いていく。

「おい、リインはどこだ」

無骨な石造りの広場に響き渡るほど大きな声で、スフィアは叫んだ。スフィアがここへ来た理由。それは、リインがハミルの手に落ちたからだ。

「ああ、申し訳ありません。あちらですよ」

ハミルは親指でスフィアのいる反対側を示す。広場の奥、リインは気を失い力なく倒れていた。

「リインっ！」

「おっと、少々お待ちください」

駆け出そうとするスフィアを、ハミルは制した。口元には邪悪な笑み。

「……何だよ……」

「彼女をお返しするのに、一つ条件があります」

ピツと人差し指を立てるハミル。スフィアは眉間に皺を寄せた。ハミルは髪を掻き上げる。細い目が怪しく輝いた。

「私の国取りを手伝いなさい」

ハミルはそう言った。スフィアは呆れたように肩を竦める。そして、可哀想な奴を見るようにハミルを見た。

「国を？このウィルネスを？…はっ、馬鹿じゃねえの？お前」

ハミルの言葉を鼻で笑いあしらうスフィア。だが、ハミルは気にせず、依然として笑みを浮かべている。スフィアはそれを気味悪く感じた。

「良いのですか？彼女がどうなっても…」

ハミルがパチンと指を鳴らす。すると、広場に大勢の男達が現れた。スフィアは見慣れていた。そう、ここ一帯の住人達だ。

治安の悪いこの地域は、闇商人や犯罪者が住んでいる。以前はスフィアもその一員だったのだが…

ハミルが顎で男の一人に指示を送る。男は頷き、気を失っているリインのもとへ歩く。そして、リインの喉元にナイフを突き付けた。それを見たスフィアは咄嗟に叫ぶ。

「止めろっ！！」

「まあまあ、落ち着いて下さい。…貴方の返答次第で、彼女がどう

なるか変わります。この意味、ご理解頂けますか？」

スフィアは唇を噛む。薄い皮が破れ、血が滲み出る。瞳には怒りが見えていた。

「ちっ…」

スフィアは炎を出そうとする。だがその時、脳裏にフレンの言葉が過る。

『…力を使わないで欲しい…』

「あたしは…どうすれば…」

スフィアは俯き、震えた…

フレンは街中を疾駆していた。鎧を身に纏っていない分、普段より数段速く走っていた。だが、目的地が分からない以上どうしようもない。

「くそっ！」

足を止め、周囲を見渡す。ふと、おかしい所を見つけた。

「あれは…」

巡回している兵の動きがおかしかった。普段はいない場所に兵が巡回している。

フレンは兵に声を掛けた。

「すまない」

兵は一瞬警戒したように身構える。だが、相手がフレンだと分かる
と背筋を伸ばし敬礼をした。

「はっ、何でしょうかつ」

「今の時間、ここに巡回の兵はいないはずだ。…何故キミはここに
いるんだ？」

フレンの質問に、兵は明らかに動揺した。ハミルはこの先にいる。
そうフレンは確信した。

おそらく、この兵にはハミルの息が掛かっているのだろう。

「すまない、通して貰おうか」

フレンが通ろうと足を踏み出した瞬間、兵は剣を抜いた。一人では
ない、気が付くと複数の兵に囲まれていた。

「ちいっ！」

相手の数は十余名。普段の稽古なら問題ない人数だ。しかし、フレ
ンは鎧を着ておらず、リスクが大きい。それになるべく時間は無駄
にしたくなかった。

「申し訳ないが…」

フレンが剣を抜こうとしたその時。

「があっ?!」

兵の一人が倒れた。フレン以外は全員が辺りを見回す。

その隙に、フレンは兵の脇をすり抜けた。

兵の怒声を聞きながら、フレンは笑みを浮かべた。

「…ありがとう」

フレンは闇の中へ消えていった…

「ちっ！追ええっ!!」

兵の一人が叫ぶ。兵達が走りだそうとしたが、行く手を一人の少女が遮った。

「どけ！小娘っ！」

兵の一人が少女に手を伸ばした瞬間、その兵の腕が凍り付いた。

「はぁ…本当に手のかかるガキだな、アイツは…」

少女はやれやれと肩を竦め、振り返る。その姿はりりしく、そして美しかった。

兵があまりの美しさに言葉を失う。

少女…ミリアは兵全員を見、言った。

「さあ、…お前等の相手はこの俺だ」

ミリアの足元から、凄まじい冷気が吹き出した…

「さあ、お返事をお聞かせください」

スフィアはハミルを睨む。

この状態がどれ程続いただろうか。日の光が無くなり、街灯に火が灯っていた。

「あたしは…」

力を貸せばフレンの願いを裏切る事になる。だが、孤児院の子を守るためなら。スフィアは口を開こうとした。その時。

「ぐああっ?!」

奥から男の汚い悲鳴。全員が一斉に声のした方向を向いた。

そこには、リインにナイフを突き付けていた男が気を失い、倒れていた。

「フ、フレンっ?!」

リインを抱え、フレンが立っていた。スフィアは驚き、声を上げる。フレンはハミルを睨んでいる。スフィアが初めて見るフレンの表情。

彼の顔は怒りに歪んでいた。

フレンは腰を屈めた。そして、目にも止まらぬ速さで男達の間を駆け抜けた。

男達が驚きの声を上げる中、ハミルだけは余裕綽々でフレンを見送っていた。

フレンが足を止めたのはスフィアの傍。視線はハミルから外してはいない。

「フレン…お前」

「すまない、この子を守っていてくれないか」

フレンは、スフィアにリインを預けた。気を失っているリインを、スフィアは抱える。

「何故いらっしゃったのですか？」

その様子を眺めていたハミルは、フレンに言った。

「自分の気持ちに素直になっただけだ」

フレンはそう言って剣を抜き放ち、構えた。

「ハミル、お前には騎士としての誇りはないのかっ」

フレンは問う。ハミルはほくそ笑みながら答える。

「そのような物…初めからありませんよ」

騎士の誇りを馬鹿にするかの様に、ハミルは嗤う。

「問答はそろそろやめにしましょう」

ハミルが手を叩いた。男達が各々武器を構える。

「さあ、皆さん？お願いしますよ？」

男達がフレンへと踊り掛かった。

「ふう…」

気絶した兵の山に腰を降ろし、ミリアは空を見上げ、小さく溜め息を吐いた。

「弱つちいなあ…最近の兵士は…」

一人の兵の顔を、ミリアは突く。完全にのびている兵はまるで気付かない。

上空の月は厚い雲に覆われ、その輝きを拝むことは出来ない。

「…こりゃあ、一雨来そうだな」

ミリアはぼんやりと呟く。そして、真面目な顔になり。

「しっかり守れよ…フレン。大切な物を…」

静かにそう言った…

「…ほう」

ハミルは感嘆の声を漏らした。彼の周囲には、男達が倒れ伏していた。

「よくもまあ、この人数を…しかも全員気を失っているだけとは」

軽く舌を打ち、ハミルは近場に転がる男の顔を蹴る。男は白目を剥き、起きる様子はない。

五十名を越す男を相手にし、フレンは息を切らしていた。防具が無い彼の身体は至る所が傷付き、血を滲ませている。

「…っ！」

強い痛みが、フレンの表情を曇らせる。基礎のなっていない相手なだけ、騎士を相手にするよりは幾分かはましだ。

だが、殺すわけにはいかない。手加減をして戦った結果、このような状態になってしまった。

「…まだまだ…鍛練不足、か…」

そう言つて、フレンは血の混じつた唾を吐き捨てる。

「お見事です、ね、フレンさん？」

ハミルはわざとらしく拍手をする。その行動がフレンを苛立たせる。

相手に惑わされてはいけない。フレンは、そう自分に言い聞かせた。

「…さあ、ハミル。後が無いぞ」

フレンが剣を突き付ける。だが、ハミルは不気味な笑みを浮かべるだけ。特に身構えたりはしない。それどころか、ハミル武装らしい武装をしていない。

どういう事だろう。フレンは嫌な汗をかく。

「頑張つた貴方に、面白い物を見せて差し上げましょう」

ハミルは『何もないはず』の両腰に両手を伸ばす。

そして、『何か』を掴んだ。

「さあ…楽しい遊戯の時間です…」

シャッ…

金属の擦れる音。

確かにハミルは『剣』を引き抜いた…

「キミは…」

「んあ？」

少しうとうととしているミリアに、一人の男が声を掛けた。

白髪の男、アレンだった。脇に数名の兵も控えている。

「お久しぶりですな」

アレンが恭しく礼をする。高い身分の人物らしい、綺麗な礼だ。

「あの時、孤児院に居られた方ですか？」

「ああ」

ミリアはやる気なく答える。完全に寝るつもりだったらしい。目を擦り、涙を拭った。

「アレンだったっけ？アンタ」

「貴様っ?!」

控えている兵の一人が剣を抜こうとするのを、アレンが手で制す。

「止しなさい。…ええ、そうです。覚えていて頂けましたか」

アレンは柔かい笑みを浮かべる。ミリアはじっとアレンを見つめる。

「覚えてるさ、孤児院からフレン坊やを連れ去った奴だからな」

本気ではないが、ミリアは嫌味を言った。アレンは特に表情を崩す事はない。

「嫌われていますな。…ところで、貴方はここで何を？」

さらりと流し、アレンはミリアに尋ねた。

「ん？ああ、ちょっとした手伝いだ」

手をヒラヒラと振りながら、ミリアは答えた。アレンは訳の分からないといった表情でミリアを見る。

「あ、俺は別に国の敵じゃねえからな？」

ミリアが補足する。すると、アレンは眉間に皺を寄せた。

「…ハミルが中にいるのかね？」

「あと、フレンもな」

ミリアの言葉に、アレンの眉がピクリと動く。そして、兵に何かを指示する。

「何故、フレンがいるのですかな？」

アレンの問いに、ミリアが答える。

「大切な物を、守るためだよ……」

ミリアが深い闇に視線を送る。アレンも一緒にそこを見た。

「……」

言葉を発する事無く、息を呑むアレン。その目はどこか寂しげだ。

「行かなくて良いのか？…大事な養子が傷物になるぜ？」

ミリアの言葉でアレンは我に返り、軽く咳払いをした。

「…では、私はこれにて」

「……ちょっと待て」

闇へ消えようとするアレンを、ミリアは呼び止める。

「何ですか？」

アレンは首だけを動かし、後方のミリアを見た。

ミリアはアレンをじっと見据え、聞いた。

「…何でフレンを養子にしたんだ？」

「十五年前に申した通りですが…」

静かに答えるアレン。だがミリアは納得しない。

「それだけじゃ無いだろ？」

ミリアは食い下がる。アレンは視線を闇へと戻し、口を開く。

「何故、そう思われますか？」

逆にミリアに対して質問を返す。

「なあに、ただの勘だよ」

ミリアがそう言うと、アレンは深い溜め息を吐いた。

「人には知られたくない事もあります。…ご勘弁下さい…」

その言葉を残し、アレンは闇へ消えていった。

ミリアは無言でそれを見送った……

「くっ…」

フレンは剣を支えに、ようやく立ってられる程に傷付いていた。服は血で赤く染まり、口の端からも血が滴り落ちていた。

「フレンっ?!」

遙か後方でリィンを抱えるスフィアが叫ぶ。瞳からは涙が零れていた。

我慢仕切れず、スフィアは火を放とうとする。が。

「止めろっ！」

フレンが察知し、叫ぶ。

スフィアは詠唱を止め、フレンを見る。

「何で?!」

「キミには戦って欲しくないんだっ!!」

スフィアには、その手を血で染めて欲しくは無い。それがフレンの願いだった。

「ここは僕がっ」

フレンは、前方で傷一つ無く、悠然と立つハミルを睨む。

「…一体あれは…」

それにしても奇妙だった。ハミルの手には何も見えない。だが、確かに剣を握っているのだ。

「ふふっ、どうでしょうか、私の剣の味は…」

ハミルが笑う。剣があるであろう場所を見つめ、ハミルは言った。

「貴方はここで死んで頂くので、特別に教えて差し上げましょう」

フレンは眉間に皺を寄せ、ハミルを見据える。馬鹿にされている気がするが、奴を攻略する糸口が見えるかもしれない。

ハミルは愉快そうに語りだす。

「私はこの力を、とある方から頂きました…」

陶醉したように、ハミルは自分の身体を触る。すると、身体が透明になり、向こう側が見えるようになってしまった。

フレンは息を呑む。何が起こっているのか分からない。ただ、気味が悪いことこの上無かった。

「あの方はおっしゃいました。…私には天賦の才があると！」

両手を大きく広げ、ハミルは喜びを表現する。胴の部分が消えているため、奇怪な存在だ。

「私は力を得ました。この力を…」

次第にハミルの姿が薄れてゆき、とうとう身体全てが見えなくなってしまった。

「貴方は私にはかありません。選ばれた私には……」

ハミルの声だけが響く。フレンは周囲を見回す。そして、小さく舌を打つ。

「っ?!」

突如、フレンは腕に痛みを感じ、身を捻った。腕から鮮血が吹き出す。

「あっはははははははっ?! 手も足も出ませんかあっ?!」

ハミルの狂ったような笑い声が聞こえる。

剣を振るう音のみが聞こえ、身体中から血が流れ出る。

「くそっ…」

ハミルは完全に遊んでいた。フレンはこの状況を打破するための策を考える。

「…一か八か」

フレンは剣を正面に構える。そして目を閉じた。見て分からねならば、感じるしかない。

フレンは意識を集中させ、ハミルの動きを探る。

僅かに聞こえる、ハミルが風を切り走る音。それが近づいた瞬間、フレンは力一杯に剣を振るった。

「破あっ!」

鈍い手応え、おそらくハミルの胸部。ハミル息を呑むのが聞こえ、気配が遠退いた。

僅かだが勝機が見えた。フレンは再び剣を構える。

「…侮れませんね」

ハミルの呻くような声が聞こえる。先程の一撃が、意外にも効いているらしい。

フレンは息を整える。出血量の所為か、足元がふらついたが、不思議と心は先程よりも澄み渡っていた。

「…こちらにも策があります…」

ハミルがそう言った。フレンはどこから来ても良いように、必死に精神を集中させる。

ヒュンツ…

刹那に聞こえた風を切る音。だがそれは、フレンの方向へは向かっては来ない。

フレンの頭は一瞬真っ白になる。だがすぐに気付いた。

「…まさかっ?!」

気配を探る。悪い予感は的中していた。

ハミルはスフィアへと向かっていた。フレンは全力で駆ける。

鎧を着けていない分、ハミルよりは速い。だが微妙なタイミングだ。

「間に合ええっ!!!」

スフィアの前に滑り込み、フレンは渾身の力で剣を振り回した。そ

れは型に填まった動きではない。ただがむしゃらに、初めて剣を持った時のような不恰好さで…

ヒュンツ……ズシャツツ

二つの音が混じった。フレンの剣と、ハミルの剣。

フレンの目の前に、ハミルの首が落ちた。透明化が解け、ハミルの身体が露になり、首以外は横倒しになった。

フレンの前に落ちたハミルの顔。その顔は、信じられないと言わんばかりに歪んでいた。

「フ…フレンっ！」

スフィアの顔が勝利の喜びに輝く。リインを静かに横に降ろし、立ち尽くすフレンの肩に触れた。

…その時。

ドサツ…

フレンが仰向けに倒れた。スフィアが支える形となり、スフィアはフレンの体重に耐え切れずに尻餅をつく。

「いつてえ…何す…んだ…」

文句を言おうとして、スフィアは言葉を失った。

フレンの顔には額から頬にかけて交差した、巨大な傷が出来ていた。おびただしい血が流れ、誰が見ても致命傷なのは明らかだった。

フレンの目は虚ろ。焦点を捉えきれではない。

「おいっ！フレンっ！！」

「…ス…ファイア？」

まだ息はある。だが声も擦れ、身体からは力が抜けている。とてもスファイア一人では運ぶ事は出来ない。

スファイアの瞳からぼろぼろと、大粒の涙が零れ落ちる。その涙はフレンの頬を濡らした。

いつの間にか、空から雨が落ちていた。

スファイアの涙も、その雨に流されてしまった。

「…スファイア…泣いてる？」

それでも、フレンには彼女が泣いている事が分かったらしい。

「ああ、泣いてるさ…お前と…フレンと一緒に居たいからっ」

スファイアは必死に呼び掛けた。フレンが眠らないように。必死に…

失いたくない。傍に居たい。居てほしい。

スファイアのその気持ちが、全て涙となって現れていた。

「…ゴメン。…無理だ…」

フレンの口から漏れだす小さな声。耳元で鳴る水音も、今は遙か遠くに聞こえた。

フレンの言葉に、スフィアは大きく首を横に振った。

「うるさいっ、そんな事言うなっ！…あたしはお前と居たいんだ！甘えたいんだ！…お前の事が…」

スフィアは、今この瞬間、はっきりと理解した。

「好きなんだっ…お前…フレンのことがっ！！」

セリーヌの言う通りだ。フレンに感じていたこの感情。それは紛れもない好意だった。

フレンは薄く微笑んだ。

「…あり…がとう」

そう言っつて、目を閉じ始めるフレン。スフィアはフレンを揺すった。

「寝るなっ！目を開けろっ！！」

涙混じりの声で必死に訴える。

「女の子らしくするからっ！言葉遣いも直すからっ！だからっ…だからっ…」

死んでしまっつ。一番大切な人が……

死なせたたくない。その一心で、スフィアは必死に思考を巡らせる。

そして一つ、思いついた。

「契…約…」

妖精が人の可能性を引き出す。もしかしたら、フレンは助かるかもしれない。

勿論、可能性は低い。だが、スフィアはフレンの可能性を信じることにした。

スフィアの背中を冷たい雨が打つ。それはまるで、スフィアを嘲笑うかのように。

「…頼む…フレン」

スフィアは静かに、優しく唇を近付けた。まだ辛うじて漏れるフレンの息が、スフィアの口に触れる。

「……大好き」

そう言つて、スフィアはフレンに口付けをした。

フレンの身体が、淡い光に包まれた……

医務室の中、椅子に腰掛け、スフィアは鼻歌を歌っていた。

ベッドから上体を起こしている人物を見上げ、満面の笑みを浮かべている。その笑顔は、まるで小さな花のようだった。

「……すまないスフィア。そんなにじっと見ないでくれ」

人物…フレンは頬を赤らめた。

フレンに目覚めた力は『回復力の強化』だった。

僅かな可能性を信じたスフィア。その思いが通じたのだ。

「やめません」

そう言つて、スフィアはフレンに顔を近付ける。フレンは顔を引いて逃げる。

スフィアは、あの日から素直になり、言葉遣いを直すと誓った。その結果がコレだった。

「何で逃げるんですかあ？」

「に、逃げるだろ…普通」

フレンが慣れるには時間がかかりそうだった。

「あつ、そうだ。フレンさまに言わなくちゃいけない事がありました」

「…何だい？」

スフィアが椅子に腰を降ろす。フレンは首を傾げた。
「フィーナさんからの伝言です」

「…」

フレンは息を呑んだ。居場所が無いかもしれない。それに対する恐怖がフレンを包む。

スフィアはゆつくりと口を開いた。

「フィーナさんはこう言っていました……」

『貴方の心の闇に気付かず、すみません。…こんな駄目な私ですけど、今でも貴方は家族だと思っています…。いつでも、帰ってきて下さい。』

「…」

フレンが俯くのを確認しながら、スフィアは最後の言葉を紡ぎだした……

『孤児院は、いつまでも貴方の…フレンくんの家です』

その言葉を聞き、フレンは涙を流した。大声を上げ、子供のように泣きだした。

「僕は…本当は復讐なんてどうでも良かったんだ…」

涙を流しながら、ポツリポツリと、自分の気持ちを話し始めた……

「ただ、守れなかった。非力な自分が許せなかった……」

「…はい」

スフィアが優しく相槌を打つ。

「自分の手で守りたかった…孤児院を、あの場所を…」

スフィアが優しくフレンの肩を抱いた。

「そして…僕も、スフィアと一緒に…ただ居場所が欲しかったんだ……」

随分と遠回りをした。確かな気持ちを見つけるのに、長い時間がかかった。

「今は泣いて下さい。…今までずっと、我慢してきましたんですから…」

スフィアの腕のなか、フレンは本当に小さな子供のように、泣きじやくった…

「…そんな事があったんだ」

『とある一件』で滅茶苦茶になった部屋の掃除をしながら、奏はスフィアの話の聞いていた。

聞いているうちに手が止まり、結局作業はあまり進んではないの

だが…

「あゝ… そんな事もあったなあゝ」

ミリアが隣でそんな事を言っている。「お前はどこのおばさんだ」と突っ込みたくなるのを奏は必死に堪え、スフィアに質問した。

「ところで、フレン『さま』って何なの？」

スフィアはキョトンとした顔になった。「何を当たり前の事を？」
そう言いたげだ。

「契約を結ぶと、主従関係が生まれるんですよ？」

その言葉を聞いた瞬間、奏の首がグリーンと回り、視線がミリアを捉えた。

ミリアは口元に薄い笑みを浮かべ。

「どうしました？カナデさま？」

奏は鳥肌が立った。ミリアが言うのは絶対に駄目だ。

もう少し、スフィアから話を聞こうとした時、誰かがスフィアを呼んだ。

声の主はフレンだった。

「カナデさん、すみません。私、今日はこれで帰りますね？」

奏の答えを聞かずに、スフィアはフレンのもとへ駆けていく。途中

ですっ 転んだが……

「…あれは、天然なのかなあ…」

どこか釈然としない部分を感じながら、奏は作業に戻った。

ハーガル城の長い廊下。スフィアとフレンは並んで歩いていた。

時折、スフィアがフレンを見上げては笑顔を向ける。

「…どうした？」

疑問に思ったフレンが尋ねる。スフィアは小悪魔のような笑みを浮かべ、口元に人差し指を当てて言った。

「いや、助けに来たとき言ったのはどういう意味かなあって」

『自分の気持ちに素直に』

フレンはふと、その言葉を思い出し、軽く頬を赤らめた。

そして、無言で歩く速度を速めた。

「あっ！待って下さいよあっ、フレンさまあっ」

急いで後を追うスフィア。横に並び、また笑顔を向ける。

二人は笑い合いながら、目的地へと向かった。

優しい家族の待つ。

暖かい孤児院（家）へ……

キミが僕にくれたもの…

それは理由…

キミが僕にくれたもの…

それは居場所…

キミが僕にくれたもの…

それは新しい感情…

まだまだ沢山あるけれど。

僕からキミに贈る感謝の言葉……

- ありがとう -

第六章↳追憶・共に歩む…（後書き）

次回からは本編に戻ります。

『とある一件』とは、知り合いが外伝を書くので、そちらを御覧下さい。

第七章　友達（前書き）

まとまりが無くなってきた気がします…

第七章　友達

「おばあちゃんっ、それってほんと？」

「ええ、本当よ？」

少女は純粹無垢な笑みを、自身の祖母へ向ける。

二人で浜辺を歩く事。少女はそれが大好きだった。

「ほんとにつ、ほんとにおばあちゃんはうみのむこうからきたのっ？」

少女は綺麗な祖母の手を握る。年齢を感じさせない、綺麗な手だ。

祖母は優しい笑みを浮かべ、少女を見る。そして、不意に立ち止まった。

少女は不思議そうに祖母を見る。

祖母は、静かにこう言った。

「カナデ。……貴女は、優しい人になりなさい……」

少女、奏は何故そんな事を言われたのか、理解する事は出来なかった。

だが、大好きな祖母の願いは叶えなくてはいけない。そう思った。

「うんっ！」

幼い奏は笑顔で答えた。

これは遠い日の記憶。

静かな海辺での、祖母との約束……

豪華なベッドの中、奏は目を覚ました。とても懐かしい夢を見ていた。

大好きな祖母の夢。いつ頃の夢かは忘れてしまったけど、大切な約束をした。

果たして、自分はそれを守れているのだろうか。

奏は自問自答する。だがこれは、自分自身が決める事ではないと気付く。

取り敢えず起きようと思い、体を起こそうとするが。
「痛あっ?!」

激しい筋肉痛が奏を襲う。慣れない肉体労働をしたのだ、仕方ない。どうにか体を起こし、横で眠るミリアを見る。青髪の美少女は大の字で寝ていた。実に幸せそうだ。

頬を突いてみる。柔らかい感触。ミリアは小さく呻くが、起きる様子はない。

「…これで言葉遣いが良かつたらなあ…」

勿体ない。奏はそう思った。ミリアの容姿に、若干だが憧れがある。

ミリアはミリア、言っても仕方のない事ではあるのだが……

「人それぞれ……って事かな……」

いくら言葉遣いが悪くても、それはミリアの個性だ。逆に、その性格であるからこそ気軽に話す事が出来るのだ。

そう考えれば、それがミリアの良さだった。

「……」

痛む体を動かす。ベッドを降りて、奏は窓の外を見た。

街も寝静まり、灯りは一つも無い。街の喧騒が聞けないのは少し寂しいが、その代わり、落ち着いて物事を考える事が出来た。

「…クウィン」

小さな声で、奏はエルフの青年の名を呼んだ。

以前、彼と話して奏は感じた事がある。

エルフにも、人にも妖精にも、必ず悪人は居る。だが、決して全てが悪人では無いはずだ。

確信は持てないが、クウインの様なエルフが他にも居るはず。そう奏は思っていた。

心優しい青年のクウイン。彼がこのままでは処刑されてしまうのは、あまり頭の良くない奏でも分かった。

『ボク達って、もう友達だよね?』

クウインの言葉を思い出す。そう、あの日あの場所で会話した時から、奏とクウインは友達だ。

友達になることに、特別な理由は必要ない。互いにそうだと思えばそうなのだ。

「…助けるよ……クウイン」

奏は決意を口にした。

彼は今も不安だろう。この間見たときは元気そうだったが、いつまでそれが保たれるかは分からない。

それならば、急がなくてはいけない。

奏は拳を強く握り締めた。

地平線の向こうから、光が昇り始めていた…

「朝…」

僅かな明かりで、朝が来たことをクウインは知った。
何度目の朝だろうか。三日目以降は数えていない。

一度牢が壊れた事もあったが、何故か逃げようとは思わなかった。
…気付かなかっただけなのだが。

だが、気付いても自分は逃げなかったと、クウインは思った。

「…カナデ」

理由は簡単、奏がその場に居たからだ。友達を目の前に、逃げるわけにはいかない。

狭い牢の中、クウインは膝を抱えた。身に纏うのはみすばらしい囚人服だけだ。

先日見た奏の顔を、クウインは思い出す。死に対する恐怖。そんな物より、今彼の胸にある思いは一つだけだった。

「…会いたいなあ…カナデに……」

敵である人間、しかも使者に対してこう思うのは何故だろうか。クウインの優秀ではない頭では理解出来ない。

「でも、敵…なんだよね…」

服の袖をキュツと掴む。

『ボク達って、もう友達だよね?』

自身の言葉を思い出す。クウインは唇を噛んだ。

「敵…友達…敵…」

クウインは、ずっと人間は忌むべき存在だと、相容れぬ存在だと教えられてきた。

現に自分は処刑を待つ身だ。教えは正しかったのだ。

しかしクウインは、奏はそうではない。そう信じたかった。彼女の声、笑顔はとても優しい物だったのだ。凄く…暖かった…

「…カナデ…」

クウインは俯いた。彼の口から発せられた小さな言葉は、無機質な岩の牢獄に。

虚しく残響した……

「……ふむ」

ハーバレスは顎に手を当て、考え込む。眉間には、強く皺が寄っている。

その様子を、奏は椅子に座り、緊張した面持ちで見つめていた。隣に座るミリアはふんぞり返っていたが。

場所はハーバレスの自室。時刻は、まだ朝食前といったところだ。

相談があると、半ば強引に押し寄せたのだが、ハーバレスは快く受け入れてくれた。奏は、ハーバレスの寛大さに素直に感謝した。

「いかがでしょうか…」

奏が不安そうに聞く。いつもならそこで優しい笑みを見せてくれるハーバレスだが、今回は難しい顔を続けている。

それは仕方ない、奏はそう思った。自身が提案したのはクウインの解放だったのだから。

彼は国を陥れようとした人物だ。それに、ハーバレスは毒を盛られた張本人だ。ハーバレスがクウインを良く思っていないのは明らかなのだ。

「…それは難しいだろう」

予想通りの言葉に肩を落とす奏。ミリアは奏を横目で見るが何も言わない。

奏を見ながら、ハーバレスは言葉を続けた。

「別に、私自身は怒ってはいないのだよ…」

「え…」

ハーバレスの言葉に、奏は小さな声を漏らす。ハーバレスがそう言

うのは意外だった。

「彼も命令されてやったことだ。それにカナデの話を聞けば、彼は良い青年だと良く分かる。だが…」

ハーバレスは一度言葉を切る。そして目を伏せ、思い悩むような表情へと変わる。

「国は決して、私一人で動いているのではない。…深く根付いたエルフに対する敵対心は、一朝一夕に変えられる物ではないのだよ…」

「…」

奏の表情が曇っていく。悔しそうに唇を噛む。瞳は潤み始めていた。国一つという壁を前に、奏が諦めかけた。その時。

「じゃあ、頭の堅い重役共を納得させればいいんだな？」

隣に座っていたミリアが立ち上がって腕を組み、自信満々にそう言った。それに対し、ハーバレスが言う。

「確かにそうだが、難しいとしかいいようが無い。…あの子は敵側の者だ。皆が納得するかどうか…」

ハーバレスの言う通りだ。クウインは敵国の者。ウィルネスが受け入れるわけにはいかないのだ。

そもそも、受け入れれば各地で暴動が起きる。内部崩壊を起こすのは明らかだ。

「なあに、んな事、後で考えりゃあ良いだろ？」

ミリアらしい意見だった。だが、その力強い言葉は奏に勇気を与えてくれた。

ハーバレスは目を閉じ、深く溜め息を吐いた。そして、ゆっくりと目を開く。その瞳には諦めと優しさが見えた。

「…分かった。ならば二人で頑張ってみなさい。私も影から手を尽くしてみよう」

ハーバレスの言葉に、奏とミリアは顔を見合う。奏の表情が一気に明るくなった。そして、奏はハーバレスに元気良く。

「はいっ！ありがとうございますっ！」

そう答えた。

「…ふん、面白そうだねえ…」

メイド服を着て、国王の朝食を運ぶ茶髪のポニーテール、見た目十八歳程の女性、ラウニーは口元に笑みを浮かべる。

扉に耳を当て、中の会話を盗み聞くその姿は異様。廊下を歩く人々がラウニーに視線を向ける。だが、当の本人は気にしていない。

「お姉さんが一肌脱いであげるとしますか！」

ラウニーはそう言いながら、奏達が扉へ近づくのを感じ、メイドモードへと戻った。

「ねえ、ミリア？」

「ん？」

廊下を歩きながら、奏はミリアに声を掛けた。ミリアは頭の後ろで腕を組み、天井を見上げながら答える。

「何で協力してくれるの？…ミリアだってエルフの事…」

「はあ~~~~っ……………」

奏の言葉を、ミリアはわざとらしい溜め息で遮る。

そして肩を竦め、何を今更といった具合に奏を見る。

「あのな、お前は使者で、俺は導き手だぞ？協力しないでどうすんだよ。それに…」

ミリアは立ち止まり、奏に笑顔を見せた。いつもとは違う、とても優しい笑顔だ。

「俺はお前の信じた事を信じる。お前の…カナデの考えを尊重したい」

不思議だった。

ミリアも信じると言ってくれたが、奏もミリアの言葉を無条件で信じられる。そんな気がした。

「…似合わない」

ありがとう。そう言うつもりが、恥ずかしさからかそんな事を言うてしまう。

「んだと？」

優しい笑顔が引きつる。口の端がピクピクと動いている。ミリアが手に氷を出そうとした。その時。

「あゝ、ちよいとお二人さん？」

奏の背後から声が聞こえた。聞き覚えがある声、ラウニーだ。

「…また喧嘩？」

ラウニーの言葉に、ミリアは氷の精製を止める。そして、ラウニーの方へ向き直った。

「どうしたんだよ、ラウニー。仕事は？」

「ああ、今ちよつと他の娘に代わってもらってる」

そんな事よりと、ラウニーは奏とミリアの肩を抱き寄せ、顔を突き合わせる体勢にした。

そして、ラウニーが小さな声で言った。

「協力してあげようか？あのエルフの事」

「盗み聞きかよ……」

ミリアの突っ込みを華麗にスルーするラウニー。彼女は奏に意見を求めた。

「で、どう？」

「…どうするの？」

取り敢えず内容を聞こうと、奏はラウニーを促した。

ラウニーはそれを聞き、ニヤリと笑みを浮かべた。そして嬉しそうに話始めた。

「あたしの能力は知ってるわよね？」

奏は頷く。ラウニー能力、それは土を操る事だ。

「それを使って……」

ラウニーが二人に作戦を説明した。

ラウニーの作戦を要約するところだ。

重罪人のクウインを助けるには、重役の説得が必要。だが、まず覆らないだろう。

ならば地道に同意見の人を集めるしかない。しかし、エルフである彼を快く思う人物は居ない。

そこで、まずは奏とミリアが信頼をおく人物を集め、クウインに会わせる。

だが、どうやって会わせるのか。奏がそう聞くと。

『ああ、大丈夫。もう繋がってるから』

ラウニーは手をヒラヒラ振りながら答え、「なんてどこに繋がってんだよ…」というミリアの言葉を無視していた。

そして現在、奏とミリアは演習場へと足を運んでいた。

名門シルフィード家の養子であり、師団長のフレンを味方につければ心強い。そう考えたのだ。

二人がフレンを探していると、声を掛けられた。

「あれ？どうしたんですか？」

スフィアだ。

スフィアは大量のタオルを、籠に入れて運んでいる。フレンを待っている間、兵達の身の回りの世話をしているのだ。

「いや、ちょっとフレンにな…」

フレンを探しながらミリアは答えた。奏はスフィアを手伝おうと手

を差出すが、スフィアは首を横に振って断る。

「用ですか？フレンさまでしたら、もうすぐで休憩に入りますよ」

籠を置いて、スフィアが言う。このタオルはその為の物らしい。そんなスフィアを見て、奏は運動部のマナージャーを連想した。

「それなら丁度良かった」

ミリアはそう言いながら腰を降ろし、胡坐をかく。

奏は「座り方を変えろ」と突っ込みたかったが、今更言っても意味が無いので、視線だけをミリアに向ける。

ミリアから視線を外し、奏は稽古の様子を眺める。剣と剣がぶつかり合う音が響いている。

このような光景を初めて見る奏は、その雰囲気圧倒されて無言になってしまった。

そして、ふと気付く。

「あれ？…私がこの間使った剣、誰も使ってないの？」

以前奏が使ったやたらと大きな剣。いくら見回してもそれを使う兵はいない。

「使う方がおかしいですって……」

スフィアが呟く。

「どうして？あれ意外と軽かったよ？」

奏が言うと、スフィアが今度はポカンと口を開いた。そして目を細め、奏を見る。間抜けな顔になっていた。

「あ、あれはですね……」

我に返ったスフィアが、声を震わせながら説明を始めた……

三年前……

「ふああ……」

初めて入る武器庫。スフィアは声を漏らした。

剣や槍、その他多種多様な武器が大量に、そして綺麗に並べられていた。武器に興味の無い物でも、思わず見入ってしまう光景だ。

「スフィアは初めてだったね」

フレンがスフィアの少し先を歩きながらそう言った。

武器庫内は迷路のようになっており、かなり広い。スフィアは迷わないようにフレンへ駆け寄った。

「そうですけど、これはフレンさまがする必要は無いんじゃない？……」

二人が武器庫を訪れた理由、それは武器の点検の為だ。基本、これは新入りの仕事だが、フレンは自らこの仕事を買って出ている。

「初心を忘れてはいけない。それに、こういう事は全員でやるべきなんだ」

おそらく、フレンが高みへ上り詰めた時、身分に関係なくこの仕事をする事になるだろう。

「さあて…」

チェックリストのような紙の束を取り出すフレン。…厚さ三十センチといったところか。

それを見て呻くスフィア。夕日が差し込むこの時間帯に始め、一体いつ終わるのだろうか。そもそも、今日中に終わるかすら疑問だ。

フレンは慣れた手つきでチェックを入れていく。手伝おうにも仕事の無い、スフィアは散策を始めた。

「…何コレ」

鎖鎌だろうか、ここには特殊な物もあるらしい。中には「誰が使うんだ？」と聞きたくなる物や、「どう使うんだ？」と聞きたくなる物もあった。

一通り回っただろうか。スフィアは入り口付近へ戻ってきた。

入った時は良く見なかったが、一度良く見回してみる。

「……へ？」

フレンの進んだ方向とは別の方向だったので気付かなかった。ひとつの剣に、スフィアは目を白黒させた。

一つだけ他の剣とは違い、まるで展示されるように……いや、それはまさに展示されていた。

「……でけえ……」

思わず口調が素の物に変わる。それ程に『巨大な』剣だった。

「スフィア、喋り方」

後ろから、フレンがリストをヒラヒラと振りながら指摘してきた。

どうやら仕事が終わったらしい。……信じられない速度だ。

「フレンさま。……これって」

スフィアは剣から視線を外さないでそう聞いた。

スフィアが哑然とするのも無理はない。

自身の身の丈より遥かに大きく、フレンの肩ほどある。このような剣、持ち上げるだけで一苦労だ。

「ああ、それは『グレートソード』だよ」

「『グレートソード』？」

スフィアはフレンを見る。フレンは呆れたように肩を竦めていた。

「それは人が扱える物じゃないよ。…所謂観賞用だ」

刃の磨ぎ方を見る限り、一応実戦でも使えそうだ。

剣はその重量で物を切る。この大きさなら相当な威力になる。

最も、使える人物がいなければ意味はないのだが…

「でも、誰も使えないなら、何であるんですか？」

スフィアの質問に、フレンは目を閉じ、軽く溜め息を吐いた。そして、言った。

「国王様の趣味だよ…」

「…という事がありました」

「…」

スフィアの話聞いて、奏の頭はこんがらかった。

「え、いや、でも…」

狼狽える奏。ミリアが奏を眺めながら、からかうように奏に向かつて。

「怪力女」

と言った。その瞬間、頭に血が昇った奏は、顔を赤くしてミリアに飛び掛かった。ミリアは押し倒されるが、「怪力女に襲われる」などと笑っていた。

「…子供ですか、貴方達は…」

呆れ、スフィアは額に手を当てる。軽く頭痛が起こった気がした。

「タオルをくれないか、スフィア」

「あ、フレンさま」

いつの間にかフレンが後ろに来ていた。

フレンはタオルを受け取った後、奏とミリアを見。

「…二人とも何をやってるんだ？」

そう言った。スフィアはフレンの疑問に答える。

「まあ、戯れあってるだけです。前のような状態にはならないと思います」

奏は半ば本気で、ミリアは遊びだ。完璧に奏はミリアの玩具だった。

「喧嘩する程仲が良い、というやつかな…」

汗を拭きながら、フレンは二人を眺め、そう呟いた。

二人の取っ組み合いが終わるまでしばらくかった。

「…なるほど」

フレンは奏から話を聞き、そう言った。顎に手を当て、唇を軽く尖らせている。

「…どうですか？フレンさん」

そう聞く奏の服は少し汚れている。簡単な挑発に乗ってしまった恥ずかしさを隠すように、必死に表情を作っている。

正直似合わないのだが…

「…僕は構いませんが…」

フレンは了承したが、どこか齒切れが悪い。奏がそれを指摘すると、フレンは頭を掻きながら。

「僕自身は良いのですが、家が…」

そう説明した。どうやら、シルフィード家の面子があり、個人の意

志で決定するのは難しい。そう言いたいらしい。

「…そう、ですか…」

奏があからさまに残念そうな声を出す。それを見たフレンは少し考え、言った。

「…でも、一度会っぐらいなら良いですよ？」

そう言葉を発した刹那、フレンは強制連行された。

「はあ、カナデさんがそんな事を…」

ハーバレスの自室、そこを訪れたセリー又は、その声を漏らした。

「私もそれは良い考えだと思う、だが…」

ハーバレスはそこまで言っつて、後の言葉を濁した。セリー又はハーバレスの言いたい事を理解し、彼の代わりに言った。

「問題は、カナデさんが使者であること。…ですね？」

「…」

ハーバレスは無言で頷く。確かに、重役を説得するのは難しい、それも一つの問題だ。しかし、こちらの方がむしろ大きいのだ。

「カナデは世界救済の使者だ。…だが、その本人がエルフを救っては…」

ハーバレスは目を伏せ、考え込む。

重役の中には、奏がエルフを打ち倒し、世界に平和をもたらすと考えている者達が大半だ。もし、奏がエルフに肩入れをするような行動をすれば…

「今、国はまとまっていかなければいけないのだ。…お前の意見を聞かせてはくれないか？」

ハーバレスがセリーヌに聞く。セリーヌは一度深く息を吸い、ゆっくりと吐き出す。セリーヌは鋭い視線をハーバレスへ向けた。

「最初に尋ねますが、何故そこまで分かっているながら、カナデさんに伝えず、協力するとまで仰ったのですか？」

「…」

セリーヌの指摘に、ハーバレスは言葉を無くし、俯く。

「それは…」

ハーバレスはしばらくの間思索し、答えた。

「私も…カナデに頼ろうとしていたのだろうか。…協力をすると言っても、こうして考えがまとまっていけないのだから…」

ハーバレスの言葉を、セリーヌは黙って聞いている。ハーバレスは言葉を続ける。

「カナデはいい子だ。…気は利くし、何より優しい。…だが、彼女は普通の女の子だ」

セリーヌは頷く。使者を盲信する者も多いが、彼女は普通の女の子なのだ。何かに秀でた部分があるわけではない。

「だからこそ、私達が支え、力にならなければいけないのではないだろうか」

ハーバレスは迷っていた。国王としての顔、ハーバレス個人としての思い。

この二つの板挟みになっているのだ。セリーヌは最初からそれを理解していた。

「それで良いのではないでしょうか」

セリーヌはそう言った。ハーバレスは顔を上げ、セリーヌの綺麗な顔を見る。彼女は優しい笑顔を浮かべていた。

「…事実、私も最初は彼女を使者として畏怖していました。しかし、カナデさんも一人の人間です。国王の仰る通り、支えが必要です」

「ならば、私はどうすればいいのだろうか」

セリーヌは優しく言った。

「最大限、彼女に協力しましょう。そして、間違いがあれば正せばいいのです」

それを聞き、ハーバレスは頷いた。そして、何か決心したように表情を引き締めた。

「…私も、まだまだ若いな…」

「いえ、王は難しく考え過ぎなのです。もう少し、肩から力をお抜きになられてはどうでしょうか」

セリーヌの言葉を聞き、ハーバレスは笑った。

「はっはっは、お前には適わないな。流石私の倍近く生きているだけの事は…」

ダンッ…

セリーヌが『笑顔のまま』、強く床を踏み鳴らした。

ハーバレスの背中に悪寒が奔る。

「………すまない」

ハーバレスは苦笑いを浮かべ、冷や汗を流しながらそう謝罪した。

「…」

冷たい牢の中、クウインは状況を飲み込めずにいた。突然、柵の向こう側の床に穴が、正確に言えば、『蓋』が開いたのだ。

床の岩が外れ、そこから奏が現われたのだ。

奏を見た瞬間、クウインの表情は明るくなった。が、その後には続き沢山の人が入ってきたため、クウインの脳内はパニックに陥った。

結果、クウインは口を半開きにしたまま、思考が停止し、呆然と奏達を見つめていた。

「クウイン？」

「え？…あ、カナデ…」

奏に名前を呼ばれて、ようやくクウインは我に返った。

視界に奏を捉え、無意識のうちにクウインは笑みを浮かべた。しかし、奏の背後に立つフレンとスフィア、そしてミリアとラウニーを見て、表情を引き締めた。

「えっと…、こちらフレンさんとスフィア。こっちがラウニー」

奏が順番に紹介していく。クウインは頷きながらそれを聞いていた。全員の紹介を終え、場に沈黙が降りる。その沈黙を破ったのはクウインだった。

「カナデ…、何で人間を連れてきたの？」

クウインの眼光が鋭くなる。その瞳はフレンを捉えていた。

「…どうして？」

逆に奏がクウインに質問した。クウインの眼光が弱くなる。そして、再び訪れる沈黙。

「…だって…、人間は…敵だから…」

奏は、クウインの声が震えていることに気付いた。

「私も…人間だよ？」

奏がそう言うと、クウインは俯いた。彼が何を悩んでいるのか、その内容は分からないが、自分に関係があると、奏は思った。

話して欲しかった。自分達は『友達』なのだから。

「…どうすればいいのか…分からないんだ…」

微かな声だったが、クウインが話し始めた。奏達は、黙ってそれを聞く。

「…人間は敵なんだ、…でも、カナデは優しいし…話してて楽しいし…」

クウインは膝を抱え、顔を埋める。

「だから…、友達になりたいって思った。僕は友達がいなかったから。…でも、僕はエルフで、カナデは人間だし…」

「ねえ、クウィン？」

奏はクウィンの言葉に割り込んだ。クウィンは顔を上げる。うつすらと、涙が滲んでいた。

「友達に、種族って関係あるかな？」

クウィンが息を呑む。目を白黒させ、奏を見つめる。

「でもっ…」

「仲の良い相手と、一緒に遊んで、笑って…。それで良いんじゃないの？」

奏の言葉に、皆それぞれ違う反応を示していた。

ミリアとラウニーは、互いに顔を見合い、笑みを浮かべている。

フレンは目を瞑り、奏の言葉を胸に止めているように見えた。

スフィアはフレンの様子を伺っているようだった。

そして、クウィンは奏の言葉を理解するのに、時間がかかっているようだった。

奏の次に言葉を発したのはフレンだった。

「確かに…、カナデさんの言うとおりですね…」

奏と、フレンを見上げていたスフィアの表情が明るくなる。フレンは鉄格子の前へ歩み出た。

「大切なのは一個人。種族は関係ない。ただ、彼に聞きたい事があります」

フレンは強い視線をクウィンへ向けた。クウィンは怯む事なく、フレンの視線を受けとめた。

「クウィン、貴方は罪の意識があるか？」

コクリ。フレンの問いに、クウィンはゆっくりと首を縦に振った。

「貴方は自らの国へ帰りたい。そう思うか？」

もし、自分が助かった後、彼は一体どうするのだろうか。それは奏も気になっていた。

それは奏のみではなかった。全員がクウィンを見つめていた。

彼はゆっくりと。

首を横に振った。

「何故？」

フレンが尋ねると、クウィンは小さな声だが、はっきりと言った。

「帰っても、僕は許されないから…」

クウインの肩が震えだす。

許されない。つまりここを抜け出しても、彼を待っているのは『死』なのだ。

「ならば…」

静かに、だが良く通る声でフレンは言った。

「こちらにつき、協力するか？」

「いやだっ!!」

フレンのこの問いに対し、クウインは声を張り上げて否定した。

立ち上がり、潤んだ瞳でフレンを睨む。

「戦いたくないっ！今回だって、誰も殺さずに済んで良かったと思っただんだ！…僕は誰も殺したくないんだ!!」

必死だった。以前戦った時、きっと彼は心を傷めていたのだろう。奏は改めて、クウインは優しい、純粋な青年だと思った。

「…分かった」

フレンは目を閉じ、奏に言った。

「カナデさん」

「はい」

振り向き、フレンは奏を見る。

優しい笑顔だった。

「養父に掛け合ってみます。少し骨は折れそうですが…」

その場にいた全員が驚いた。クウインだけは、意味が分からないといった表情をしていたが。

「カ、カナデ？…どういうこと？」

「クウイン。フレンさんは、クウインを助けるって言ってるだよ」

クウインは哑然とする。

奏はフレンに何故かと聞いた。すると、フレンは小さく笑いながら。

「…『友達』を助けるのに、理由が要りますか？」

そう返した。奏は。

「そうですねっ」

そう言って笑った。

薄暗い牢の中、微かな笑い声が響いていた。

兵にも聞こえない程の小さな声だが、奏は大声で笑うより楽しく感じた。

「でも、かなり難しいだろうねえ…」

ラウニーが唸りながらそう言った。

牢から帰った一行は、奏の部屋に集まっていた。奏とミリアベッドに腰掛け、ラウニーは転がっていた。フレンとスフィアは壁に背中を預けている。

「ラウニー…、何平然と人のベッドでくつろいでんの…」

「ん？良いじゃないの、別に」

「…」

余りにも堂々としており、突っ込む気力も失せた。

思った以上に外は暗くなっていた。長く牢に居すぎたようだった。

「話を本題に戻すぞ？」

「あ、珍しい。ミリアがまともな事言っなんて…」

ガツンッ…

「なあカナデ？口は災いのもとして、知ってるか？」

ミリアの手には氷。奏は頭を押さえている。

もはや定番なので、フレンも何も言わなくなっていた。

「…ごめんなさい」

ミリアにそう謝罪した後、奏は真面目な顔に変わった。

「ラウニーも言ったけど、やっぱり大変だね…」

奏の言葉を、スフィアが引き継ぐ。

「私とフレンさまも、頑張ってみようと思いますけど…」

「賛同する人間は少ないと思います」

フレンがはつきりと言う。しかし、それは事実だ。逃避する事は出来ない。

「でも、やるしかねえっ！」

パチンと、ミリアが手のひらに拳を打ち付ける。

「こっちでも、若い娘に声かけてみるよ」

ラウニーが寝返りを打ちながら言う。

ゲシッ

「あたあっ?!」

奏はラウニーを蹴り落とした。

「何すんのっ?!」

奏はラウニーの言葉を見無視し、立ち上がった。

そして、全員を見回す。

皆も奏を見つめていた。

「それじゃあ、みんなっ」

奏は拳を握り締め、決意を込めて言った。

「奇跡を起こそうっ!」

どんなに難しくても、必ず『友達』を助けだそう…

奏はそう誓った…

第七章ゝ友達ゝ（後書き）

活動報告に私の戯れ言と、外伝の報告があります。

興味があれば、是非御覧ください。

第八章　始動（前書き）

悩みながら作った結果がこれです（汗）

変な部分はお指摘下さい……

第八章　始動

「…フレンよ、自分が何を言っているのか分かっているのか？」

眉間に皺を寄せ、怒りを溜め息に込める。

アレンは鋭い視線をフレンへ向けた。

「分かっております。その上でお願いしているのです」

一夜明け、フレンはクウインを救出する許可、並びに、シルフィード家の協力をアレンに求めた。

当然の事ながら、いい顔はされない。アレンの鋭い視線が、フレンに突き刺さる。

だが怯む事なく、フレンもまた、その瞳に強い力を秘め、そう言った。

場所はシルフィード家の一室。必要最低限の調度品の並べられた所だ。

フレンとアレンが話すのは決まってこの場所だ。互いの自室で話すことはない。

向かい合う形で座り、顔を見合う。視線がぶつかり、緊張感が部屋を包み込む。

「…自由にしなさい。だが、シルフィード家の名は出すな。あくまで、お前個人のやる事だ」

「…ありがとうございます」

歯切れ悪く、フレンは礼を述べた。

シルフィード家の協力は得られなかった。が、自由に行動する許可は得た。

収穫はあったと切り替え、フレンは立ち上がって一礼し、扉へと歩を進めた。

「……だが」

フレンがノブに手を掛けた時、アレンがそう口を開いた。フレンは振り返り、義父を見る。

「個人としては、僅かだが協力する。シルフィード家当主としてではなく、アレン・シルフィード、一個人として…」

想像もしない言葉だった。しばらくの間、その言葉を出来なかった。言葉を理解した時、フレンは無意識に深く礼をしていた。だが、無言だった。

義父の意図は分からない。しかし、有り難い事だ。

フレンは扉を開き外へ出た。アレンは、決してフレンを見なかった。フレンが出たのを音で確認し、アレンは頬笑んだ。

「……本当に…」

小さな声。何かを思い出すように、アレンは呟いた。

同時刻。

メイド達の集まる更衣室。ラウニーは三人のメイドを捕まえていた。

その三人は何れも妖精。ラウニーの後輩にあたる者達だ。

「ラウニーさん。ホントですかあ？それえ……」

舌足らずな口調。外見十四歳程度。紫髪の妖精『メア』は、訝しげにラウニーを見ながら言った。

「いやいや、イケメンだって、本当に！」

強く、ラウニーは断言する。

「だがしかし、相手はエルフで、しかも凶人だろう？」

メアと同じく十四歳程度、だが、彼女よりしつかりとした口調。鋭い眼光を持つ黒髪の妖精『リア』は、眉をひそめながらそう尋ねた。

「悪い子じゃ無いから大丈夫だって」

リアの言葉を、ラウニーは笑い飛ばす。

「でもでもっ！許可とか無いんスよね？」

一人だけやたら元気な、十歳程のオレンジ髪の妖精『ノア』は、ラウニーの服にしがみ付きながら聞く。許可など言いながら、その瞳は、好奇心を隠せずに輝いている。

勿論、ノアだけではない。後方に控える二人も同様に、瞳を輝かせている。

「…そんな事言って、アンタたち…」

ラウニーも彼女達の性格はよく知っている。理解した上で、ラウニーはほくそ笑みながらこう言った。

「…大好きでしょ？こういうの」

その言葉を聞いた瞬間。

三人の妖精の口元に、怪しい笑みが浮かんだ…

「あのお…お願いできますか？」

スフィアは二人の兵士を上目遣いで見、少し甘えた口調で言った。

見上げられた二人の兵士は迷わず頷いた。

何故か姿勢がやけに良い。それどころか、敬礼までしている。

「ありがとうございますっ」

パツと、明るい表情を見せるスフィア。兵士達はだらしく表情を緩める。

むさ苦しい男達の中にいるスフィア。可愛らしい容姿の彼女は、兵士達からすればアイドルなのだ。

今や、ファンクラブが存在するという噂まである。

兵士二人はスフィアに手を振りながら、名残惜しそうに去って行く。

それをスフィアは、笑顔で手を振りながら見送った。

そして、笑顔を崩さず。

「はっ…、男って単純だな」

小さな声で、そう呟いた。

「いやあゝ、落ち着くなあ…」

湖の畔。ミリアは大きく背伸びをする。綺麗な空気を肺一杯に吸い込み、心からの安らぎを得ていた。

「『ミリア』は…、ここから始まったんだから…」

視界一杯に広がる湖を、ミリアは目を細めて見つめる。口元には、

何かを懐かしむような微笑。

「何サボってんの……」

ミリアがもう一度空気を味わおうと、息を吐き出した時、背後から呆れたような声が聞こえた。

「皆が協力してくれてるのに……」

声の主、奏は、ミリアを非難した。だが、ミリアは気にした様子もなく。

「ん…、まあ、ある程度の休憩は必要だろ？」

そう言った。

「いや、それどころじゃないでしょ。今は……」

そこまで言って、奏は諦めた。多分、何を言ってもミリアは動かない。

ミリアから感じられる雰囲気はいつもとは違う。

普段の傍若無人な雰囲気は消え去り、どこかしおらしい。

「あ、…ここって、私達が初めて会った場所だよな？」

よく周囲を見回し、奏は気付いた。

「何だよ…、今更気付いたのか？」

不満げな声を上げるミリア。だが、仕方ないのだ。

「アンタあの時、私の頭を氷で殴ったでしょ…」

奏が目覚め、ミリアと出会い、そして…殴られた。

そこから奏の記憶は飛んでおり、気付ばミリアの自宅だった。

「あゝ…、んな事もあったっけか？」

遠い目をするミリア。しらを切るつもりだろうか。

「…もういい。…それよりアンタ…」

時刻は十一時頃。ふらりと城を抜け出すミリアを見つけ、奏は後をつけた。

盗み聞くつもりは無かったのだが、偶然にもミリアの不可解な言葉を聞いたのだ。

「『ミリアはここから始まった』って、どういう事？」

「…何だ、聞いてたのか」

ミリアが溜め息を吐き、そして顎に手を当て、何かを考える。奏は急かす事なく、ミリアが話し始めるのを待った。

「…んまあ、俺が話さなくても誰かが話してたか。別に隠すつもりも無かったし…」

「…？」

ミリアの呟きに、奏は首を傾げる。そんな奏に、ミリアは向き直り、一つ咳払いをし、静かに話し始めた。

「…分からなかったんだ、自分が誰なのか。一体どこから来たのか…、気付いたらここにいた」

「えっ…」

ミリアの言葉の意味を呑み込めず、奏は小さく声を上げた。いや、彼女の言葉から連想できる物はある。だが、信じられなかった。

「それって…」

ミリアが珍しく、自嘲気味に笑い。奏に答えた。

「ああ、『記憶喪失』ってやつだよ…」

その瞬間。

二人の間を、風が駆け抜けていった……

「あんれまあっ！使者様じゃないかね？！」

奏がハーガル城の食堂に足を踏み入れた時、奥から、そう女性の声が聞こえた。

声の主、小太りの中年の女性は、慌ただしく奏の下へ駆けてきた。

「お、マリーおばさんじゃん」

奏の後から入ってきたミリアは、女性を見てそう言って、ぴっと手を前に出し、軽く挨拶した。

マリーと呼ばれた女性は、ミリアを見、より確信を得たようだ。

「ミリアが一緒って事は、やっぱりアンタが使者様？」

奏より少し背の高いマリーは、胸を張りながら聞いた。この聞き方だけで、マリーという人物像がよく分かる。

誰に対しても別け隔てなく接する良き母親。そういった印象だ。

後頭部でまとめた黒髪。少しそばかすのある顔。その顔には人懐っこい笑みを浮かべている。

「…あ、はい。奏です。よろしく願いします……えっと、マリー……さん？」

若干マリーの勢いに押されながら、奏は自己紹介をした。

奏の挨拶を聞き、マリーは大声で笑った。奏は呆気にとられ、口を半開きにしてマリーを見つめた。

「なんだいなんだいつ、固いねえ。そんなに緊張しなさんなっ」

笑いながら奏の肩を叩くマリー。力が強く、顔をしかめそうになったが、何とか堪え、奏は薄く笑みを浮かべた。

「それにしても…」

不意に、マリーは奏の顔を覗き込んだ。そして、まじまじと奏の顔を観察する。

「噂には聞いてたけど、ホントに普通の女の子なんだねえ…、家の娘と変わらないじゃないかい」

「?…娘さんがいらっしやるんですか?」

マリーの言葉に、奏はそう返した。マリーは手を離し、その手を額に当てた。

「ああ、居るんだけどね?…これがまた言うこと聞かなくて」

深い溜め息を吐くマリー。表情のよく変わる人だ。奏はそう思った。

「マリーおばさん。俺達、飯食いたいんだけど?」

ミリアが言った。その言葉を聞き、マリーは思い出したように奏に尋ねた。

「しかし、何でもまた食堂なんか？使者様は豪華な料理が部屋にくるでしょうに…」

奏の部屋に運ばれてくる料理は、国王の食事等を作る、こことは違う厨房で作られている。

兵士達が頻繁に使うこの食堂は、使者である奏が来るような場所ではない。マリーはそう言いたいのだ。

「友人と待ち合わせがあるので。…それに、あんなに豪華な料理は、私に似合わないと言つか…」

苦笑しながら奏は答える。

マリーは、奏が想像以上に『普通』だったため、目を丸くした。

「アンタ、いい子だねえ…」

マリーは感心したようにそう言った。

「家の娘だったら、きっと贅沢三昧だよ」

「はあ…」

奏は今まで中流家庭で育ち、豪華な料理など食べた事などない。口に馴染んでいないのは当たり前。それに、あまりに豪華で気が引ける。

そんな、奏本人が当たり前だと感じている事が、マリーには好感を与えたようだ。

「…よしっ！遠慮せずにたつくさん、食べていきな！」

ピタンと、マリーが奏の背中を叩いた。あまりに大きな音に、食堂内にいた兵士達が、何事かそこちらを見る。

「うう……」

奏は呻いた。背中が熱い。おそらく、背中には綺麗な紅葉が出来ているだろう……

「つう……」

「だ、大丈夫か？」

椅子に座って、ミリアは奏の背中に氷を当てながら尋ねた。

「あ…、うん。もう大丈夫……」

苦笑しながら、奏は答える。背中には、まだ痛みがあるが、ミリアに聞きたい事があったため、少し無理をする。

「あの人、馬鹿力だからなあ……」

「人のことを怪力女と言ったのは誰だ」、そう奏は言おうとしたが飲み込む。

これ以上空気が緩くなったら、話を聞こうにも聞けなくなってしまう。

奏はミリアを隣に座らせた。

まだ込みあつ時間では無いためか、兵士の人数はさほど多くない。広い食堂も、今はがら空きだった。

「…ねえ、ミリア？さっきの話しなだけど…」

「ん？」

何の事か思い出せないのか、ミリアは数秒悩み、それから「ああ…」と、手を叩いた。

「マリーさんの娘さんの話か？」

「違ーーーーーっ!!」

見当違いの話を持ち出され、奏は立ち上がり、突っ込んだ。

兵士が奏を見る。奏は顔を赤くし、音を立てないように静かに腰を下ろした。

「…アンタが記憶喪失って事！」

声のボリュームを抑えつつ、奏はミリアに言った。ミリアは納得したように頷く。

「別に気にする程の事じゃないだろ？」

「アンタが気にしなくても、私が気になるって…」

だらりと、奏は頭を垂れる。自身が真剣になっているのに対し、ミリアがあまりにも楽観的でやるせなくなってきたのだ。

そんな奏を見、ミリアは少し考えて言った。

「…ん、一応俺も昔は気にしたんだぞ？」

「…昔は？」

少し顔を上げ、奏はミリアの顔を見る。ミリアの顔は、何か思い出そうとしているようにも見えた。

「分かんないもんはしょうがない、そう割り切った。…でも」

「？」

はつきりとした言葉の後、ミリアは何故かそれを濁した。奏は何かと首を傾げる。

ミリアは不思議そうな顔をする奏を見て、ゆっくりと言葉を紡ぎだした。

「最近、思い出し始めてるんだ。…少しずつ」

「…本当？」

「…嘘言ってどうすんだよ」

奏の言葉に、ミリアは馬鹿にするように笑った。その様子を見ても、嘘ではないようだ。

「…まあ断片的に、だけどな」

ミリアはそう付け加えた。

「…話してくれる？」

奏が聞くと、

「…全部思い出したら、な…」

ミリアは、小さくそう答えた。

「すみません、遅くなりました」

「こんにちはです」

「ちわ」

奏とミリアが話し終えた頃に、フレン達が現われた。

「こんにちは、フレンさん、スフィア……。……ラウニー、後ろの娘達は？」

それぞれに挨拶をしていた奏の目に、見慣れない三人の妖精が映っ

た。

「はいっ！自己紹介！」

ラウニーが二度、手を叩く。すると、後ろにいた三人の妖精はその場から消えた。

「宵闇のごちよく……、うああ…噛んじやったよお」

「い、いいから続けろっ！」

紫髪の少女が、涙目で黒髪の少女へ助けを求めるが、黒髪の少女はキツイ言葉でそう言った。

「うう……、メア……！」

結局、名前を叫ぶだけだった。

メアは前に出て片膝をつき、右斜め上に両手を突き出した。そして、メアに続き。

「暗闇の中に潜むクールビューティー……リア！」

リアはメアの右斜め後ろに立ち、左手を腰に当て、右手を天高く突き出した。そして最後に。

「輝ける太陽の日差し……！ノアっス！」

ノアが二人の前に立ち、両手を大きく広げた。

「ちょっと待て！ノア！」

「ひどいよぉ…ノアちゃん…」

「へっへっ、目立った者勝ちっスよ？」

やりたい放題やり、三人は口喧嘩を始めた。それを見た奏は、ミリアに。

「…闇が被ってるね」

そう言った。ミリアは、ふっと息を吐き。物憂げに、

「…そこかよ」

そう呟いた。

「…それは意外だな」

喧嘩をしている三名を放置し、奏、ミリア、フレン、スフィア、ラウニーは、それぞれの収穫を報告していた。

ミリアは、フレンからの報告を耳にした時、声を漏らした。

「養父様の意図は分かりませんが、こちらの味方について下さった事は間違いないです」

フレンは奏に向かってそう言った。
奏は記憶を探る。そして、思い出した。

「…シルフィード家って、この国屈指の名家、ですよ？」

シルフィード家。ウィルネスーの騎士一家。現当主アレンを筆頭に、その子供達、親類全員が騎士団に名を置く。過去には女性も居たらしい。

「ええ、詳しい説明は省きますが…、国王にも進言でき、その辺りの貴族よりも力を持っています」

あくまで養子であるフレンは、興味が無さそうにそう言った。いや、興味が無いと言うよりは、溶け込めない。そういった感じた。

奏は、フレンに対して何も出来ない自分を、とても弱いと思った。

「まあ、些末な事は置いておきましょう。…クウインを救ける事が最優先です」

「…はい」

次の言葉で、フレンは話を切った。それには、明らかな拒絶、大きな隔たりを感じる。

奏は頷くが、腑に落ちない、巨大なわだかまりが胸に残った。

「…で！スフィア、そっちはどうだった？」

ミリアが場の空気を変えるため、あえて明るい声でスフィアへ振った。

「こつちですかあ？…まあ、一言で言えば…」

最初は愛らしい笑顔で笑っていたスフィア。しかし、途中で目を細め、口の端を歪め、

「…男は大抵が馬鹿」

そう言った瞬間、場の空気が凍り付いた。

「悪戯娘三人衆…？」

極寒の空気から回復した頃、ようやく口論を終えた三人が戻ってきた。

メア、リア、ノアが自慢げに頷く。それを見たミリアが言う。

「またの名を、『無属性三人娘』」

「ミリアさんひどいい？！」

「それを言うなー！」

「事実っスけど、触れないでほしいっスー！」

ミリアに対し、非難の声を上げる三人。奏は首を傾げた。

「無属性？」

奏が口にした疑問に、ラウニーが答える。

「普通は何かしら属性があるモンなんだけどね？この娘達はちよいと特殊で、全くそれが無い」

ラウニーの言葉を聞いた三人は、がつくりと肩を落とす。それぞれの瞳には、うつすらと涙が浮かんでいる。

「戦力外」

ミリアはにやけながらラウニーを指差し、そう言った。

奏は、「真面目な空気を作る気はあるのか？」と、思った。

奏はラウニーを見る。ラウニーは額に青筋を浮かべながらも耐えていた。喧嘩を吹っかければ瞬殺される。そのことは、ラウニーも十分に理解しているようだ。

「は、話を…進めるよ？」

「ほいほい、どうぞ？」

怒りを堪えるラウニーに対し、ミリアはあっけらかんとした様子で答える。

ラウニーは溜め息を一つ、表情を整え、話を進めた。

「これから目覚めるのか、あるいは、力が弱すぎて、表へ出ていないのか…」

「いずれにせよ、今んとこ『能力では』力にならない」

ラウニーの言葉をミリアが引き継ぎ、結論を述べた。だが、含みのある言葉だ。

「…能力では？」

気になった部分を、奏は尋ねた。すると、三人娘は口元を歪めた。
…嫌らしい笑みだ。

「例えばあ…、あつ！セリーヌさん！」

メアが大きな声を上げる。メアの視線の先には、食堂の出入口で辺りを見渡すセリーヌがいた。

セリーヌは奏達を見つけると、微笑みを浮かべながら、奏の下へやってきた。

「こちらにおられたのですね、奏さ…」

「ちよつといいつスか、セリーヌ神官長？」

言葉を遮られ、不思議そうな顔をするセリーヌ。三人娘は、セリーヌを引つ張り、食堂の隅へ連れていった。

何度か言葉を交わした後、セリーヌが小さく声を上げた。そして、顔を真っ赤にしながら戻ってきて、こう言った。

「…今日は…、全額私が支払います…」

奏は、セリーヌの背後にいる三人娘を見た。

リアが、何やら本をヒラヒラとさせている。それには、はつきりとかう書かれていた。

…『ネタ帳』と。

食事を終え、一息ついた所で、セリーヌが口を開いた。

「奏さん。事は順調ですか？」

『事』。間違いなく、セリーヌはクウィン救出の事を指してそう言った。

神官長であるセリーヌにはあまり言いたくはなかったが、ばれていくなら仕方ない。奏は正直に経過を報告した。

「協力してくれる人を探している所です」

それを聞いて、セリーヌは笑顔で頷いた。しかし、笑顔を向けられた事に、奏は違和感を感じた。その思いは、自然と口から出ていた。

「…止めないんですか？私達がやってる事…」

奏のその言葉に、全員が息を呑む。そして、視線がセリーヌへ集まる。

セリーヌが口を開く。だが、セリーヌの口から出たのは、答えではなく問いだった。

「…何故、止めなくてはいけないのですか？」

「えっ…」

奏の脳内では、セリーヌの立場や性格、その他諸々の理由が渦巻くが、上手く言葉に出来なかった。

言葉を探し、口をパクパクと動かしているの奏を見て、セリーヌは

「大体、奏さんとそのエルフの青年が友達なら、私も友達ではないですか。…何故、私には相談して下さらなかったのですか？」

若干拗ねたように言う。外見の年齢より、幾分か若く見えた。

見たことの無いセリーヌの表情に、奏の脳はさらに混乱する。

「え〜っと…、あの〜、その〜…」と、しばらく繰り返した後、奏は。

「…すみません」

そう言つて、セリーヌに頭を下げた。

「宜しい」

サッと、いつもの表情に戻るセリーヌ。少し、奏を弄って遊んだのだろう。

奏もそれには気付いたが、深く追求するのは、止めておく事にした。

不意に、奏の手が、セリーヌの手によって包まれた。奏は驚く。セリーヌはじっと奏の目を見つめている。その目は、真剣だ。

「奏さん、私は一人の神官として、世界の平和を願っています…」

目を瞑り、唱えるような声でセリーヌは話し始める。

兵士の沢山いる食堂の中。漏れないような、小さな小さな声だが、不思議と誰も聞き漏らさなかった。

「そこに、エルフも何も関係ありません。…私個人は、国王と同じく賛成です」

優しい、聞いている者を和ませるような声。セリーヌは目をゆつくりと開き、細めながら奏を見た。

だが、溜め息を一つ吐いた後、彼女の表情は厳しいものに変わった。

「ですが……、貴方の行為が、国内の混乱、内紛を引き起こすと、理解しているのですか？」

その言葉に、奏は口をつぐむ。奏の行動による、一番の問題を、一体どうやって解決するのか。セリーヌはそう聞いたのだ。

勿論、奏もそれが問題だとは理解している。

ミリアは以前、「後から考えればいい」と言った。だがそれではない。現実には甘くないのだ。

「問題は、先延ばしに出来ない。いえ、してはいけない事は分かっています」

「…その様子では、良い案は浮かんでいないようですね」

奏は俯く。他の面子も言葉を無くす。

人集めも重要だ。しかし、話を通さなければならぬ。

避けたい事だが、避ける事はできない。

「…なあ、一晩考えてみたんだけどよ」

一人、全く空気にそぐわない口調の奴がいた。…ミリアだ。

皆が一斉にミリアを見る。だらしなく椅子に座り、右手の小指で耳を掻いていた。

全員の肩から力が抜け、空気が弛緩する。その空気の中、やる気なさげにミリアは言う。

「後回しって言った俺が言うのもなんだけどさ、こういう時は、ダメ元で言ってみるしか無いんじゃない？」

ミリアの案に、全員が考え込む。

最初に口を開いたのはセリーヌだった。

「……ミリアの言う通りかもしれませんがね」

フレンが頷き、その言葉を引き継ぐ。

「確かに、下手に動いて、確執を残すよりは良いかもしれませんが」

それを聞き、スフィアが不安そうにフレンを見上げる。

「でも、賛成して下さるでしょうか…」

無能三人娘が、ネタ帳をひらつかせる。

「そこはあゝ」

「この！」

「ネタ帳をつー！」

「使うなあっ！」

スパーンツ…、ラウニーが出所不明のハリセンで、三人娘の後頭部を叩く。実に良い音だ。

コホンと、奏が一度咳払いをし、場の空気を整える。

「全部認めてもらえなくても、せめて妥協案を出せれば…」

「どっちにしても、難しい事には変わり無いかもしれないけどな」

奏が話す途中で、ミリアが割って入る。奏は少しむっとするが、すぐに表情を引き締めた。

「ミリアの言う通り、難しいと思います。でも、一度すると決めた事を、諦めたくないんです。…皆さん…」

そこまで言って、奏は言い淀む。「あの、えっと…」と、口からは必死に言葉を探す様に、声が漏れていた。

十数秒後。やっと奏は皆に言った。

「その…、協力したら、立場が危なくなるかもしれないので、嫌な人はここで抜けて下さい…」

奏の言葉を聞いて数秒、皆が一斉に吹き出した。

ミリアとラウニー、そして三人娘は腹を抱えて笑い。フレンはそれ程ではないが、目に涙を浮かべながら笑っている。セリーヌとスフィアは、必死に笑いを堪えるが、やはり無理のようだ。

奏は八人を見、何故笑われているのか分からずに、キョトンとしている。兵士達が何事かとこちらを見る。しかし、構わず笑い続ける八人。

やがて、涙を拭い、息を荒くしながらミリアは奏に言った。

「ここに来て、何、人の心配してんだよっ。…皆、そんなの承知で手伝ってるんだってのっ！」

ミリアに続き、ラウニーが賛成の声を上げる。

「そうそう、こんな面白い事、乗らないわけにはいかないでしょ？」

ラウニーの言葉に、三人娘が力強く頷く。

次いでフレンが、優しい笑顔を見せながら話し始める。

「形はどうであれ、僕と彼は友達です。これは、僕自身がやりたいからやっているだけで、カナデさんが気にする事ではないですよ？」

フレンの言葉を聞いた後、スフィアが微笑む。

「私達は、それが正しいって、そう思ったからここにいます。つまり、全員がカナデさんを信じてるんですよ」

セリーヌも頷く。

「聖書には、エルフを迫害しろとは書いてありませんし……」

「素直になれよ、神官長」

セリーヌの言葉に割り込み、茶々を入れるミリア。

エルフを迫害しろとは書いてない。つまり、結局は個人の意識なのだと、奏は思った。

奏は、強く拳を握る。ここまで来たら、後には引かない。覚悟を決めた。

「みんな……」

奏は全員に、顔を向ける。瞳には、一切の迷いが無くなっていた。

「私の我が儘に…、力を貸して下さいっ」

「こっちも、力を貸すよ!」

奏が言葉を発した直後、背後から声が聞こえた。

マリーだ。

「何だか面白そうじゃないかい。勝手に交ざらせて貰うよ?」

マリーの突然の登場に、皆、目を丸くする。当の本人は、誇らしげに胸を張り、満面の笑みを浮かべているわけだが…。

「ますます気に入ったよ!…あたしが手伝ったから、大船に乗ったつもりでいな!」

大笑いをしながら、奏の背中を叩くマリー。甲高い音が響き渡り、奏は顔をしかめる。

紅葉二枚目。

そんな奏を見て、ミリアは呆れたように呟く。

「…締まらねえなあ」

「それにしても、良いのかよ神官長」

「何がですか？」

セリーヌとミリアは、食堂の壁にもたれかかり、奏達を見つめていた。

奏達は宴会のように騒いでいる。最も、一番騒いでいるのは、ラウニーと無能三人娘なのだが。（奏は専ら弄られ役）

「本当に良いのか？…奏を止めなくて」

流し目でセリーヌを見るミリア。セリーヌは表情を変える事なく、口元に笑みを浮かべた。

「これは持論なのですが、…本来教会は中立に立つべきだと思うのです」

セリーヌはミリアを見る。普段の説教の時には見せない、優しい微笑み。

「カナデさんの言う事は、私の理想と同じでした。…きっと、神もそれを望んでいるでしょう」

心からそう思っている。それが分かる言葉だった。

「……つたよ……」

「え？」

ミリアが何か呟いた。あまりにも小さな声で、セリーヌは聞き取ることが出来なかった。ただ、今まで見たことのないミリアだった。セリーヌはそう感じた。

ところが、すぐにいつものミリアに戻る。幻だったのだろうか、セリーヌは思った。

「随分、貴方も丸くなりましたね…」

「…まあ、あんな人畜無害と一緒にいたらな…」

セリーヌに答えながら、ミリアは奏を見る。やはり、奏の影響なのだろう。

「…では、これを期に、神の尊さを教えて差し上げましょう」

「…………それは勘弁」

苦笑いを浮かべながら、ミリアは手をひらつかせた。

奏達が食堂で騒いでいる頃…

「…国王、ご指示を」

謁見の間。宰相アゼウスの言葉に、ハーバレスは黙していた。

アゼウスは小柄な細身、歳は六十代。禿上がった頭部を晒し、瞳には強い光を持っている男だ。

圧倒的な発言力、そして、冷静な判断。能力を見れば、大変有能な男だ。事実、彼の判断がなければ国は成り立っていない。そう言っ

ても過言ではない。

いつもならば、彼の意見に対し、素直に耳を傾けるハーバレスだが、今回ばかりは苦悩していた。

有能な彼の意見は参考にするべきだ。だが、問題は彼の思想だった。

「国民には知られておりませんが、決して許される事ではありません
ん」

淡々と自身の意見を述べるアゼウス。彼の言っている事は間違っていない。国民の意志も、大半が、いや、全てがそうだろう。

「国民に動揺が奔らぬよう、場所は演習場がよろしいでしょう」

彼は『人間繁栄派』。要は奏とは真逆、エルフは忌むべき者、決して相容れぬ者達だと考える思想だ。

国民の総意、そうとも呼べるであろう。

「…後は国王の指示だけでございます」

ハーバレスは唇を噛む。アゼウスはハーバレスの様子の変化に気付かない。

「さあ、国王…」

最後に、アゼウスは言葉の語気を強め、はっきりと言いつけた。

「処刑の号令を」

第八章　始動（後書き）

叱咤、励まし等、頂ければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9294h/>

WorldChange

2010年10月17日06時46分発行